

空港線関係埋蔵文化財発掘調査報告書4

久保園遺跡 3

—第3次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第837集

2005

福岡市教育委員会

空港線関係埋蔵文化財発掘調査報告書 4

く ぼ その 久保園遺跡 3

—第3次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第837集



遺跡略号 KBZ-3
遺跡調査番号 0350

2005

福岡市教育委員会

序

西日本屈指の都市として今も発展を続ける福岡市は、古くより大陸文化の受け入れ口の役目を果たし、豊かな文化財が今なお地下に眠る街でもあります。都市の発展と埋蔵文化財の保護は相容れないことが常ですが、両者が共存する歴史豊かな住みよい街づくりを心がけ、これを子供たちに伝えていくことが現代を生きる我々のつとめであると言えましょう。

福岡市教育委員会では埋蔵文化財を保護するとともに、開発によってやむなく破壊される場合には事前に発掘調査を行い、記録の保存に努めています。本書は都市計画道路福岡空港線改良工事にともない実施した調査成果について報告するものです。調査では弥生時代～古墳時代の集落跡を中心とする遺構を確認し、鐔形土製品などの土器が出土するなど、大きな成果をあげることができました。

調査に際し、本市土木局道路建設部東部建設課をはじめとする関係者、ならびに地元住民の皆様方にご理解とご協力を頂き、調査を円滑に進めることができました。心よりお礼申し上げます。この報告書が広く活用され、文化財保護の理解を深める一助となれば幸いと考えます。

平成17年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 植木 とみ子

例 言

1. 本書は平成15(2003)年9月25日から同年11月21日に福岡市教育委員会が行った、博多区東平尾2丁目4番地内所在の久保園遺跡第3次発掘調査の報告書である。
2. 調査と整理報告は都市計画道路福岡空港線道路改良工事に伴う令違事業として行った。
3. 検出遺構には発見順に3桁の連番号を与え、遺構の性格を示す記号として、SC(竪穴住居跡)、SD(溝・河川)、SE(井戸)、SK(土坑・土壇墓)、SX(性格不明遺構)を頭に付した。柱穴には別途に101から番号を付し、頭に記号SPを付した。
4. 土壇墓から出土した鉄刀の取り上げは福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏に依頼した。また、他の鉄製品を含めたソフトX線撮影等の分析と、鋸落とし等の保存処理も合わせてお願いした。
5. 出土した木材の樹種同定はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
6. 本書に使用した遺構実測図の作製は、吉武 学、坂口剛毅が行った。
7. 本書に使用した遺物実測図の作製は、吉武、田中克子が行った。
8. 本書に使用した写真の撮影は、吉武が行った。
9. 本書に使用した図の製図は吉武、田中が行った。
10. 本書に使用した方位は全て磁北である。
11. 本書の執筆・編集は吉武が行った。
12. 本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理・活用する。

遺跡調査番号	0350		遺跡略号	KBZ-3	
調査地地籍	博多区東平尾2丁目4番地内		分布地図番号	22 上白井 0083	
開発面積	600㎡	調査対象面積	600㎡	調査面積	373㎡
調査期間	2003年(平成15年)9月25日～2003年(平成15年)11月21日				

本文目次

第一章 はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
3. 久保園遺跡第3次調査地点の位置と周辺の遺跡	2
第二章 発掘調査の記録	6
1. 発掘調査の方法と経過	6
2. 基本層序	6
3. 検出遺構と出土遺物の概要	6
4. 検出遺構と出土遺物	7
(1) 竪穴住居跡	7
(2) 溝	42
(3) 土坑	62
(4) 井戸	68
(5) 土壇墓	69
(6) その他の出土遺物	71
第三章 おわりに	71
附. 久保園遺跡から出土した木製品の樹種 バリノ・サーヴェイ株式会社	75

挿 図 目 次

Fig.1	久保園遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)	3
Fig.2	久保園遺跡第1～3次調査区周辺の地形 (1/5,000)	3
Fig.3	周辺の地形と近隣の遺跡 (1/5,000)	4
Fig.4	第3次調査区の位置 (1/1,000)	5
Fig.5	遺構の配置 (1/100) と土層略測 (1/40)	(折り込み)
Fig.6	SC-006 (1/40)	7
Fig.7	SC-006出土遺物 (1/3)	7
Fig.8	SC-010 (1/40)	9
Fig.9	SC-010出土遺物 (36は1/2、他は1/3)	10
Fig.10	SC-012 (1/40)	12
Fig.11	SC-012出土遺物・I (1/3)	13
Fig.12	SC-012出土遺物・II (1/3)	14
Fig.13	SC-013 (1/40)	15
Fig.14	SC-013出土遺物 (73は1/1、他は1/3)	16
Fig.15	SC-014 (1/40)	17
Fig.16	SC-014出土遺物 (89は1/1、88・90は1/2、他は1/3)	18
Fig.17	SC-015 (1/40)	19
Fig.18	SC-015出土遺物 (1/3)	19
Fig.19	SC-016 (1/40)	20
Fig.20	SC-016出土遺物・I (1/3)	21
Fig.21	SC-016出土遺物・II (1/3)	23
Fig.22	SC-016出土遺物・III (1/3)	24
Fig.23	SC-016出土遺物・IV (1/3)	25
Fig.24	SC-016出土遺物・V (1/3)	26
Fig.25	SC-016出土遺物・VI (1/3)	28
Fig.26	SC-017 (1/40)	29
Fig.27	SC-017出土遺物 (1/3)	29
Fig.28	SC-019 (1/40)	30
Fig.29	SC-019出土遺物 (169は1/1、他は1/3)	31
Fig.30	SC-020 (1/40)	32
Fig.31	SC-020出土遺物 (184は1/1、他は1/3)	33
Fig.32	SC-042・043 (1/40)	34
Fig.33	SC-042・043出土遺物 (1/3)	34
Fig.34	SC-045・050 (1/40)	35
Fig.35	SC-045・050出土遺物 (1/3)	36
Fig.36	SC-046 (1/40)	37
Fig.37	SC-046出土遺物 (1/3)	38

Fig.38	SC-049 (1/40)	39
Fig.39	SC-049出土遺物 (221は1/2、他は1/3)	40
Fig.40	SC-052 (1/40)	41
Fig.41	SC-052出土遺物 (1/3)	41
Fig.42	SD-001・030 (1/80)	43
Fig.43	SD-001出土遺物・I (1/3)	44
Fig.44	SD-001出土遺物・II (1/3)	45
Fig.45	SD-001出土遺物・III (1/3)	46
Fig.46	SD-001出土遺物・IV (1/3)	47
Fig.47	SD-001出土遺物・V (1/3)	49
Fig.48	SD-001出土遺物・VI (258~260は1/4、他は1/3)	50
Fig.49	SD-001出土遺物・VII (1/2)	51
Fig.50	SD-001出土遺物・VIII (279は1/1、他は1/3)	51
Fig.51	SD-001出土遺物・IX (1/3)	52
Fig.52	SD-030出土遺物・I (1/3)	54
Fig.53	SD-030出土遺物・II (1/3)	55
Fig.54	SD-030出土遺物・III (1/3)	56
Fig.55	SD-030出土遺物・IV (325~327は1/6、他は1/3)	57
Fig.56	SD-007 (1/80)	58
Fig.57	SD-007出土遺物 (335は1/2、他は1/3)	59
Fig.58	SD-009 (1/80)	60
Fig.59	SD-009出土遺物 (344は1/1、他は1/3)	61
Fig.60	土坑・I (1/40)	63
Fig.61	土坑・II (1/40)	65
Fig.62	土坑出土遺物・I (1/3)	66
Fig.63	土坑出土遺物・II (1/3)	67
Fig.64	SE-003 (1/40)	68
Fig.65	SE-003出土遺物 (374は1/1、他は1/3)	69
Fig.66	SE-031 (1/20)	69
Fig.67	SE-031出土遺物 (1/3)	70
Fig.68	その他の出土遺物 (385は1/1、他は1/3)	71
Fig.69	時期別の遺構分布・I (1/200)	72
Fig.70	時期別の遺構分布・II (1/200)	73

図 版 目 次

扉 久保園遺跡第3次調査区とその周辺（北から）

- | | | |
|-------|------------------------|-------------------------|
| PL.1 | 1. 調査区全景（北から） | 2. 調査区全景（南から） |
| PL.2 | 1. 調査区中央部（北から） | 2. SC-006（西から） |
| PL.3 | 1. SC-010（南西から） | 2. SC-012・013（南西から） |
| PL.4 | 1. SC-016遺物出土状況（北から） | 2. SC-016遺物出土状況（南西から） |
| | 3. SC-016遺物出土状況（東から） | 4. SC-016遺物出土状況（東から） |
| | 5. SC-016遺物出土状況（東から） | |
| PL.5 | 1. SC-016完掘状況（北西から） | 2. SC-019（南西から） |
| PL.6 | 1. SC-042・043（西から） | 2. SC-045（北から） |
| PL.7 | 1. SC-046（西から） | 2. SC-049（北西から） |
| PL.8 | 1. SD-001・030（南から） | 2. SD-001・009・030（北から） |
| | 3. SD-001発掘作業風景（北から） | 4. SD-001遺物出土状況（南東から） |
| | 5. SD-030木製品出土状況（北東から） | |
| PL.9 | 1. SD-007（北から） | 2. SK-004土層断面（北から） |
| PL.10 | 1. SE-003（東から） | 2. SK-031（西から） |
| PL.11 | 1. SK-031副葬遺物出土状況（南から） | 2. SK-031副葬遺物出土状況（南東から） |
| PL.12 | 出土遺物・Ⅰ（縮尺不同） | |
| PL.13 | 出土遺物・Ⅱ（縮尺不同） | |
| PL.14 | 出土遺物・Ⅲ（縮尺不同） | |
| PL.15 | 出土遺物・Ⅳ（縮尺不同） | |
| PL.16 | 出土遺物・Ⅴ（縮尺不同） | |

第一章 はじめに

1. 調査に至る経過

都市計画道路福岡空港線拡幅工事に伴う埋蔵文化財の調査に至る経過については既刊の報告書に詳しいが、平成12(2000)年2月7日に福岡市土木局道路建設部東部建設第2課(現東部建設課)によって建設予定地内の埋蔵文化財の有無についての事前審査申請があり、これを受けた教育委員会文化財部埋蔵文化財課では、事業地内のうち埋蔵文化財包蔵地の可能性がある箇所についての回答を行うとともに、同年2月と5月の2回にわけて調査可能な申請地に対して試掘調査を行い、周知の埋蔵文化財包蔵地に隣接する2地点で遺跡の存在を確認した。ひとつは北側の席田青木遺跡周辺部分、いまひとつは南側の久保園・席田大谷遺跡周辺部分である。これらに対する道路計画変更等による保存は困難な状況にあることから、東部建設第2課の依頼により埋蔵文化財課が記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなり、用地買収や構造物等の撤去が終了し調査可能となった部分から順次調査を行った。調査は平成12年度より開始し、平成16年度までにこの事業に関して6地点で調査を行い、同年度をもって本事業にかかる発掘調査は全て終了した。また、4力所までが既に調査報告書を刊行しており、平成17年度までに全ての報告書を刊行する予定である。

本書で報告する久保園遺跡第3次調査は、発掘調査を平成15(2003)年9月25日から同年11月21日に、同じく整理報告書作成を平成16年度に、いずれも土木局の令違事業として行った。

2. 調査の組織

調査にあたり、福岡市土木局道路建設部東部建設課、並びに地元住民の皆様にご理解とご協力を頂いた。記して感謝申し上げたい。また、出土した土器や土製品について、福岡市埋蔵文化財センターの常松幹雄氏にご教示頂いた。

調査は以下の組織で行った。

調査委託 福岡市土木局道路建設部東部建設課

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 生田征生(前任)、植木とみ子(現任)

調査総括 埋蔵文化財課長 山崎純男(前任)、山口譲治(現任)

埋蔵文化財課調査第2係長 田中壽夫(前任)、池崎誠二(現任)

調査庶務 文化財整備課管理係 御手洗 清

調査担当 埋蔵文化財課事前審査係 瀧本正志、田上男一郎(試掘・事前協議担当)

埋蔵文化財課調査第2係 吉武 学(調査担当)

調査協力 坂口剛毅(発掘調査員)、池田省三、上野龍夫、江島光子、加藤常信、唐島栄子、坂下達男、佐藤俊治、嶋 ヒサ子、清水 明、大長正弘、高野瑛子、谷 英二、谷 正則、中村尚美、西田文字、布江孝子、野口ミヨ、野田淳一、平川正夫、廣田安平、松永重子、三浦 力、宮崎タマ子、持丸玲子、森田祐子、山内 恵、山崎光一、山下智子、結城フヂ子、吉住政光、吉田恭子、吉田米男(五十音順、敬省略)

整理協力 田中克子(技能員)、上塘貴代子、下山慎子、萩尾朱美、森 寿恵(五十音順、敬省略)

なお、調査にご協力頂いた廣田安平氏は平成16年3月2日にご逝去されました。生前のご厚意に感謝申し上げるとともに、謹んでご冥福をお祈り致します。

3. 久保園遺跡第3次調査地点の位置と周辺の遺跡 Fig. 1~4

久保園遺跡は、福岡空港を眼下に望む月隈丘陵の西側斜面に位置する。月隈丘陵は四王寺山から続き、次第に高度を下げながら北西方面に伸びており、東に宇美川、西に御笠川が流れ、著しく開析を受けて多数の枝丘陵に分かれ、あるものは独立丘陵に、あるものは鞍部で連なる起伏のある丘陵になっている。本調査地点周辺は空港・宅地・運動公園等の建設による地形の改変が著しいが、大正末～昭和初期の地図によれば、月隈丘陵の一端に標高46.83m（現在は42.7m）の天王山を頂点とする丘陵が北西に伸びており、かつて平尾炭坑のあった丘陵北側は急傾斜だが、南側には勾配5%ほどで西に向かって伸びる緩やかな斜面が存在しており、この斜面一帯に久保園遺跡が展開したものと考えられる。尾根線上の標高20m付近には等高線がかなり間隔を開く部分があり、ここに久保園遺跡第1次調査地点が、更にこれより西南西に130m程下った標高8m前後の斜面に第3次調査地点が位置する。

周辺は1972年まで米軍に占有され、返還後、現在東平尾公園となっている公園整備に伴って埋蔵文化財の調査が行われた。これらは「席田遺跡群」と総称され、主に丘陵頂部では甕棺墓や古墳、丘陵中腹では弥生～古墳時代の竪穴住居等の調査が行われた他、大谷（赤穂ノ浦）遺跡では横帯文銅鐻鎧が出土し、青銅器鋳造に関わった有力集団が存在したと見られている。

かつてはこの席田遺跡群に発掘調査が集中した時期もあるが、近年では御笠川氾濫源である沖積地や、北側や南側の丘陵部での調査例が増えた。弥生～古墳時代について概観すると、沖積地では雀居遺跡で標高4.5～5mの沖積微高地を利用した集落・墓地の形成が突帯文期に始まり、弥生時代後期には掘立柱建物群を囲む環濠が巡らされ、古墳時代前期にも集落が継続することが分った。下月隈C遺跡も雀居遺跡と似た立地・集落展開をたどり、加えて水田遺構の検出もある。立花寺B遺跡では福岡平野では珍しい古墳時代中期末～後期初頭の集落の発見があった。これら3遺跡は開発にかかるまで存在すら不明で、例えば福岡空港滑走路下などの沖積微高地上に未知の遺跡が眠る可能性を示している。一方、丘陵部では弥生時代前期に宝満尾遺跡、影ヶ浦遺跡、持田ヶ浦古墳群、上月隈B遺跡で野蔵穴の検出があるが、この時期の住居は不明である。中・後期には席田遺跡群の他、下月隈B遺跡や席田青木遺跡で井戸・溝等が確認されたが集落遺構の検出はなお少く、青銅器を副葬する宝満尾・上月隈遺跡、あるいは史跡金隈遺跡を代表とする土壇墓・甕棺墓からなる埋葬遺構が弥生時代中期を中心として独立丘陵上に多数展開する現象とは対をなさない。とんで、古墳時代後期には総数200基を超えるという持田ヶ浦古墳群などの群集墳が月隈丘陵南部に展開するが、北部では単独ないし数基以下で群集墳を形成しない傾向にあり、ある時期に造墓活動が中断した可能性が指摘されている。

久保園遺跡第1次調査の概要 「久保園遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第91集、1983

今回の調査地点と同じ天王山南側斜面に位置する。野球広場建設により破壊され、一部の調査に留まる。弥生時代中期中頃、中期中頃～後半、中期末～後期前半頃、後期、古墳時代の竪穴住居各1、弥生時代中期後半頃の掘立柱建物2、弥生時代中期後半～後期前半の土器溜3、弥生時代の石棺墓1、13世紀の土壇墓2があり、掘立柱建物の一つは5×8間と大型で、竪穴住居を押しつけて平野部に近い緩斜面の好適地を占有する。土器溜からは祭祀性の強い土器が出土し、この掘立柱建物との関連が考えられる。なお、西隣はかつて林崎遺跡と呼ばれ、造成中に多くの甕棺墓が出土したと伝える。

久保園遺跡第2次調査の概要 「久保園遺跡2・席田青木遺跡4」同上第712集、2002

天王山から西に伸びる丘陵の北西裾部に位置する。道路建設に伴う調査。弥生時代中期後半の溝2、中期末の土器溜1、弥生時代後期初頭と古墳時代初頭の埋没河川2、古墳時代前期の井戸1を検出。河川は丘陵裾を流るるよう流れており、本第3次調査検出のSD-001と連続する可能性がある。

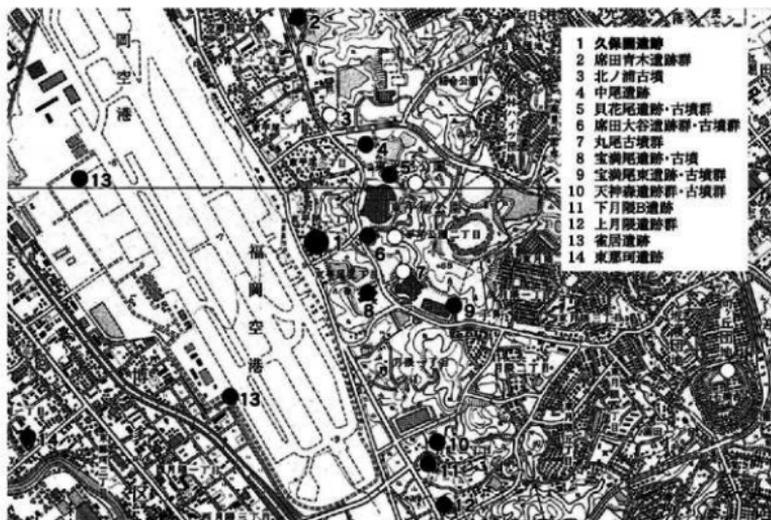


Fig.1 久保園遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)



Fig.2 久保園遺跡第1～3次調査区周辺の地形 (1/5,000) 大正末～昭和初期

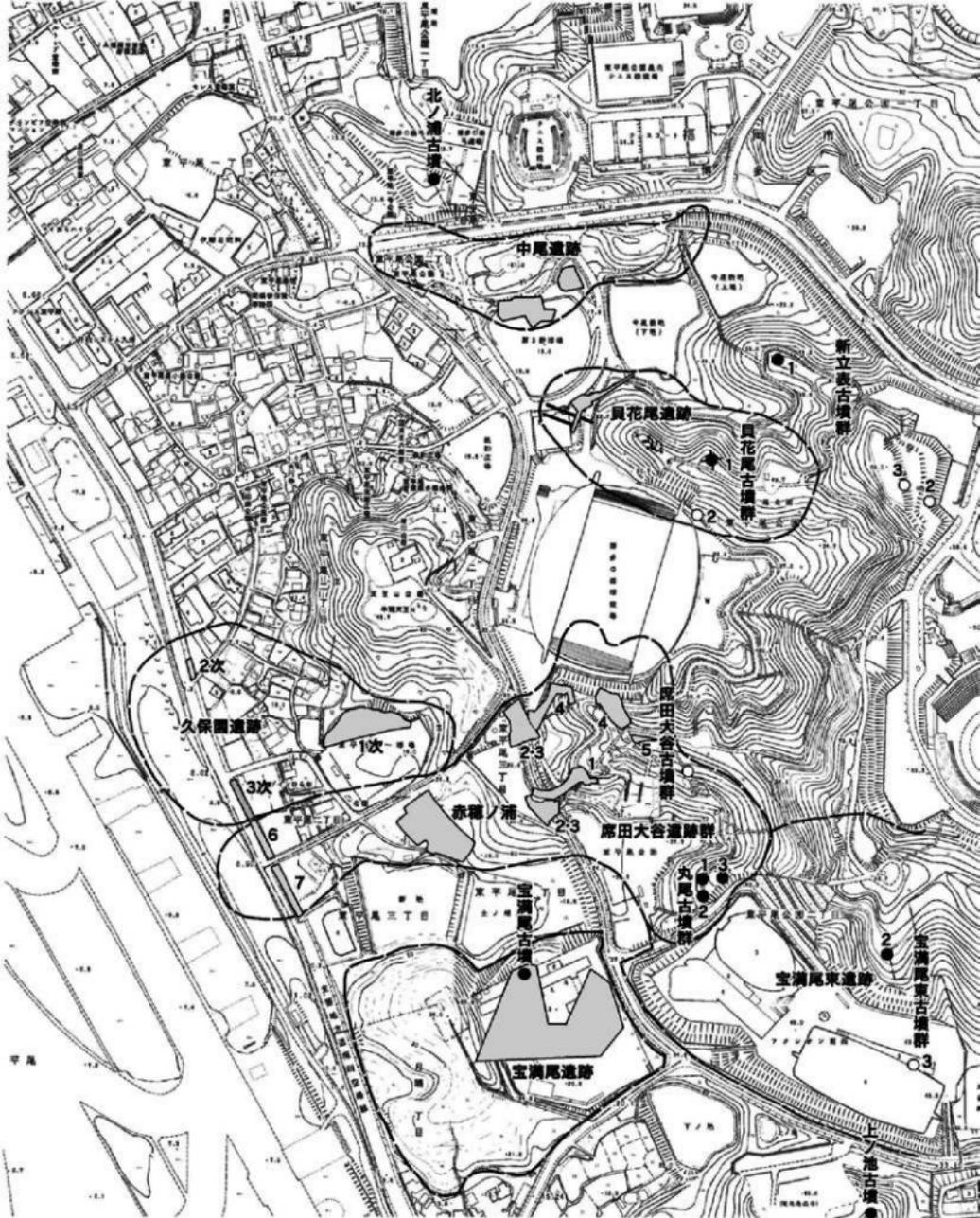


Fig.3 周辺の地形と近隣の遺跡(1/5,000)



Fig.4 第3次調査区の位置 (1/1,000)

第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の方法と経過

今回調査を実施した申請地は、直前まで店舗の駐車場として利用を受けていたため試掘調査ができず、この店舗の改装と時を同じくして短期のうちに調査を行う必要に迫られた。道路を挟んだ北側隣接地の試掘調査では削平が著しく遺構・遺物が皆無であったことや、南側で行った席田大谷遺跡群第6次調査では基盤土が北側へ落ちて北端では谷部となったこと、さらには周辺の地形等からみて、対象地は既に削平され南端の谷部以外には遺構が認められないのではないかと予想されたが、申請地全域に対して表土削ぎを行った結果、丘陵南斜面に濃密に遺構が存在することが明らかとなった。表土は重機を用いて除去し、残土は搬出した。埋め戻しは行っていない。調査範囲は現道路の東に接する東西10~12m、南北約50mの範囲で、引きをとったため調査区は東西6.5~10m、南北48mとなった。北半部には現在も使用されている雨水管が横断しており、帯状に未調査区が残る。南端の谷部では掘削深度が大きく湧水が著しいことから多めに引きをとり、電柱をよけたために調査区西側が凹形へこむ。調査面積は373㎡である。

遺構実測は調査区の形状に合わせて任意に設定した基準線をもとに行い、1/100平板測量、1/20平面実測の他、適宜土層図や個別遺構図等を作製した。その後、土木局より提供を受けた座標データを用いて国土座標（第Ⅱ系）上の遺構の位置を求めた。標高もこれによる。調査中に出土した鉄刀の取り上げは福岡市埋蔵文化財センターに依頼し、他の鉄製品を含めた分析と保存処理もお願いした。また、出土した木製品の樹種同定業務をバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

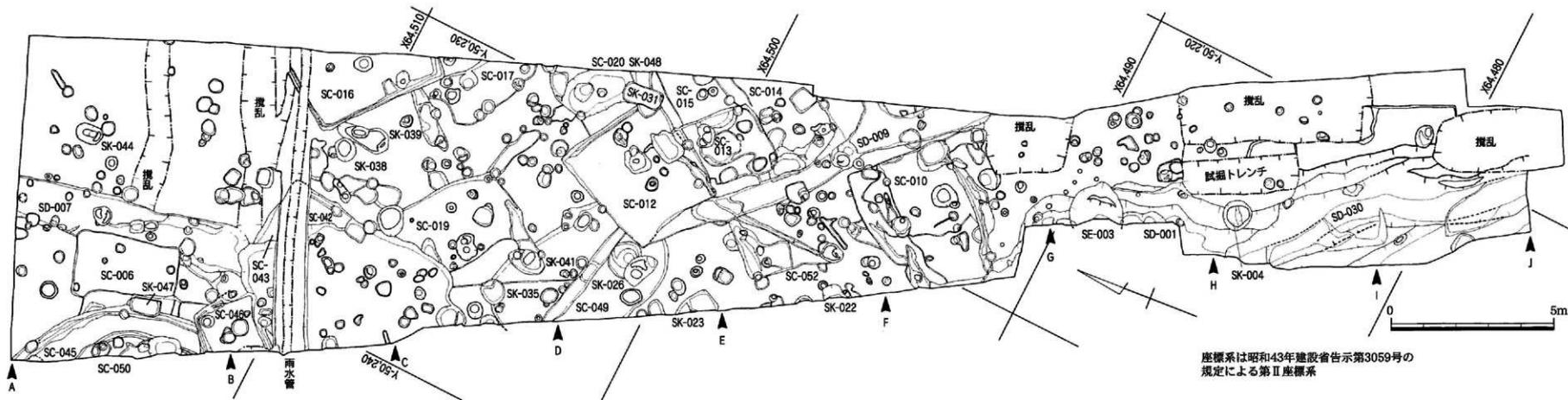
2. 基本層序 Fig.5

地表面の標高は8.3~8.8m、遺構面の標高は7.4~8.4mである。丘陵斜面に立地するため遺構検出面が南西に落ち、調査区内で最大1m弱の比高差がある。北東部は削平されて花崗岩パイラン土が露呈するが、南西部ではこれが二次堆積した粘土層へとかわり、さらに南端ではシルト質に変わる。調査区の北側2/3の範囲には黒褐色粘質土の遺物包含層が存在し、弥生土器を主とする遺物が散漫に出土した。包含層は調査区の北端では5cm、中央部では70cmの層厚があり、南側では水田造営時に削平されて消滅している。包含層は重機で除去したが、調査区西壁面の土層断面観察では包含層上面や包含層中から切り込む遺構は確認できず、削平後に形成された二次堆積層と考えられる。

3. 検出遺構と出土遺物の概要 Fig.5

検出遺構は、弥生時代中期の竪穴住居8・溝2・土坑7、後期の竪穴住居5・自然流路1・溝1、古墳時代前期の竪穴住居2・土坑2、平安時代の井戸1、鎌倉時代の土壌墓1で、他に時期不詳の土坑やピットが多数ある。調査区の北東側は削平により遺構が消滅しているが、斜面が落ちていく西~南側で多数の遺構を濃密に検出した。調査区北西部には西側へ落ちる緩い傾斜がある。南端部に攪乱坑がいくつかみられたが、他では攪乱坑による破壊はほとんど認められない。

遺物はコンテナ213箱分が出土し、うち7割は弥生時代中期後半~後期初頭の自然流路SD-001から出土した。特筆すべき遺物には、この流路より出土した載頭円錐形の鐔形土製品や、弥生時代中期末の溝底面から出土した猪手銀末製品などがある。



座標系は昭和43年建設省告示第3059号の規定による第Ⅱ座標系

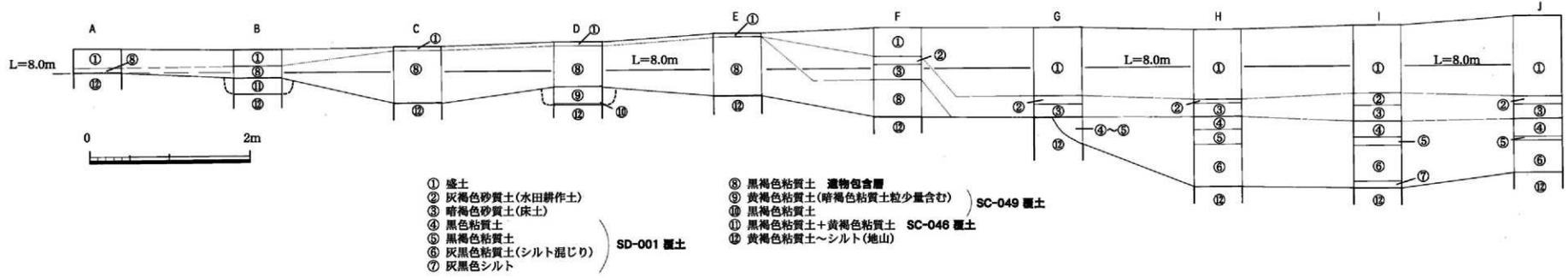


Fig.5 遺構の配置(1/100)と土層略図(1/40)

4. 検出遺構と出土遺物

(1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は計15軒を報告するが、明確に住居跡と認定できるもの8軒、貼床・壁溝・コーナー部などを検出し住居跡の可能性が高いが断定できないもの7軒がある。住居平面形では円ないし楕円形となるものが3軒、方形となるものが12軒ある。前者は弥生時代中期、後者は中～後期・古墳時代前期に属し、後者が敵的に勝るが遺構出土土器の大半は中期のものが占める。削平された斜面上に位置するため遺構の残りが悪く、かつ遺構が密に切り合うため全容を把握できたものは極めて少ない。

SC-006 Fig.6, PL.2

調査区北端部に検出した方形プランの遺構である。竪穴住居跡に含めたが、土坑の可能性もある。SD-007を切っており、西側は浅い落ち込みSX-005に切られる。南北に長い楕丸長方形を呈し、南北3.2m、東西2.1m、深さは15cmと浅い。床面にはピット7個があるが、いずれも深さ20cm以内と浅く、住居の主柱穴とは考えられない。覆土は黒褐色粘質土で、貼床・焼土等は認められない。

SC-006出土遺物 Fig.7

コンテナ1箱分の遺物が出土した。全て弥生土器で、甕、壺、器台、甕棺片などがある。

1～7は弥生土器である。1～5は甕の口縁部小片で、いずれも法量は復元できない。1は口縁が如意形に外反し、口唇下端に僅かに刻目の痕跡を留める。胴部内面はナゲ調整だが、他は器面が剝落して調整不明。反褐色を

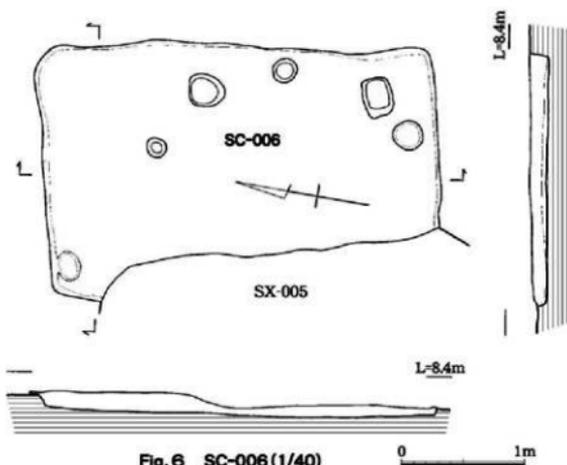


Fig.6 SC-006 (1/40)

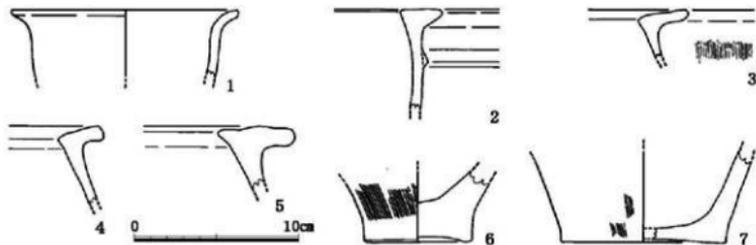


Fig.7 SC-006出土遺物 (1/3)

呈し、胎土に砂粒・雲母粒を極めて多量に含み、焼成は不良。2は口縁が三角形に肥厚し、口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。淡赤褐～黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成はやや不良である。3・4は口縁が「逆L」字形を呈し、上面が内傾する。器面の残りが悪いが、胴部外面縦刷毛目、内面ナデ、口縁部横ナデであろう。鈍い橙褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を含み、焼成良好。5は小児壺相か。口縁は鋤先形をなすが、小片のため傾きは不明である。暗橙褐～黒褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良。6・7は壺の底部片で、外底がやや窪む。外面の縦刷毛目以外はナデ調整。胎土に砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成はやや不良。底径は6が6.6cm、7が10cm。

一部に前期の土器を含むが、弥生時代中期中頃～後半の遺構であろう。

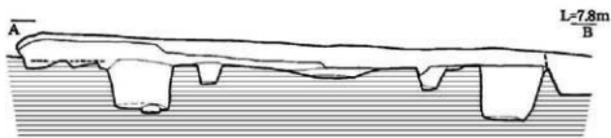
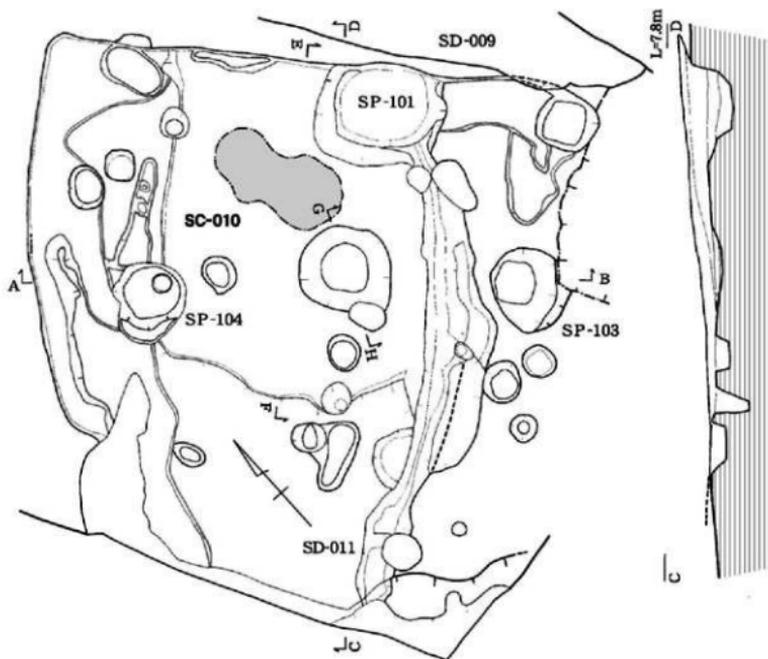
SC-010 Fig. 8, PL. 3

調査区中央のやや南よりに検出した整穴住居跡で、住居跡群の最も南端に位置する。SD-009に切られる。削平により南側は完全に消滅しているが、隅丸長方形プランの住居跡と考えられ、長辺5m、短辺3.4mほどに復元しうる。最も残りの良い北隅で床面まで15cm、ベッドまで6cmの深さが残る。覆土は黒褐色粘質土、地山土は黄褐色粘質土である。貼床は住居の南半分のみ施され、北半は地山削り出しである。北側短辺にベッド状遺構があり、幅1.1mで、床面との段差は10cmを測り、地山削り出しである。おそらく両短辺側にベッド状遺構が付くタイプであろう。壁際の周溝は床面の北隅にのみ認められ、最大幅15cm、深さ5cm弱である。床面中央に円形プランの地床炉が設けられ、覆土に焼土や炭化物を含む粘質土が含まれていた。径0.8mで、断面形は浅皿状を呈し、深さ7cmである。炉跡の北側には床面に密着して炭化物が1.1×0.6mほどの範囲に広がっており、灰を掻き出した痕跡とみられる。住居の長軸上に炉跡を挟んで対峙する2つのピットが主柱穴とみられる。SP-104はベッドと床面の境目に切られており、円形プランで径55～65cm、深さ40cm。底面に径16cmの円形の浅い窪みがあり、柱の圧痕か。SP-103は径68cmの円形プランで、深さ43cm。柱痕跡は確認できなかった。住居跡北東辺の壁際には楕円形プランの土坑SP-101があり、0.9×0.67m、深さ20cmを測る。この土坑の南隅から住居跡外へと続く小溝SD-011があるが、土坑との切り合いがないこと、貼床上面で確認できること、炉跡と主柱穴を避けるように湾曲していることから、住居跡に伴う施設であると判断される。小溝は基盤土の傾斜にあわせて掘られ、幅15～30cm、深さ15cm前後、土坑底面と溝底面との段差は10cm弱で、3.7mの長さを伸びて谷部の落ち際に至る。排水を意図した小溝と考えられる。住居北側のベッド周辺と南東隅には不整形の浅い掘り込み（薄線で示す）があるが、住居に伴うものかどうか判断としない。

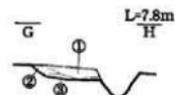
SC-010出土遺物 Fig. 9, PL. 12

コンテナ2箱分の遺物が出土した。大半が弥生土器で、石彫丁、黒曜石チップ、鉄製品の他に少量の土師器が混入している。弥生土器には壺、壺、高坏、器台があり、丹塗り土器が含まれる。

8～33は弥生土器である。8～20は壺の口縁部片で、いずれも小片のため法量は不明である。8～14は断面形が「逆L」字形、15～18は鋤先形、19・20は「く」字形で口縁内面に明確な稜を持つ一器で、15・16以外は小片のため傾きが不正確である。いずれも横ナデ調整とみられるが、磨滅して刷毛目等は観察できない。いずれも胎土に砂粒を多量に含むほか、13・14・16・20を除いて雲母粒を含む。焼成は12を除いて概ね良好である。21～24は高坏である。21は断面が「逆L」字形をなす口縁で、外面ナデ調整か。淡黄褐色を呈し、胎土は精良で、焼成良好。22は断面が鋤先形をなす口縁部片で、磨滅が著しく調整不明。灰褐～暗橙褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を含み、焼成やや不良。23も鋤先形をなすものか。外面丹塗りで暗文が入る。暗赤褐～暗橙褐色を呈し、胎土は精良、焼成



- ① 黒色粘質土(暗褐色土・黄褐色土ブロック含む)
- ② 炭化物
- ③ 黄褐色粘質土(地山)



- ① 黒色粘質土(炭化物粒含む)
- ② 暗赤褐色粘質土(焼土)
- ③ 黒色粘質土(焼土含む)



Fig.8 SC-010(1/40)

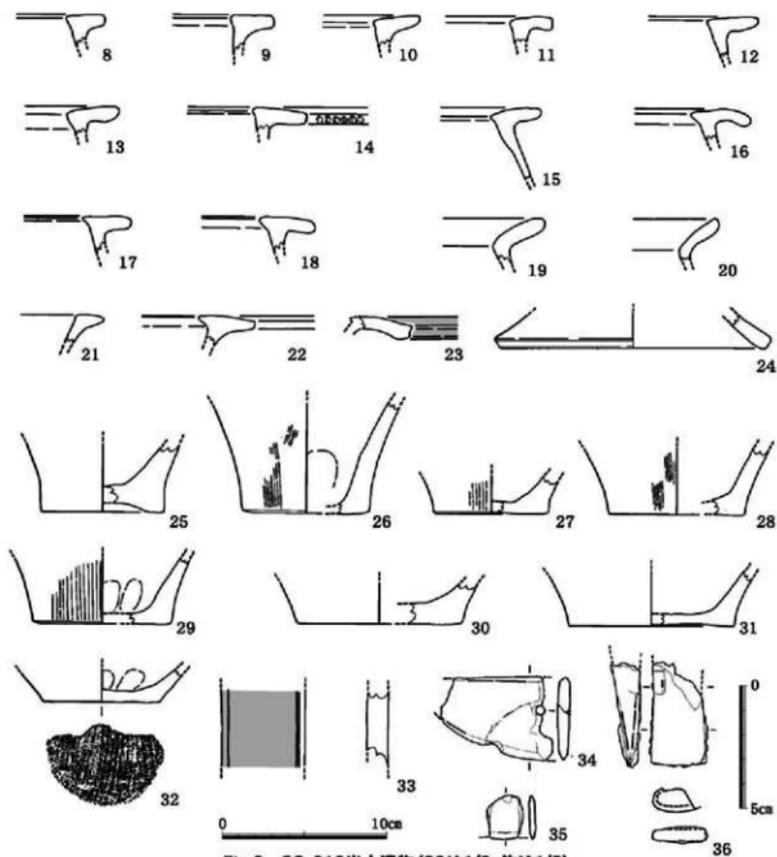


Fig.9 SC-010出土遺物(36は1/2,他は1/3)

不良である。24は脚底部片であろう。端部が面取されやや窪む。磨減が著しく調整痕は不明。淡黄褐色を呈し、胎土は精良で、焼成良好。25~29は甕の底部片で、25は上げ底となるが、他は平底である。いずれも磨減が著しいが、外面刷毛目、内面ナデ調整とみられ、25の外底には指頭痕が残る。胎土に砂粒を少量含む他、27を除き雲母粒を含み、焼成不良である。30~32は壺の底部か。いずれも磨減して調整は不明瞭だが、32の外底には刷毛目が残る。胎土に砂粒を含み他、30はカクセン石粒、31・32は雲母粒を含み、焼成は不良である。33は筒形器台の一部とみられ、縦位の透孔が入る。残りが悪いが外面と透孔内に丹塗りを施す。胎土は精良で雲母微粒を含み、焼成はやや不良である。

34は石庵丁で、穿孔部から折れ、左先端も欠く。穿孔は主に裏面から加え、刃部の研ぎ出しは両面から行う。輝緑凝灰岩製。覆土とSP-101から出土した2点が接合した。35は石庵丁の小片であろう。穿孔部は残らない。刃部の研ぎ出しは両面から行う。輝緑凝灰岩製。貼床から出土した。

36は小型の袋状鉄斧である。基部と先端の一部を欠く。基部はかなり厚みがあり、折り返しの端部が僅かに認められる。長さ4.1cm以上、刃部幅2.2cmを測る。

弥生時代中期の土器を多量に含み、土師器が混入するが、SD-009との切り合い関係、及び形態からみて、弥生時代後期の住居と考えられる。

SC-012 Fig.10, PL.3

調査区のほぼ中央に位置する整穴住居跡である。東隅を中世墓SK-031及びこれと重複する古墳時代前期の土坑SK-048に切られる。南西辺は溝SD-009と切り合うがSD-009はこのあたりで極めて浅くなっており前後関係が明確でない。また、SC-013と切り合う南東辺では遺構検出時にプランを誤認して掘りすぎた。SC-010と同様、削平により残りが悪いが全形は知ることができる。台形状に至る隅丸長方形プランで、長辺3.7m、短辺2.9～3.4m、最も残りの良い北隅で床面まで深さ20cm強を測る。覆土は黒褐色粘質土、地山土は黄褐色粘質土である。ベッド状遺構はない。壁際の周溝は床面の北東辺にのみ認められ、最大幅15cm、深さ2cmほどで極めて浅い。床面には地床炉があり、覆土は炭化物を含む黒色粘質土である。炉跡は不整楕円形プランで径70～90cm、浅く窪み、深さ15cmである。床面には他に焼土や炭化物は認められない。主柱穴は2本で、住居の長軸上に炉跡を挟んで対峙する。いずれも径35～60cmの不整楕円形の浅い窪みを掘り、この北寄りに径15～25cm、深さ35～53cmの円形の柱穴を掘る。住居跡南東辺の壁際には隅丸長方形プランの土坑SK-036があり、径1.1×0.7m、深さ20cmを測る。この土坑の南端から住居外へと続く小溝があり、SC-010同様排水を意図したものと考えられる。遺構検出時に切り合いを誤認したため遺構実測図に不整合があるが、貼床上面で検出しており、住居に伴う溝であろう。屋内の小溝をSD-033、屋外をSD-027として遺物を取り上げた。この溝は基盤土の傾斜にあわせて掘られ、幅14～46cm、深さ5～10cm、土坑と接する部分の底面のレベル差は5cmに満たない。長さ5.3mで、先端はピットに切られたあたりで浅くなって消滅している。貼床は汚れた地山土を用いて5cmほどの厚さに施されており、貼床除去後に窪み等は認められなかった。東コーナー部では床面より少し浮いた状態で遺物がまるとまると出土した。

SC-012出土遺物 Fig.11・12, PL.12

コンテナ5箱分の遺物が出土した。大半が弥生土器で、少量の土師器片と、土製投擲、石器、黒曜石チップ数点を含む。弥生土器には甕、壺、高坏、鉢、器台がある。

37～48は甕である。37～46は口縁部の小片で、法量を復元できない。37は断面鋤先形をなす。磨滅して調整不明。暗橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成はやや不良。38～40は断面が「逆L」字形に屈曲し、40は頸部に断面三角形突帯を貼付する。いずれも磨滅しており調整は不明で、胎土に砂粒・雲母粒を少量含み、焼成は40が不良、他は良好である。40は小児甕棺であろう。41～43は断面「く」字形をなし、頸部内面の縁が明瞭でない。41は胴部内外面ナデ、口縁横ナデで、淡橙褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好。42は黒～黒褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を含み、焼成はやや不良。43は橙褐～淡灰黒色を呈し、胎土に微砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成不良。44・45はやや内湾気味に開き、端部は面取りする。ともに刷毛目の後、横ナデ調整する。44は黒褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好。45は淡灰～乳白色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成不良。46は脚の可能性もある。外反して開き、端部は面取りされ内外に肥厚する。乳白色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成良好。47は口縁が「く」字形に屈曲して外反し、端部で内湾して上に伸び面取りされる。頸部外面に断面三角形突帯を貼付し、頸部内面の縁は不明瞭である。胴部内面に斜位の刷毛目があるが、他は器面が荒れて調整不明。黄灰色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、

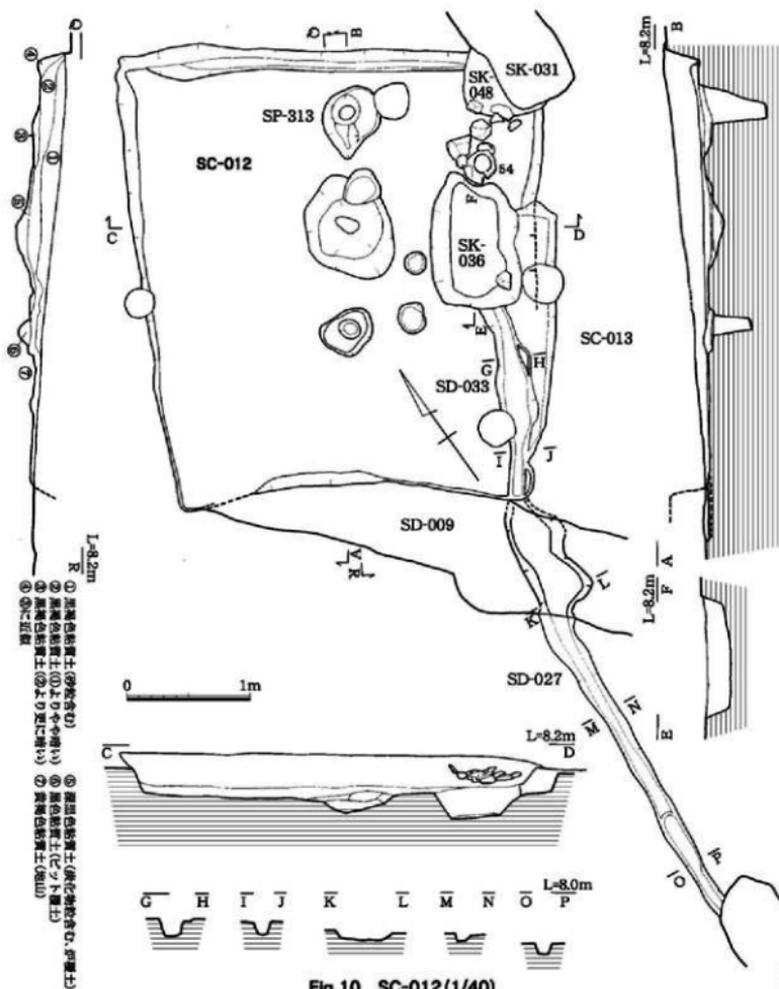


Fig.10 SC-012(1/40)

焼成不良。復原口径30cm。48も「く」字形に屈曲し、口縁が直線的に伸びる。端部は面取りされ、やや外方へ張り出す。頸部外面に断面三角形突帯を貼付し、内面には明瞭な稜がある。胴部外面は縦の刷毛目、内面は斜めの刷毛目の後ナデ調整、口縁は横ナデとみられるが磨滅のため明瞭でない。灰褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成はやや不良である。胴部外面と口縁内面に黒斑がある。復原口径35.4cm。

49～51は底部片で、51は壺、他2点は甕であろう。49は外面粗い縦刷毛目、内面ナデ調整で指頭

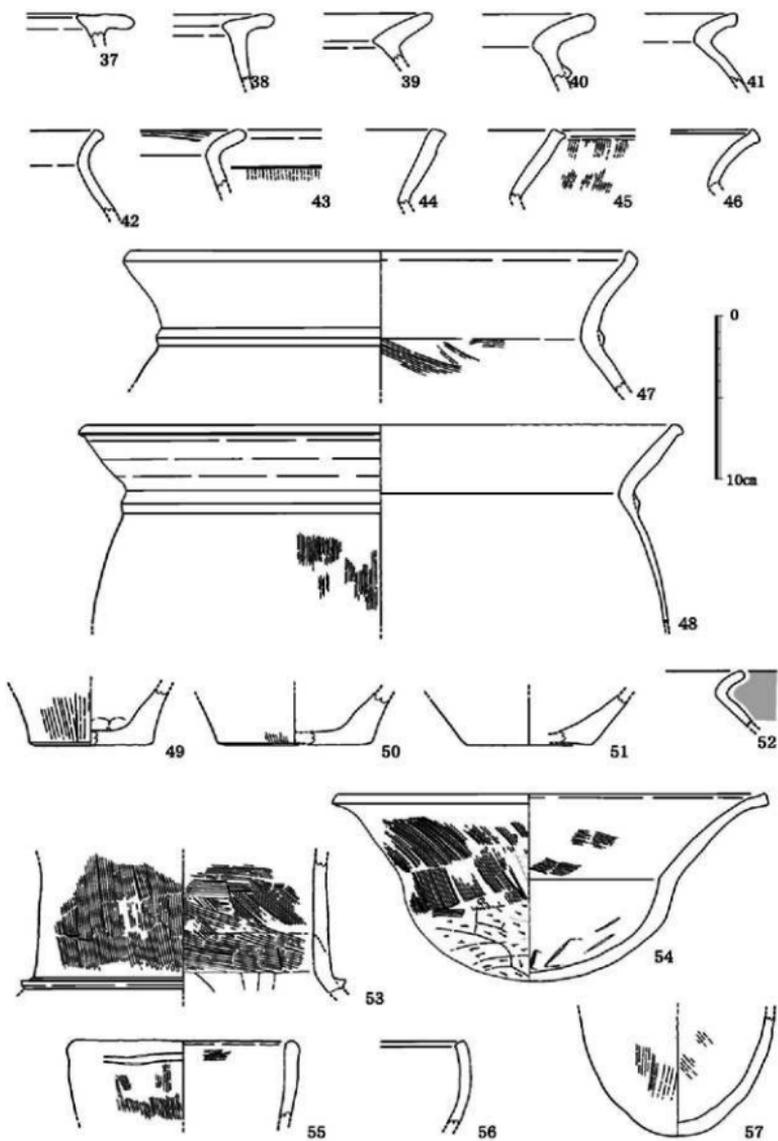


Fig.11 SC-012出土遺物・I (1/3)

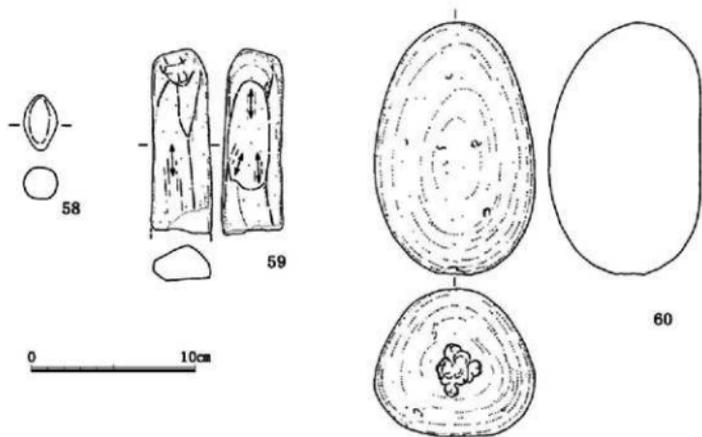


Fig.12 SC-012出土遺物・I (1/3)

痕が残る。外面暗橙褐色、内面黒色を呈し、胎土の砂粒は少なめ、焼成は不良。50は外面に刷毛目を認めるが、磨滅して調整痕は明らかでない。色調は49に近似し、胎土に砂粒・雲母粒を含み、焼成はやや不良。51は若干窪む小さな平底をなす。内面のナデ以外は調整不明。外面黒褐色、内面黒色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良。

52は短頸壺の口縁部片である。「く」字形に屈曲するが内面は丸い。外面に丹塗りの痕跡を留める。橙褐色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成良好。

53は複合口縁壺の頸部片である。口縁はかなり直立しており、上方で開くのであろう。屈曲部外面に断面三角形の突帯を貼付する。外面縦位の、内面横～斜位の刷毛目調整で、胴部内面はナデ調整、突帯周辺は横ナデ調整する。外面淡黄褐～黒褐色、内面淡黄褐色を呈し、胎土には多量の砂粒の他、カクセン石粒・黒色粒子・雲母粒を少量含み、焼成は不良である。突帯上で復原径19.6cm。

54は鉢である。偏球形の胴部に、屈曲して大きく開く口縁部が付く。口縁は外反して長く伸び、端部は面取りされる。外面は口縁から胴部上端に斜位の刷毛目を施し、胴部はヘラ削りのまま放置する。内面は口縁が横刷毛目で、胴部はナデ調整でヘラ先の圧痕が残る。口縁端部は横ナデ調整。淡黄褐色を呈し、胎土に石英等の砂粒を多量に含み、焼成不良で胴部外面に黒斑がある。口径25.7cm、器高11.4cm。55・56は直口縁の鉢である。55は口縁が直立し端部は丸い。外面縦の、内面横の刷毛目調整で、口縁を横ナデする。淡褐～淡黄褐色を呈し、砂粒は少なめで、焼成良好。56は口縁が内湾し、端部は面取により内傾する。かなり口径が大きい。淡黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良で外面に黒斑がある。57は鉢の底部か。胴部内外面刷毛目、底部はナデ調整である。

58は土製の投擲である。器面は磨滅している。

59は砥石である。棒状の粘板岩を用い、下端は折れている。表裏両平坦面を使用しており、特に裏面は浅く窪んでいる。左側面の一部は削って整形する。60は叩石で、花崗岩転石の小口面に数回使用したような軽微な敲打痕がある。かなりの重量がある。

48・53・54等が住居東コーナー部分より出土しており、弥生時代後期末の住居と考えられる。

SC-013 Fig.13, PL.3

SC-012の南東に接する竪穴住居跡である。SC-012とSD-009に切られており、これらの掘削後に壁溝の一部を確認し、住居平面プランを把握した。遺物を土層ベルトにより南北に分けて取り上げたが、北半部には奈良時代の須恵器が混入しており、古代遺構が切り込んでいると考えられる。隅丸長方形プランをなし、長辺3.8m、短辺は2.9m程度であろう。最も残りの良い部分で床面まで20cmの深さが残る。覆土は黒褐色粘質土、地山土は黄褐色粘質土で、貼床は認められない。壁際の周溝は床面の北・東・西の隅に部分的に認められ、最大幅15cm、深さ5cm未満である。床面には土坑状の窪みや小ピットがいくつか見られるが、上記のように古代の遺構が含まれる可能性がある。ただし、北東辺の壁際の土坑は周囲の遺構に切られており、住居に伴う可能性がある。この土坑は壁に接して半円形プランをなし、最大径1.2m、深さ10cmである。支柱穴、焼土、炭化物は認められない。

SC-013出土遺物 Fig.14

コンテナ2箱の遺物が出土した。大半が弥生土器だが、古代の土師器・須恵器・製塩土器が少量含まれる。他に石庖丁、黒曜石製石核・チップ数点を含む。弥生土器には甕、壺、高坏、器台がある。61~69は弥生土器である。61~64は甕の口縁部片で、断面が「逆L」字形を呈し、64は内面が

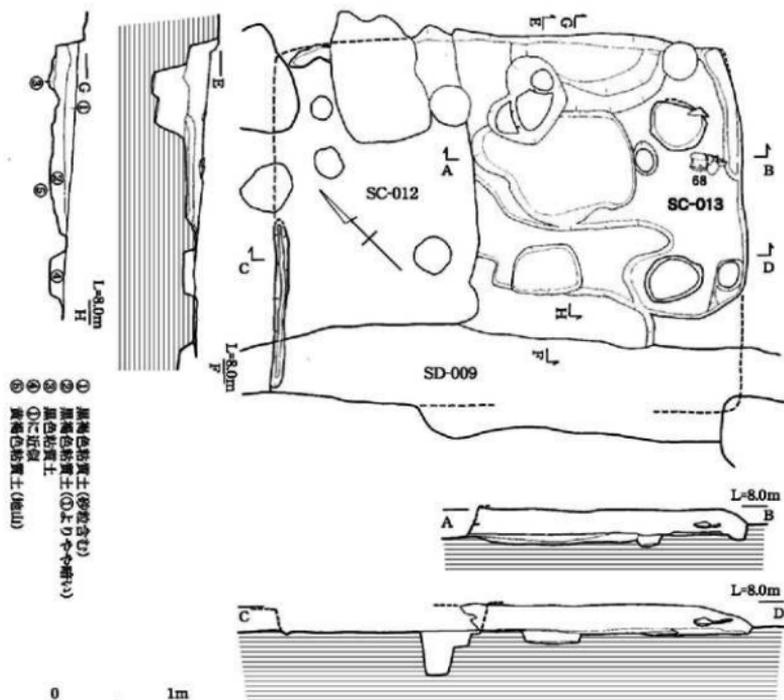


Fig.13 SC-013(1/40)

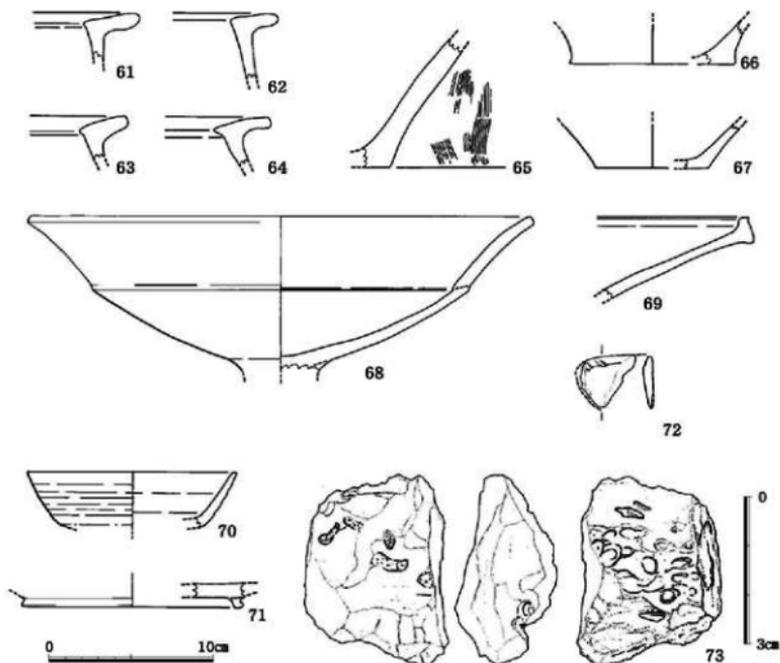


Fig.14 SC-013出土遺物(73は1/1、他は1/3)

突出し鋤先形をなすが、いずれも小片で法量不明。61は橙褐色で、胎土に砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成良好。62は外面褐色、内面橙褐～褐色をなし、多量の砂粒と雲母粒を含み、焼成不良。63は淡黄褐色を呈し、少量の砂粒と雲母粒を含み、焼成良好。64は外面橙褐色、内面淡橙褐色を呈し、砂粒と多量の雲母粒を含み、焼成良好。65は壺の底部片で外面縦刷毛目、内面調整不明。橙褐色を呈し、石英粗粒等の砂粒を含み、焼成不良。66は壺または壺の底部で、造りがやや粗雑。内面のナデ以外は調整不明。淡橙褐色で、胎土は精良、焼成良好。67は壺の底部。調整痕は不明で、淡橙褐色を呈し、砂粒と雲母粒を少量含み、焼成良好。68は高坏で、脚の接合部から折れている。坏部の中位で屈曲しており、内外に段がある。口縁は外反して開き、端部は面取りする。脚は外底に貼り付けて接合する。磨滅して調整痕は不明。橙褐色を呈し、少量の砂粒と多量の雲母粒を含み、焼成は不良で外面の相対する二カ所に黒斑がある。口径30.6cm。69は小片だがかなり大口径の高坏となろう。口縁端部を屈曲させ短い立ち上りを付ける特異な器形だが、久保園遺跡第2次調査SD21(弥生時代後期後半)に類似例がある。磨滅して調整痕は不明、淡橙褐～橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良。

70・71は須恵器坏で、71には高台が付く。他にも古代の土器があり、混入遺物と考えられる。

72は石庵丁の破片であろう。輝緑凝灰岩製。73は黒曜石製の石核で、背面に自然面が残る小円礫素材である。剝離方向は一定しない。果が多く入る漆黒色黒曜石を用いる。

壁際から出土した高坏(68)より、弥生時代後期後半の住居と考えられる。

SC-014 Fig.15

調査区中央の東壁際に位置する。SC-013・SD-009に囲まれた範囲内に貼床と思われる整地層があり、北西側に壁の立ち上がりと思われ浅い溝の一部を確認したため堅穴住居跡として報告するが確証はない。平面プランや規模は不明で、削平によって覆土はほとんど失われている。壁溝は幅40～45cmで、遺構検出面から底面までの深さは10cmに満たない。貼床は汚れた地山土（黄褐色粘質土）で約5cmの厚さに施しており、この上面で土坑、ピットなどを検出したが住居に伴うものか否か不明である。炭化物や焼土の広がり認められない。

SC-014出土遺物 Fig.16, PL.12

コンテナ2箱の遺物が出土した。壁溝、貼床の他、西側のSP-130等の土坑、ピットから出土したのものも合わせて示す。弥生土器が主体を占めるが、他時期の遺物が混じる可能性がある。

74～77は弥生土器製の口縁部片で、断面が「逆L」字形ないし鋤先形を呈する。横ナデ調整とみられるが、磨滅して調整痕が不明なものが多い。いずれも胎土に砂粒と雲母粒を含み、焼成はやや不良。78は口縁端部の小片で器種は不明。端部を面取りし、板小口で刻目を施す。全体に丹塗りが施され、上面に放射状の暗文がある。暗赤褐色で、胎土は精良、焼成良好である。79も口縁端部片で器種不明。端部が面取りされ窪む。調整不明で、くすんだ橙褐色を呈し、砂粒と雲母粒を少量含み、焼成不良。80は底部片で、平底。磨滅のため調整不明で、暗橙褐色を呈し、多量の砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成良好。81は高坏の口縁部片である。口縁は短く、端部は丸くおさめる。屈曲部に幅広の段を持つ。外面は横刷毛目、横ナデ、雑な暗文の順に調整する。外面淡黄褐色、内面淡橙褐色を呈し、胎土に砂粒を少量含み、焼成やや不良。82は鉢の口縁部であろう。内傾内湾する直口縁で、端部は面取りさ

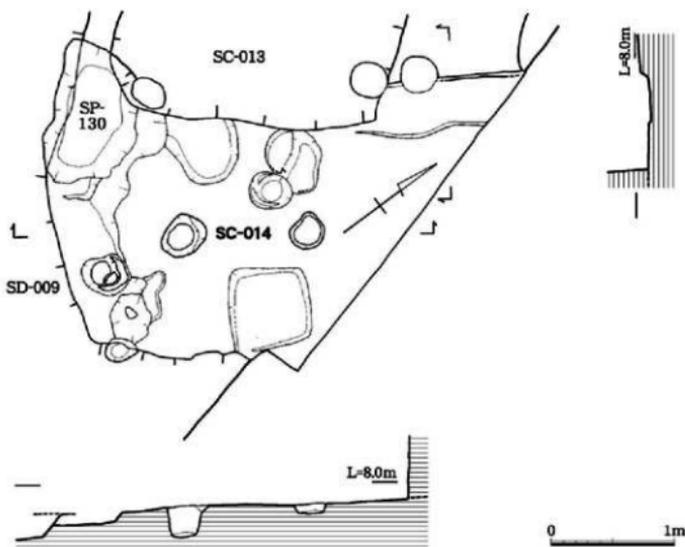


Fig.15 SC-014(1/40)

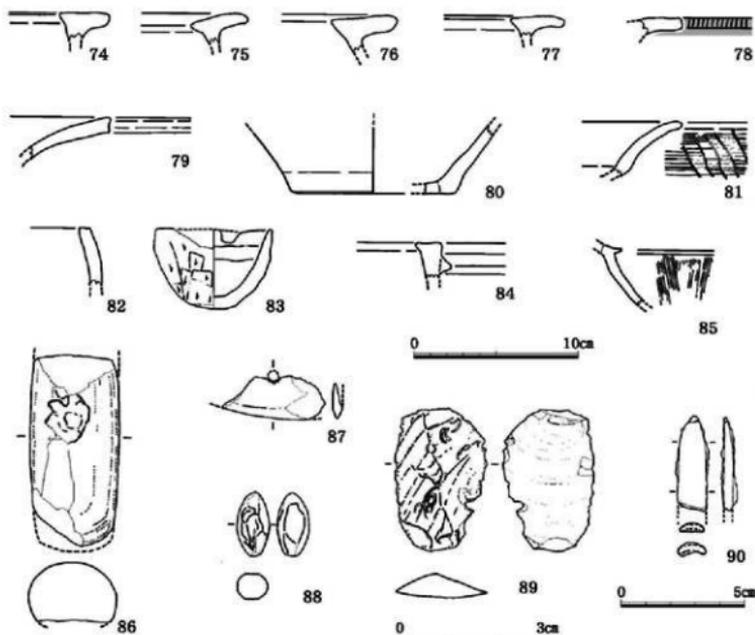


Fig.16 SC-014出土遺物(89は1/1,88-90は1/2,他は1/3)

れ沈線状の窪みがある。橙～淡黄褐色を呈し、多量の砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成良好。83は手掘の鉢で、不安定な平底をなす。外面を板状工具で縁にナデ、内面ナデ調整する。暗橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良である。84は口縁部として図示するが確証はない。端部は明らかに擬口縁ではなく、直下に断面三角形突帯を貼付する。調整度は磨滅し、淡橙褐～灰白色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を含み、焼成不良。85は器台の脚として図示したが、小片のため確証はない。器台とすれば混入土器か。外面に断面三角形突帯を貼り付けており、ここで内側に屈曲している。外面縦位の刷毛目で突帯周辺を横ナデする。内面は調整不明である。暗橙褐色を呈し、胎土に粗砂を少量、雲母粒を僅かに含み、焼成不良。

86は磨製石斧片である。上・下が折れているが、下端は刃部を潰したような痕跡があり、石斧の再利用品か。玄武岩製。87は石唐丁の一部である。孔の一部が見える。刃部の研ぎ出しは両面から行う。石材は緑泥片岩か。88は石製の投擲である。一部に切り目がある。砂岩製。89は黒曜石の剥片で、使用による刃こぼれはない。背面には自然面が残る。湿じりのない漆黒色黒曜石で、パティナが著しい。90は鉄製ヤリガンナである。基部と先端の一部を欠く。裏面が窪み、横断面は三日月形をなし、刃部の先端は僅かに凸面側に反る。錆のため刃部の研ぎ出しは確認できない。長さ3.6cmが残り、最大幅1.2cm、厚さ0.2cmである。

弥生時代後期後半の住居と考えられ、遺構の切り合い及び81の高坪から、SC-013（後期後半）より一段階前に位置付けられよう。

SC-015 Fig.17

SC-014の北に隣接し、調査区東壁にかかる。覆土の一部、貼床と少し硬化した面、及び壁の立ち上がりの一部を確認したため竪穴住居跡と考えたが確証はない。南西側でSC-013、南東側でSC-014と重複するが、残りが悪いため各々の切り合い関係は明確でない。覆土は調査区壁際に僅かに残っており、これを除去すると5cmほどの厚さの汚れた地山土を用いた整地層となり、一部に固く締まった部分が認められる。平面プランや規模は不明で、壁の立ち上がりは5cm未満である。覆土は黒褐色粘質土、地山土は黄褐色粘質土である。貼床上面で3つのピットを検出したが、住居との関係は不明である。

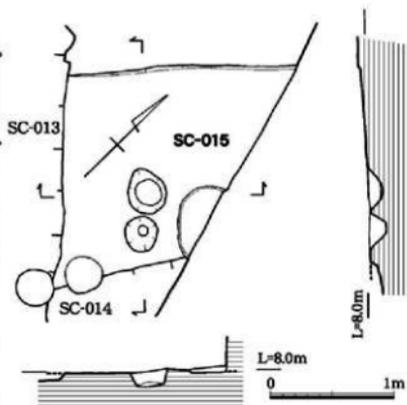


Fig.17 SC-015(1/40)

SC-015出土遺物 Fig.18

約250点の遺物が出土した。弥生土器小片の他に黒曜石チップ2点がある。

91は弥生土器甕の口縁部片で、断面「逆L」字形を呈する。磨滅のため調整は不明で、淡灰褐色を呈し、砂粒と雲母粒を少量含み、焼成は不良。92は甕の底部片で、平底。内面ナデ調整で、外面は不明。外面暗橙褐色、内面黒褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良。93は壺の底部か。やや凸レンズ状に膨らむ平底をなす。外面は刷毛目の後ナデ、内面は刷毛目調整である。淡褐色で、胎土に砂粒が多く、焼成は不良である。

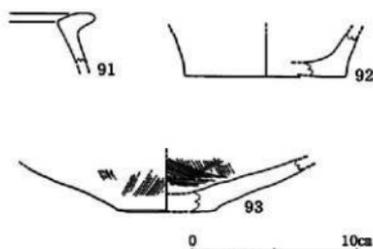


Fig.18 SC-015出土遺物(1/3)

弥生時代後期の遺構であろう。

SC-016 Fig.19, PL.4・5

調査区北東部に位置する竪穴住居跡である。北端を攪乱溝に破壊される。東壁にかかるため全容は不明であるが、現況で4.1m×2.8m以上の隅丸方形プランを呈する。最も残りの良い部分で床面まで20cmを残す。覆土は黒褐色粘質土、地山土は黄褐色パイラン土で、汚れた地山土で極めて薄く貼床を施す。壁際には周溝が走り、幅10～30cmで、床面からの深さは5cm弱である。床面中央のやや西寄りに炉跡があり、炭を含む黒色土が堆積していた。この北側に径23～26cm、深さ30cmの楕円形プランのピットがあり、主柱穴のひとつとみられる。他にはこれと対をなす規模のものは見あたらず、2本柱となるのではないかとと思われる。床面南側には0.45×0.3mの浅い方形の窪みと、0.9×0.4mの楕円形の窪みがある。覆土からは土器を主とする遺物が多量に出土したが、床面より少し浮いており、住居がある程度埋没した段階で投棄されたものと考えられる。

SC-016出土遺物 Fig.20～25, PL.12～13

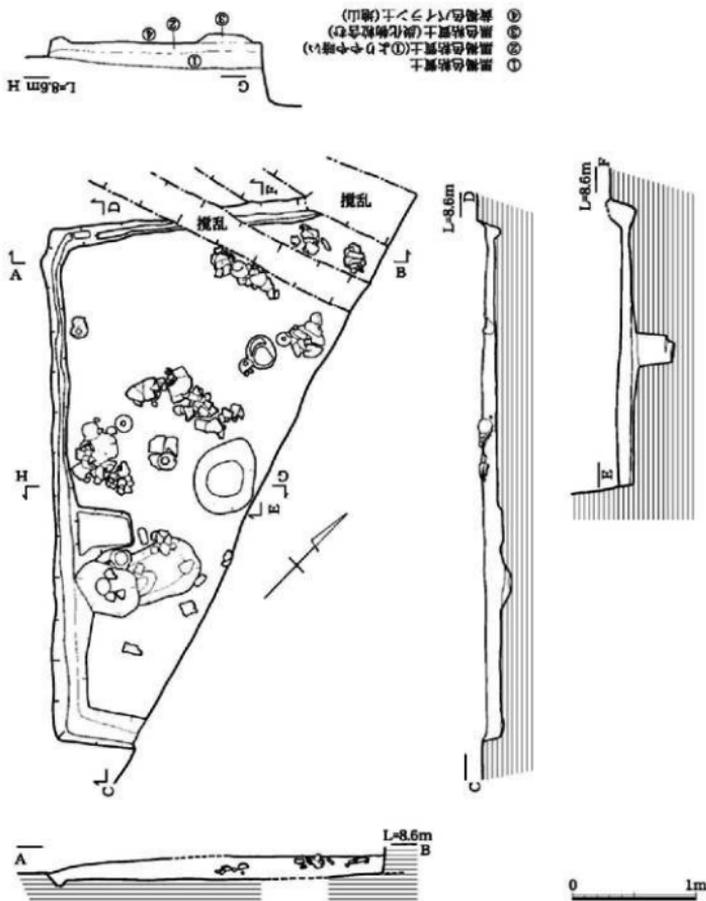


Fig.19 SC-016(1/40)

コンテナ15箱を数える。ほとんどが古式土師器で、他に弥生土器、黒曜石チップ、石器が少量ある。古式土師器には、甕、壺、高坏、甔、小型丸底壺、鉢、椀、小型器台等がある。

94~105は布留系の甕である。全形を知り得るものは94のみで、他は口縁部周辺の破片である。他に底部の破片があるが図化していない。94~104は口縁が内湾して開くもので、口縁端部は面取りされ、94~101は端部が内側へ肥厚し、かつ94~99には沈線状の窪みが入る。105は口縁が直線的に開き、端部直下の内外を窪ませて面取りする。94は胴部外面に縦位の刷毛目を施し、肩部に帯状の横刷毛目を三段施して飾る。肩部の縦刷毛目は横刷毛目の上から施したのもある。口縁横ナデ調整。

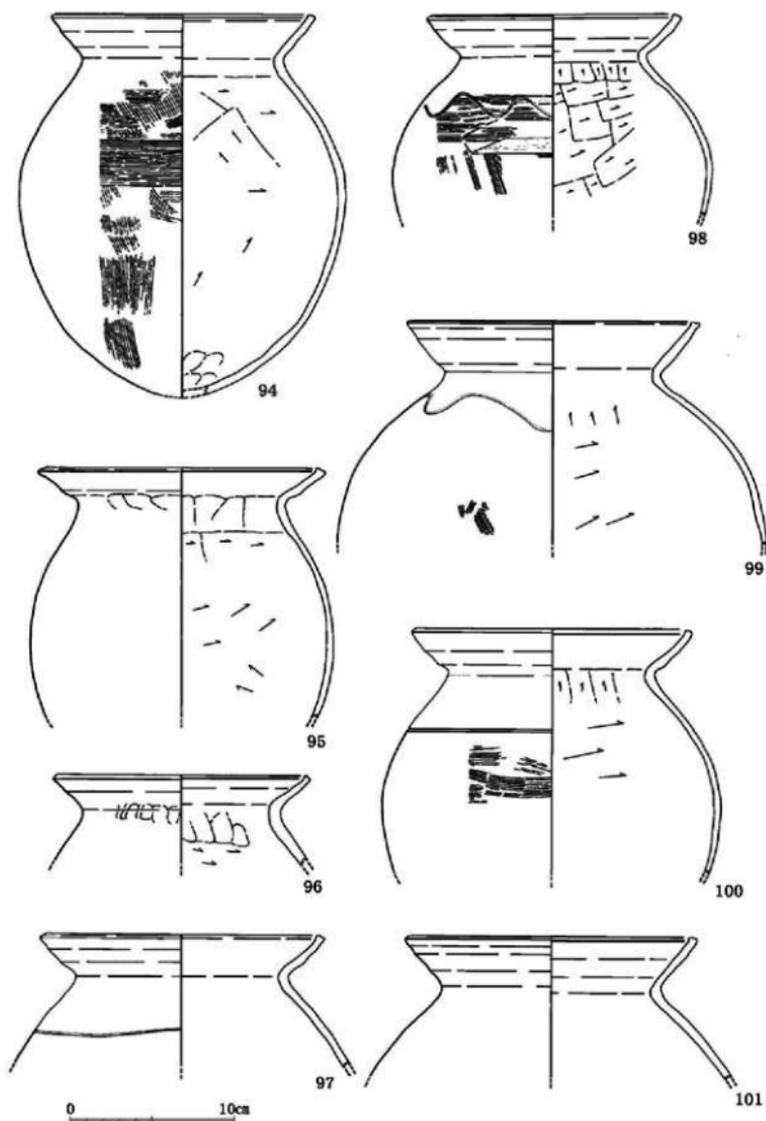


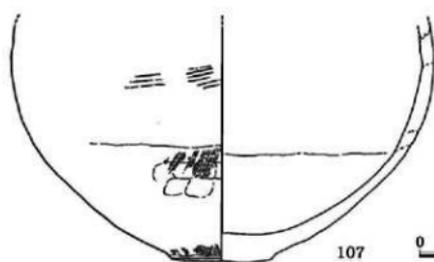
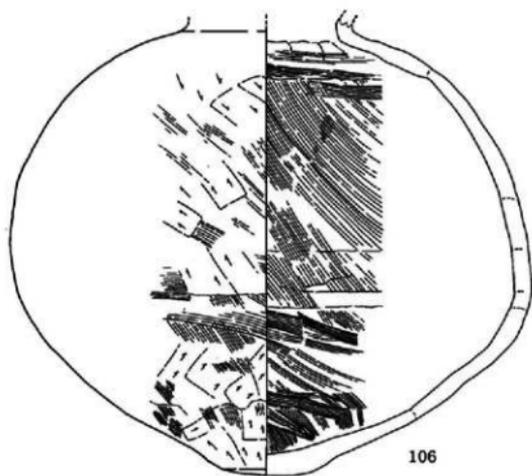
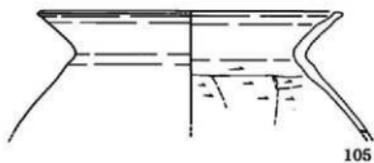
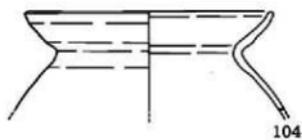
Fig.20 SC-016出土遺物・I (1/3)

内面は磨滅しているが底部に指押さえ痕が残り、胴部ヘラ削り→頸部ナデ→口縁横ナデの順に調整する。淡灰～黒褐色で、砂粒を多量に含み、焼成良好。口径16cm、器高23.2cm。95の外表面は磨滅により刷毛目が僅かに残るのみ。内面は胴部ヘラ削りの後、頸部内外面を指頭によりナデ、最後に口縁横ナデ調整。外面淡褐～黒色、内面淡灰褐色を呈し、砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成良好。口径17.4cm。96の調整は95と同様で、淡灰褐～黒褐色で、砂粒・雲母粒を少量含み、焼成やや不良。復原口径15.6cm。97は肩部外面に沈線が回るが、その他の調整は不明。淡乳灰色で、多量の砂粒と僅少の雲母粒を含み、焼成良好。復原口径17.3cm。98は外面縦位の刷毛目で、肩部に横位の刷毛目と波状沈線一条を巡らせる。内面は胴部ヘラ削り後、頸部ナデ、口縁内外横ナデ調整。淡灰～黒褐色で、砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成やや不良。口径15.4cm。99は磨滅が著しいが、胴部外面刷毛目で肩部に波状沈線一条を回し、内面はヘラ削り。淡灰褐色で、砂粒・雲母粒を含み、焼成やや不良。復原口径17.6cm。100は磨滅し、外面は胴中位に横位の刷毛目、肩部に沈線一条を巡らす他は調整不明。内面は胴部ヘラ削り後、頸部をナデ、最後に口縁内外横ナデ調整。淡灰～淡褐色で、多量の砂粒と少量の暗赤褐色鉱物を含み、焼成良好で外面胴中位に黒斑がある。復原口径17cm。101は磨滅のため調整不明。淡灰褐色で、砂粒と雲母粒を多量、カクセン石を僅かに含み、焼成良好。復原口径17.6cm。102は外面横ナデ、内面は胴部ヘラ削り後、頸部ナデ、口縁横ナデ調整。淡灰褐色で、砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好。復原口径18.3cm。103は外面が刷毛目→口縁横ナデ、内面が胴部ヘラ削り→頸部ナデ→口縁横ナデ調整。淡乳白色で、多量の砂粒と少量の斜長石を含み、焼成不良。復原口径17.7cm。104は磨滅のため調整不明。淡灰白～淡褐色で、砂粒を多量に含み、焼成良好。復原口径15cm。105は外面調整不明、内面は胴部ヘラ削り後、頸部ナデ、口縁横ナデの順に調整する。淡灰褐～黒色で、砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成不良。復原口径18.5cm。

106・107は二重口縁壺であろう。106は口縁を欠き、下膨れの胴部で最大径は下位にあり31.5cm。底部はやや突出する不安定な平底である。内外に粘土帯の継ぎ目が明瞭で、特に頸部は内面から粘土を当てた痕跡が良く残る。外面は横～斜位の刷毛目の後、雑にナデ調整。内面は頸部に指押さえ痕があり、下位の屈曲部を境にして上半が斜位、下半と頸部内面は横位に近い刷毛目調整。淡黄褐色を呈し、胎土に石英粗粒等の砂粒を少量含み、焼成不良で胴下半に黒斑がある。107は丸い胴部に不安定な平底が付く。内傾する粘土接合部が明瞭である。磨滅しているが、外面の胴中位にタタキ→ナデ、下位に指押さえ→刷毛目、内面にヘラ削り→ナデの調整痕が残る。外面淡褐～黒色、内面淡灰褐色を呈し、砂粒を多量に含み、焼成は良好で、胴部下端の相対する二カ所に黒斑がある。

108～110は単口縁の壺である。108は胴部下半の1/2を欠く。口縁は外反して開き、端部は面取りによりやや窪む。頸部外面に断面三角形突帯1条を貼付する。丸底だが、平底の痕跡が残る。口縁外面に縦刷毛目の痕跡があり、端部は横ナデ調整か。胴部外面は磨滅しているが、タタキ・刷毛目の上から雑なヘラ磨きを加え、下半は縦にナデる。内面は上半に幅1～1.5cmの粘土帯の継ぎ目が良く残り、タタキに添えた指の痕跡が重なる。下半は指押さえや刷毛目を施すが、磨滅してそれらの先後関係は不明。外面橙褐色、内面黒褐色を呈し、砂粒を多量に含み、焼成不良で外面の肩部と底部に黒斑がある。口径17.6cm、器高35.5cm。109は器形・突帯が108に類似する。磨滅するが口縁外面は刷毛目の後、横ナデ調整。内面は上端にヘラ磨きの痕跡が残るが他は不明。胴部外面は刷毛目→ナデ、内面は指押さえ→斜位の刷毛目である。橙～淡橙褐色を呈し、粗砂混じりの砂粒を多量に含み、焼成良好。復原口径15.6cm。110は口縁部片である。外反して開き、端部に面取りによる沈線1条が入る。磨滅しているが、内外面とも下端に刷毛目調整痕が残る。赤褐色を呈し、砂粒を多く含み、焼成良好。復原口径15.6cm。

111～114は高坏である。111は脚部片で、長脚である。磨滅が著しく、内面にシボリ痕を残すのみ。



0 10cm

Fig.21 SC-016出土遺物・I (1/3)

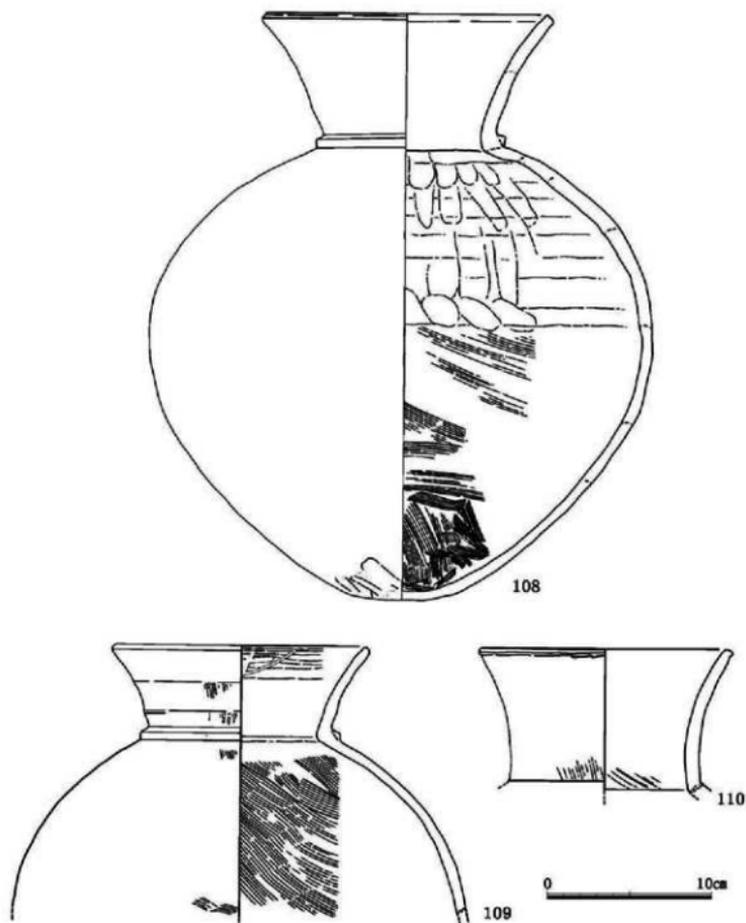


Fig.22 SC-016出土遺物・Ⅲ (1/3)

淡黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成不良。112は底部の1/2を欠くが、ほぼ完存する。坏部は深めで、屈曲部は丸く内外に沈線で画する。脚を坏底に差し込んで接合し、粘土を充填して補強する。脚筒は膨らみが少なく、底部との境は丸く、端部は面取りする。欠損するが透孔は四方に配するものと思われ、上方から穿孔している。著しく磨滅しており、調整痕は残らない。淡橙色を呈し、胎土は精良で粗砂・細砂を少量、雲母粒を多量に含み、焼成不良で坏部内底が黒色を呈する。口径22.3cm、器高15.1cm。113は坏部だけの破片で、口縁と杯底の境が不明瞭である。磨滅して調整不明。淡褐色で、砂粒・雲母粒を少量含み、焼成不良で破面が黒色をなす。復原口径22.2cm。114は底部以

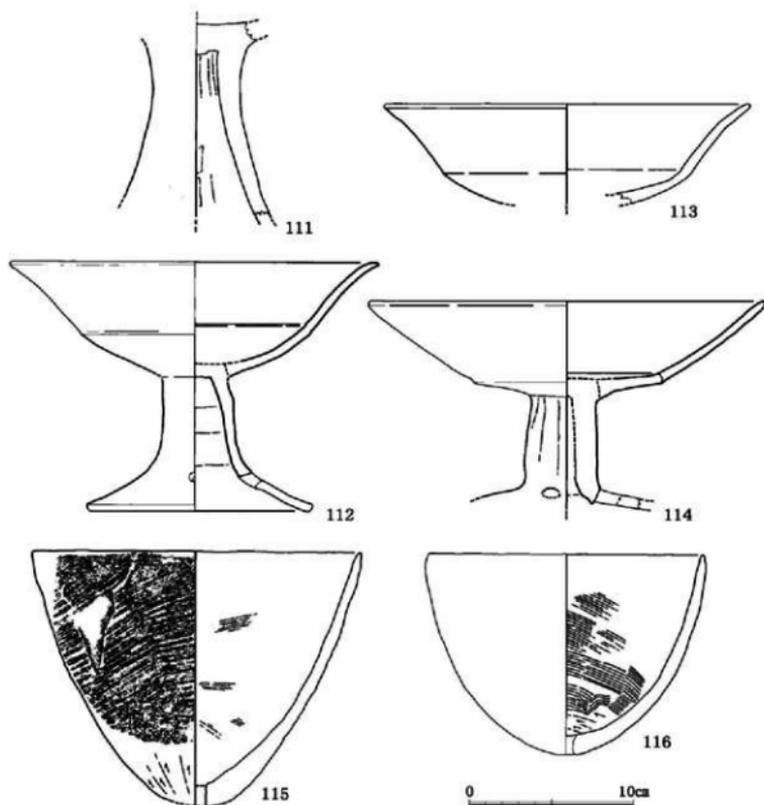


Fig.23 SC-016出土遺物・Ⅳ(1/3)

外が残存する。坏部は浅く、内底が平坦で、口縁は直線的に開く。脚部を坏底に差し込んで接合する。脚筒はエンタシス状に膨らみ、底部は強く屈曲して開く。屈曲部の4カ所に円形の透孔を入れるが、配置が偏り2孔ずつ対になる。脚部内面ヘラ削り、外面ヘラナデ以外は磨滅により調整不明。淡橙褐～淡褐色を呈し、胎土に粗砂混じりの砂粒を多量に含み、焼成良好。口径24cm。

115・116は甗である。115は砲弾形尖底の土器で、焼成前に底部に一孔を穿つ。外面は左下がりのタタキを施し、底部は縦に板小口でナデ調整する。内面は磨滅するが刷毛目が残し、底部には指押さえの痕跡がある。淡橙褐～灰白色を呈し、胎土に多量の粗砂・砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成良好で、上半の相対する2カ所に黒斑がある。116は115に比べると体部が丸みを持つ。穿孔は焼成前で、一孔。外面は磨滅して調整不明。内面は灰白色粘土で覆われ、横位に刷毛目調整、底部はヘラ削り。外面淡灰～黒色、内面灰白色を呈し、胎土に少量の砂粒と多量の暗赤褐色鉱物を含み、焼成不良である。

117～120は小型の甗である。117は長胴で口縁を欠く。器壁が分厚く、底部痕跡が残る。胴部外面

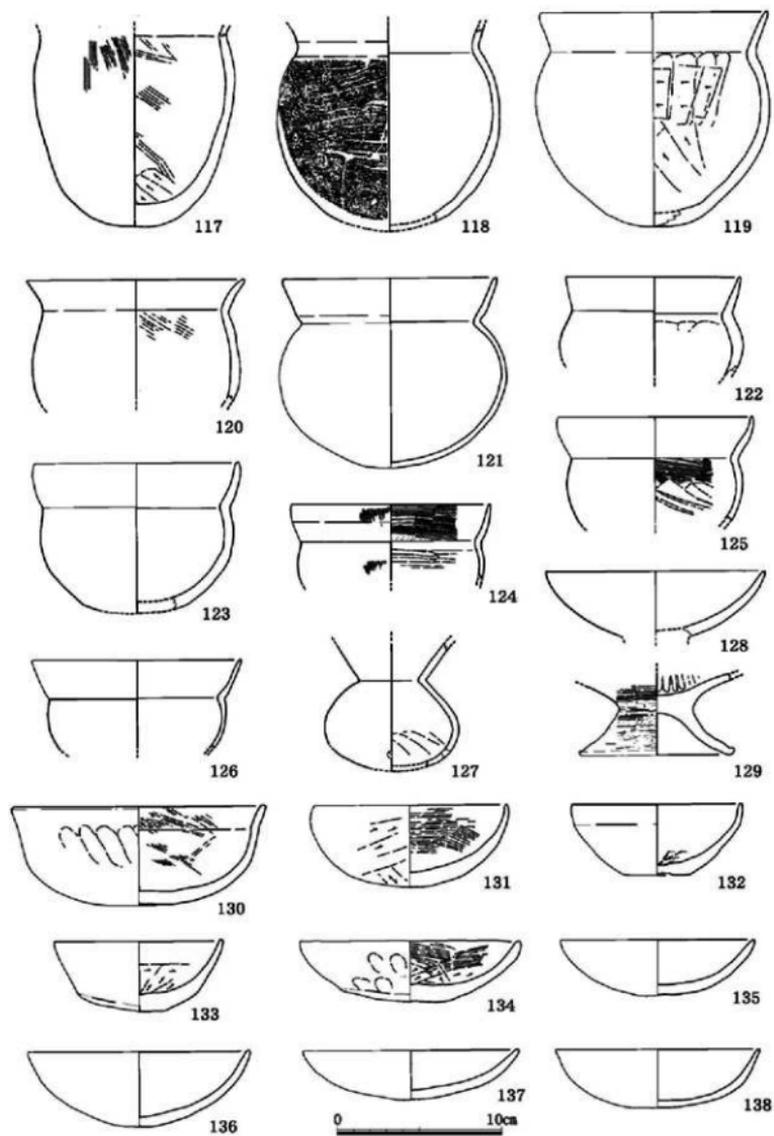


Fig.24 SC-016出土遺物・V (1/3)

縦位の刷毛目で、下半はナデ調整か。内面は刷毛目の後、ナデ、底部は板小口によるナデ調整。暗橙褐～灰白色を呈し、砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成やや不良。118は球形胴部に「く」字形に屈曲して開く口縁が付くが、口縁端部と底部は失う。胴部外面に平行タタキ後、口縁横ナデ調整。内面は底部付近に指頭痕が残るが、磨滅のため調整不明。外面淡灰褐色、内面黒褐色を呈し、砂粒を多量に含み、焼成不良で外面に黒斑がある。119はほぼ完存する。口縁は「く」字形に屈曲し、胴部最大径は上位にあり、口径に等しい。コイン大の不安定な底部がある。磨滅しており外面は調整不明。内面は指整形の後、上半が板小口による横位のナデ、下半がナデ調整か。淡灰褐～黒褐色を呈し、多量の砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成不良。二次加熱により器壁が剥げ落ちる。口径13.9cm、器高13cm。120は「く」字形口縁で、口径は胴部径より大きい。磨滅が著しく、内面に斜位の刷毛目が一部残るのみ。淡褐～淡灰褐色で、胎土に粗砂混じりの砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成は良好。復原口径13.2cm。

121～126は小型丸底甕である。121・122は口径が胴部最大径より小さく、他は超える。121は完存するが、磨滅して調整痕は不明。淡橙褐色を呈し、胎土は精良で砂粒を少量含み、焼成良好。口径13cm、器高11.5cm。122は二次加熱により器面が弾ける。淡橙褐～黒褐色を呈し、胎土は精良で砂粒を少量、雲母粒を多量に含み、焼成はやや不良で口縁部に黒斑がある。口径10.5cm。123も磨滅が著しく調整不明。外面灰橙色、内面灰黒色を呈し、胎土は精良で、焼成は極めて不良。復原口径12.1cm。124は外面縦位の刷毛目の後、横ナデで、胴部のみ粗くヘラ磨き。内面は横ナデの後、粗くヘラ磨き。口縁内面は横位の刷毛目調整。橙褐色を呈し、胎土は精良で、焼成良好。復原口径12cm。125も磨滅するが、外面は胴部ヘラナデ、内面は口縁部横ナデ、胴部横刷毛目、底部ヘラ削り。淡灰褐色を呈し、胎土は精良で砂粒を少量含み、焼成不良。復原口径11.8cm。126は磨滅が著しく調整不明。淡橙褐色を呈し、胎土は精良で砂粒を少量含み、焼成はやや不良。復原口径12.6cm。

127は小型の長頸甕である。下膨れの球形胴部に大きく開く口縁が付く。焼成前に胴部下半に外側から一孔を穿つ。磨滅が著しいが、胴部外面はヘラナデ、内面は下半にヘラ又は指頭によるナデ調整がある。明橙褐色を呈し、胎土は精良で雲母粒を少量含み、焼成良好。

128は底部の破損具合から脚付鉢としたが、碗の可能性もある。磨滅して調整不明。淡灰褐色で、砂粒を少量と雲母粒を僅かに含み、焼成不良で内外に黒斑がある。復原口径13.2cm。129は鉢の脚部である。鉢内底は刷毛目の後、放射状にヘラナデ。外面は刷毛目の後、横位のヘラ磨きで、脚内面は磨滅のため調整不明。淡橙褐色で、胎土に砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成はやや不良だが堅緻である。

130～138は碗である。130は口縁が外反しており鉢とすべきかもしれない。底部痕跡を持つ。胴部外面指頭整形からナデ、内面刷毛目からナデ、口縁横ナデ調整。淡橙褐～淡灰褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を少量含み、焼成はやや不良で、底部と口縁部の外面に黒斑がある。復原口径15.4cm、器高6cm。131は丸底で深い。外面ヘラ削り後ナデ、内面横位の刷毛目調整。淡橙褐色を呈し、粗砂混じりの砂粒を少量含み、焼成やや不良。口径11.7cm、器高5cm。132・133は底部痕跡を持ち器壁が厚い。磨滅しているが、外面ナデ調整、内底にはヘラ状工具で調整した痕跡があり、133は内面に化粧土を施す。淡橙褐～灰褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を少量含み、焼成不良。132は復原口径10.4cm、器高4.3cm、133は口径10.2cm、器高4.2cm。134も底部痕跡を残す。外面は指頭痕をナデ消し、内面は淡灰褐色の化粧土を施し、雑な刷毛目を加える。外面暗橙褐色で、砂粒・雲母微粒を含み、焼成良好。口径13.2cm、器高3.7cm。135も不安定な底部がある。磨滅が著しいが、内面に淡灰褐色の化粧土が一部残る。淡橙～淡灰褐色を呈し、砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成良好。復原口径11.8cm、器高3.4cm。136は磨滅が著しく調整不明。暗橙褐色で、砂粒を多量、粗砂・暗赤褐色鉱物を僅かに含み、焼成良好で外面に黒斑がある。復原口径11.4cm、器高4.5cm。137も内面に化粧土を施すが、磨滅のため調整不明。灰褐

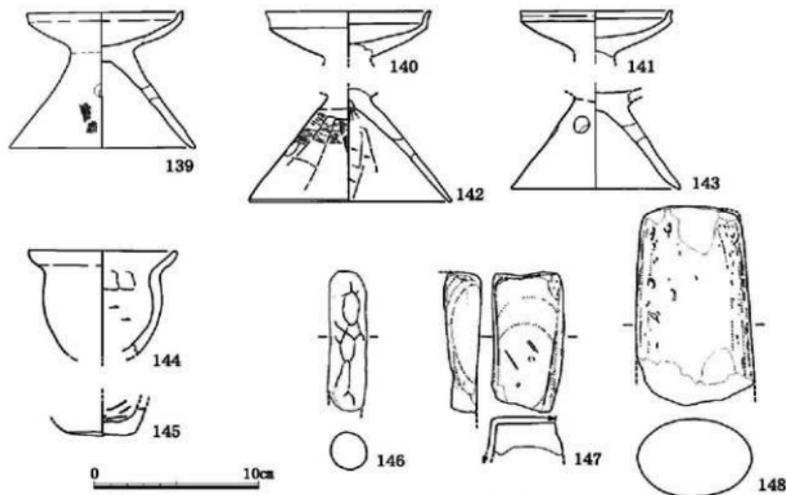


Fig.25 SC-016出土遺物・Ⅵ(1/3)

～褐色を呈し、胎土に石英粗粒混じりの砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成不良で脆い。復原口径13cm、器高3cm。138も磨滅のため調整痕が残らない。淡褐色を呈し、胎土は精良で石英粗粒・砂粒を少量、雲母微粒を多量に含み、焼成良好で外面に黒斑がある。口径12.4cm、器高3.5cm。

139～143は小型器台である。139は口縁の立ち上がりが低く、脚はラッパ状に大きく開く。脚は貼り付け接合か。磨滅や剥落が著しく、脚外面に縦刷毛目のみ残る。淡褐色～淡灰褐色を呈し、胎土は精良で砂粒・雲母粒を少量含み、焼成は極めて不良。口径9.4cm、器高8.3cm。140は口縁の立ち上がりがやや長く、脚は差し込み接合で、142と同一個体か。磨滅して調整不明。明褐色を呈し、胎土は精良で砂粒を少量、雲母粒を多量に含み、焼成良好。口径9.8cm。141は受け部のみの残欠で、口縁は短く外反する。脚は貼り付けて接合する。磨滅して調整不明。淡褐色を呈し、胎土は精良で雲母粒を含み、焼成良好。口径9.1cm。142は脚で、外面は放射状に横位の刷毛目、内面はヘラ状工具により放射状にナデ調整し、頂部は小さく抉る。相対する2ヶ所に外から円形透孔を入れる。暗褐色を呈し、胎土は精良で雲母粒を少量含み、焼成良好。143も脚で、上半部に4孔の透孔があるが、配置が偏り2孔一対となる。差し込み接合で、全面ナデ調整で、端部は横ナデする。淡橙～黒褐色を呈し、胎土は精良で砂粒を少量、雲母粒を多量に含み、焼成は一部不良で外面の対になる位置に黒斑がある。

144は小型の鉢で、145と同一個体か。口縁は内湾して開く。胴部外面ナデ、頸部内面に指痕が残り、胴部はヘラ削り後ナデ調整か。最後に口縁横ナデ調整。淡褐～黒褐色を呈し、胎土に砂粒を少量含み、焼成不良。145は平底の底部片で、磨滅するがナデ調整か。色調、胎土、焼成は144に同じ。

146は棒状の土製品で、下端は欠く。握りしめたような指頭による整形痕があり、表面はナデ調整する。淡褐色で、砂粒を多量に含み、焼成不良。長さ8.5cm、厚さ2.2cm。

147は砥石である。方柱状をなし、下端と裏面は欠く。正面から左側面にかけて使用痕がある。粘板岩製。148は磨製石斧の基部片である。弥生時代の太型始刃石斧で、今山産の玄武岩質安山岩製か。

土器は外来系の古式土師器がほとんどを占める。古墳時代前期の住居である。

SC-017 Fig.26

調査区北半部の東壁際に検出した遺構で、竪穴住居跡と考えるが確証はない。SC-016に切られ、東側は調査区外へ伸びる。南西側は削平により浅くなって消滅するが、北東側に壁の立ち上がりがあり、住居と考えた。いびつな隅丸長方形プランを呈し、現状で長辺3m以上、短辺1.7mを測る。最も残りの良い北東辺で遺構検出面から床面まで10cmである。覆土は黒褐色粘質土、地山土は黄褐色パイラン土で、貼床は認められない。壁際の周溝、炉跡、焼土や炭化物等は認められない。床面で深めのピットをいくつか検出したが、主柱穴は明らかにし難い。

SC-017出土遺物 Fig.27

コンテナ1/2箱分の遺物が出土した。大半が弥生土器で占められ、他に黒曜石チップ3点、砥石片1点がある。

図示した土器は全て弥生土器の変である。149は「逆L」字形に屈曲し、上面が外傾する。胴部外面縦位の刷毛目、内面ナデ、口縁横ナデ調整。淡橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成良好。復原口径は内径で23.4cm。150は口縁を欠損するため傾きは不正確である。頸部に断面M字形突帯を貼付し、横ナデする。外面は丹塗りにより暗赤色、内面暗橙褐色を呈し、胎土は精良で砂粒を少量含み、焼成不良。151は底部小片で、平底であろう。外面縦位の刷毛目、内面は磨滅する。外面橙褐～褐色、内面淡灰褐～黒色を呈し、胎土に砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成不良。

152は砥石片で、板状をなし、下端と裏面は折れている。三側面の全てを使用する。石材は不明。

出土遺物が少ないが、弥生時代中期後半の遺構であろう。

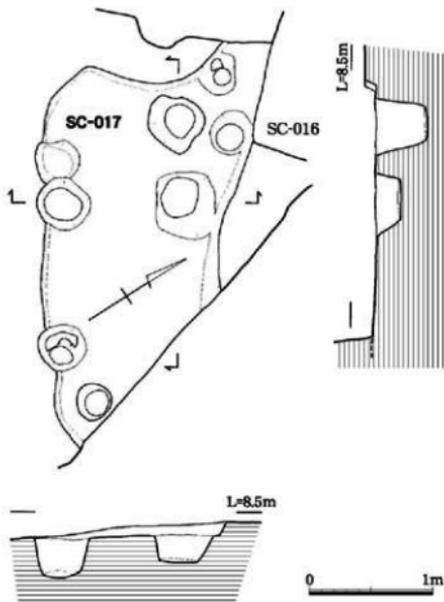


Fig.26 SC-017(1/40)

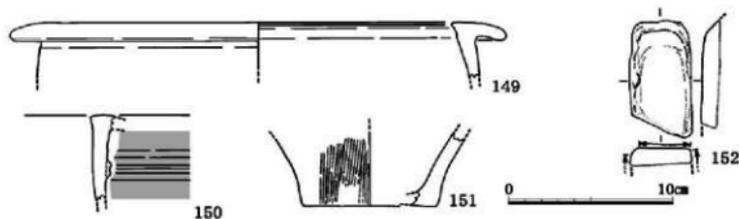


Fig.27 SC-017出土遺物(1/3)

SC-019 Fig.28, PL.5

調査区北半部の中央に検出した。北東辺と南東辺に壁の立ち上がりが認められたことから竪穴住居跡と推定したが確証はない。南西辺の立ち上がりは削平のため本来のプランを示すものではなく、西側はSX-018に切られる。現状で隅丸長方形プランを呈し、長辺3.7m以上、短辺2.4m。北東辺の壁の残りが良く、約17cmの高さが残る。覆土は黒褐色粘質土、地山土は黄褐色パイラン土で、貼床は認められない。南隅壁際の浅い小溝は壁溝の可能性もあるが、SC-019に切られる別の遺構かもしれない。床面には深めのピットがいくつかあり、SP-247・249・311・312などが主柱穴の二本柱となる可能性もあるが、確定しがたい。柱穴は円形プランで径28～60cm、深さ30～55cmである。伊跡や焼土、炭化物等はない。SP-247とその周辺から甕棺片がまとまって出土した。

SC-019出土遺物 Fig.29

コンテナ3箱分の遺物が出土した。甕、壺、成人用甕棺片等の弥生土器の他に、黒曜石チップ5点がある。古式土師器2点が混入しており、ピット等の遺構の検出漏れがあったようである。

153～164は甕の口縁部片である。153は「く」字形に短く屈曲する口縁部で、外面縦位の刷毛目、内面ナデの後、口縁を横ナデ調整する。淡橙褐色を呈し、胎土に多量の砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成良好。154～163は弥生時代中期の甕の口縁部片で、断面「逆L」字形をなし、159～163は内面が少し突出する。158のみ口縁下に貼付された断面三角形突帯が残る。いずれも磨滅しているが、調整度を観察できるものでは胴部外面に縦位の刷毛目、胴部内面にナデ調整後、口縁部横ナデ調整を

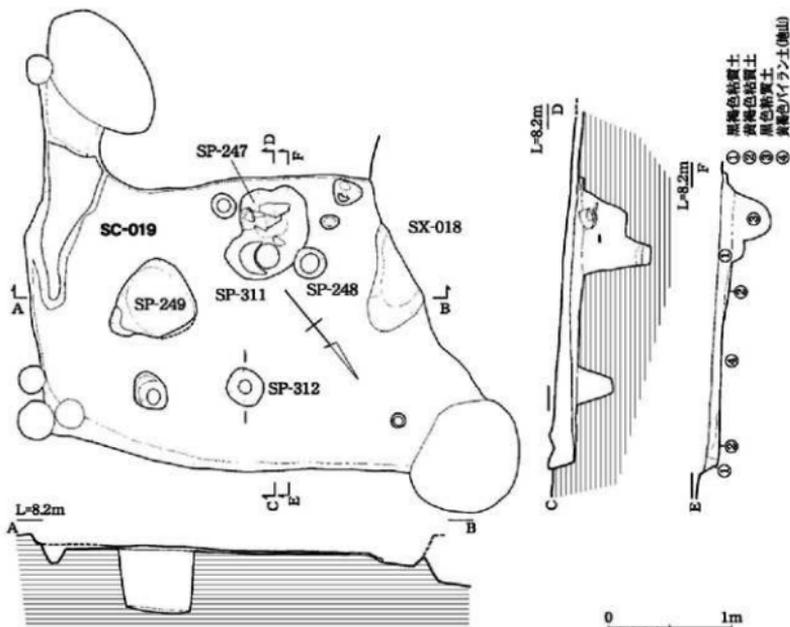


Fig.28 SC-019(1/40)

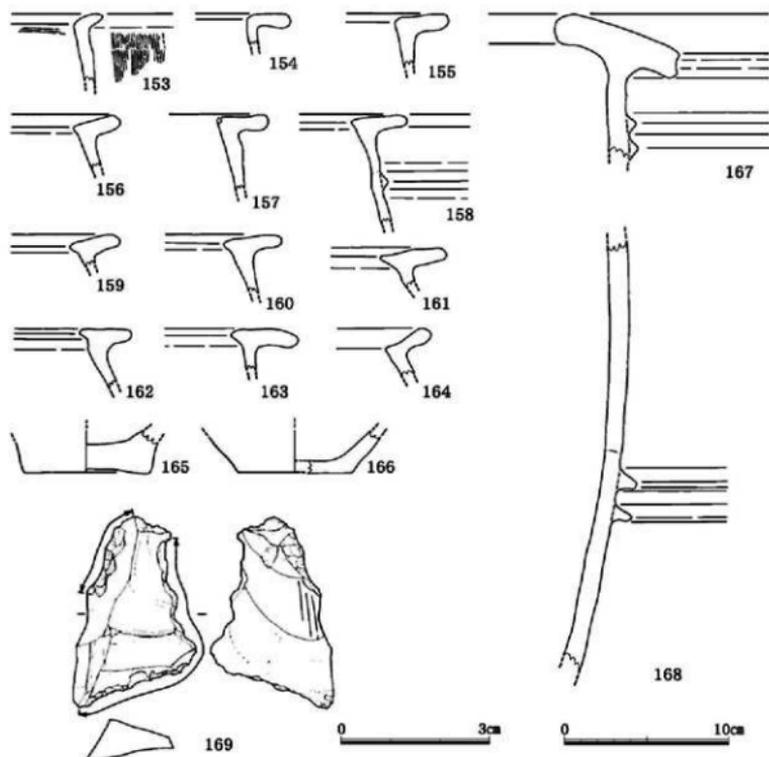


Fig.29 SC-019出土遺物(169は1/1、他は1/3)

加える。色調は濃淡の差はあるが橙褐色を呈し、胎土に多量の砂粒と少量の雲母粒を含む他、160は斜長石を少量含む。焼成は、155が不良、156・157・163がやや不良で、他は良好である。いずれも小片のため法量不明。164は弥生時代後期初頭の甕の口縁部片である。断面「く」字形をなし、口縁上面が窪む。横ナデ調整で、淡橙褐色～黒褐色を呈し、胎土に多量の砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成良好。SP-248出土。

165は甕の底部片で、外底がやや窪む。内底に指押さえの痕があるが、磨滅して調整不明。淡褐色で、胎土に多量の砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成不良。166は壺の底部片であろう。平底をなし、磨滅するが内面ナデ調整か。淡橙褐色で、胎土に多量の砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成不良。

167・168は成人用甕棺の破片で、接合しないが同一個体か。口縁は断面T字形をなし、外傾して端部が面取りにより窪む。口縁直下と胴部に突帯2条を貼付し、横ナデ調整する。その他の調整痕は不明。淡橙褐色～橙褐色を呈し、胎土に多量の砂粒と僅少の雲母粒を含み、焼成は不良。法量不明。

169は黒曜石刮片で、上辺と左下辺を除き密に使用痕がある。

古式土師器2点と、ビットSP-248出土の164を除けば弥生時代中期におさまろう。

SC-020 Fig.30

調査区中央の東壁際に検出した。竪穴住居跡の貼床を示す汚れた地山土の区画があり、これを掘り下げていった結果、一部が不整形の土坑となった。北東側は調査区外に伸び、南側はSC-012や中世の土壇墓SK-031等に切られており、範囲が狭いため全容をつかみ難い。土坑は住居の一部か、もしくは住居に切られる遺構かもしれない。北西辺に貼床と地山がなす直線的な境目があり、住居プランを示すと思われる。地山土は黄褐色粘質土である。炉跡や主柱穴など住居に関わる施設は不明である。土坑は不整な楕円形プランで、長径2.3m、短径1.3m、深さ0.4mである。

SC-020出土遺物 Fig.31

コンテナ2箱分の遺物がある。大半が弥生土器で、図示した遺物の他に黒曜石チップ14点がある。

170～174は弥生土器の甕である。いずれも口縁の断面が「逆L」字形を呈し、口縁部内端が若干張り出す。磨滅したものが大半だが、もっとも残りの良い172では、外面縦位の刷毛目、内面刷毛目の後ナデ、最後に口縁内外横ナデ調整で、他も同様の調整手法と考えられる。色調が橙褐色ないし灰褐色を呈し、胎土に砂粒多量、雲母粒少量を含むものが大半である。焼成は172が不良、174がやや不良で、他は良好である。図上復原による外口径は、順に27.6cm、28.8cm、30.4cm、30.8cm、33cm。

175～177は甕の底部である。175は外底が窪んで上げ底気味となり、177はほとんど窪みがなく、176はその中間である。175は磨滅して調整不明。淡橙褐～淡灰褐色で、砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成不良。底径7.8cm。176は外面縦位の刷毛目、内底に指押さえ痕が残る。外面淡橙褐色、内面黒色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成良好。底径8.6cm。177は外面縦位の刷毛目調整以外は不明。外面橙～褐色、内面淡灰褐色で、胎土に砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成不良。底径7.4cm。

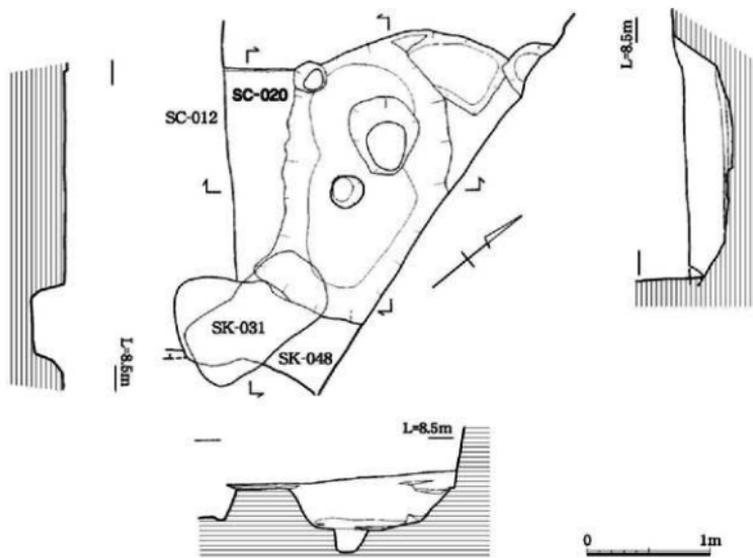


Fig.30 SC-020(1/40)

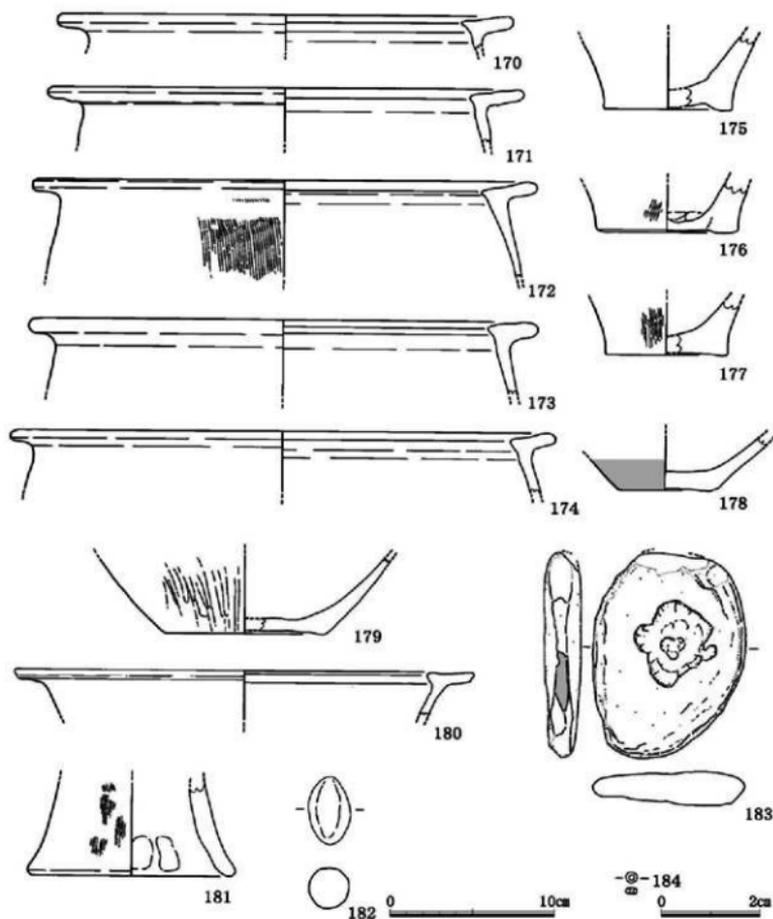


Fig.31 SC-020出土遺物(184は1/1、他は1/3)

178・179は壺の底部で、外底が若干窪む。178は外面に丹塗りを施し、暗赤色を呈するが、他の調整は不明。内面淡灰褐色で、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好。底径5.6cm。179は外面に縦位のヘラナゲ、内面調整不明。淡灰褐～黒色で、胎土に砂粒多量と雲母粒少量を含み、焼成不良。底径9.6cm。

180は高杯の口縁部片で、断面鰐先形をなす。磨滅して調整不明。淡褐～灰白色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成やや不良。181は器台の小片で、磨滅しているが外面に縦位の刷毛目、内面に指押さえ痕が残る。淡橙褐色で内面が一部黒褐色を呈し、砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好。

182は土製の投擲で、磨滅して調整痕は不明。灰褐～黒色で、胎土は精良で砂粒・雲母粒を少量含み、

焼成不良。183は凹石で、上端の一部を欠く。一方の平坦面に軽微な敲打による浅い窪みがあり、左側面の一部にも軽微な使用による平坦面がある。184はガラス製の栗玉で、青緑色に発色する。径2mmと極小である。

SC-042・043 Fig.32, PL.6

調査区北寄りに位置する。雨水管による未調査区に分断されるが、壁溝を伴う立ち上がりとし、これに直交する方向に伸びる壁の立ち上がりにより、竪穴住居のコーナー部と判断した。前者を042、後者を043として遺物を取り上げた。西側がSX-018に大きく削り取られ、平面プラン・法量は不明である。東壁は20cm弱の高さを残し、この壁際に周溝がある。周溝は幅20cm、深さ約5cmで、北壁には回らない。東壁際には隅丸方形の屋内土坑SP-302があり、長径0.7m、短径0.5m、深さ20cm弱を測る。覆土は黒褐色粘質土、貼床はなく、地山は黄褐色粘質土～バイラン土である。炉跡、主柱穴は不明。

SC-042・043出土遺物 Fig.33

合わせて73点の弥生土器片のみが出土した。甕、壺、高坏、器台に分けられる。

185～188は甕の口縁部片で、断面「逆L」字形に屈曲し、188のみ「く」字形に立ち上がる。磨滅しているが、口縁内外横ナデ調整であろう。淡橙褐色を呈し、胎土に多量の砂粒を含む他、186を除き雲母粒を少量含み、焼成良好である。小片のため法量は不明。189は甕の底部片で、外底が窪む。磨滅のため調整不明。淡橙褐色を呈し、胎土に砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成不良。底径7.6cm。190は壺の口縁部片で、断面端先形をなす。口縁部外面の横ナデ調整以外は磨滅により不明。淡橙褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好。復原口径は外径で23.6cm。191は器台底部の小片で、調整痕は磨滅して残らない。淡橙褐色を呈し、胎土に多量の砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成良好。

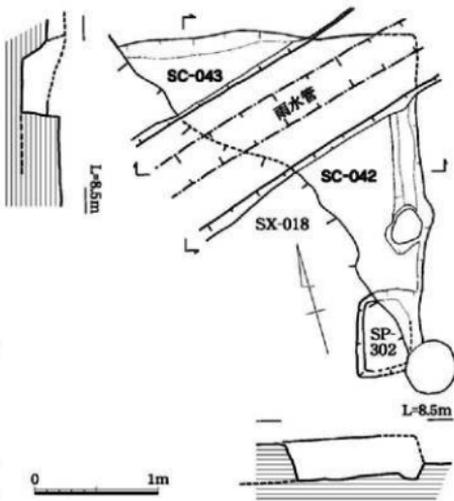


Fig.32 SC-042-043(1/40)

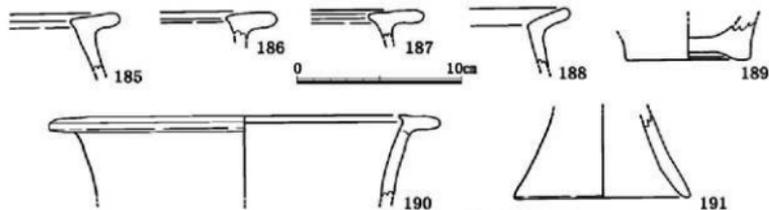


Fig.33 SC-042-043出土遺物(1/3)

SC-045・050 Fig.34, PL.6

調査区の北西隅で検出した円形プランの竪穴住居跡である。この付近から地山が西へ緩く落ちており、住居跡上面はこの埋土に覆われていた。南端は竪穴住居跡SC-046に切られ、土坑SK-047やいくつかのピットがこの遺構に切り込んでいる。また、貼床下で竪穴住居跡SC-050を確認した。住居の主要部分は調査区外にあるが、円形プランをなすと推定され、復原径は9.2mとかなり大型の住居である。壁は残りの良いところでは20cmの高さが残る。覆土は黒褐色粘質土、地山土は黄褐色バイラン土で、汚れた黄褐色粘質土で約2cmの厚さに床を貼る。壁際には周溝が走り、幅20～45cm、床面からの深さ5cm前後である。この周溝の1mほど内側に深めのピットがいくつか並ぶが、主柱穴は明らかでない。床面に焼土や炭化物の広がりは認められない。

SC-050はSC-045の貼床除去後に検出した竪穴住居跡である。壁際の周溝のみを確認した。東側の周溝が直線的に伸びており、楕円形ないし小判形の平面プランになるものと考えられる。復原径は4～6mとなる。周溝以外の住居施設については一切不明である。

SC-045出土遺物 Fig.35

遺物はコンテナ2箱分が出土した。全て弥生土器で、甕、壺、高坏、器台がある。

192～197は甕の口縁部片である。192は口縁端部が肥厚して断面逆三角形を呈する。磨滅して調整痕は不明。外面淡橙褐～淡褐色、内面橙褐～淡灰褐色で、胎土に砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成はやや不良。193～197は断面「逆L」字形をなし、うち195～197は端部が内側へ突出する。196は口縁外面を面取りし浅く窪ませる。いずれも磨滅が著しいが、195は口縁上面に刷毛目痕が残り口縁を横ナデ調整する。色調は橙褐～褐色または黒褐色で、胎土に砂

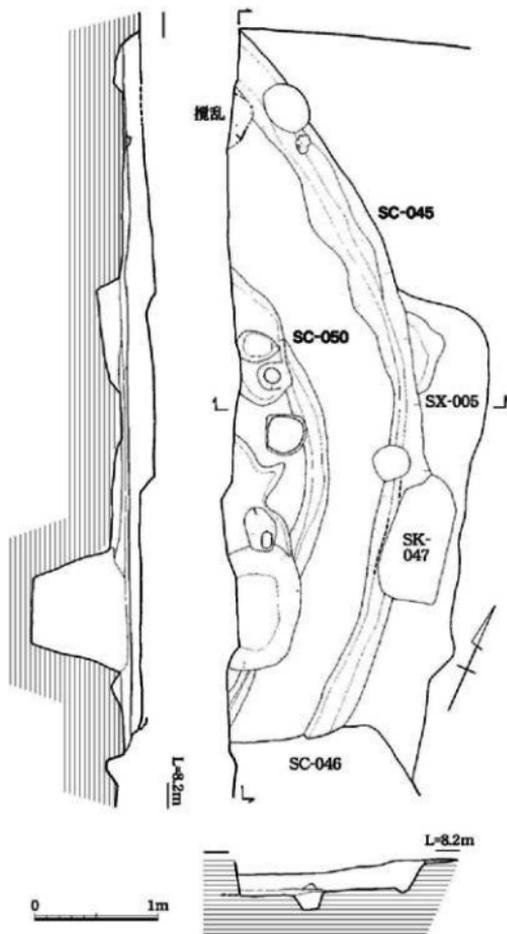


Fig.34 SC-045-050 (1/40)

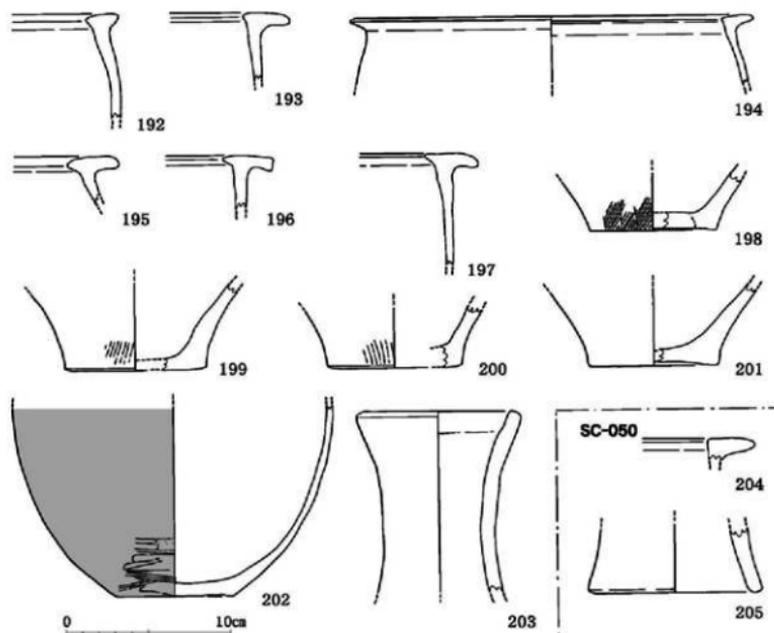


Fig.35 SC-045-050出土遺物 (1/3)

粒・雲母粒を含み、焼成は196・197が不良、他が良好。194は復原口径は外径で24.4cm、他は小片のため法量不明。198～201は甕の底部片である。平底で、若干外底が窪む。調整はいずれも外面が縦位の刷毛目、内底ナデ調整である。色調は橙褐～灰褐色ないし黒褐色を呈する。胎土は198～200が砂粒を多量に含み、199には雲母粒が少量加わる。201は精良で、砂粒・雲母粒僅かに含む。焼成はいずれも不良である。磨滅して器面が残らないが、201は丹塗り土器の可能性ある。復原底径は順に7.8cm、8.6cm、8.2cm、7.8cm。

202は壺の下半部である。胴部は球形で、外底が若干窪む。外面は丹塗り磨研で、横位のヘラ磨きが残る。内面は磨滅している。外面暗橙褐色、内面淡橙～淡灰褐色をなし、胎土に粗砂・細砂・雲母粒を少量含む。焼成は良好。

203は器台で、底部を欠く。磨滅しているが、口縁内面横ナデ調整。外面淡灰褐色、内面淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好。

弥生時代中期後半の遺構であろう。

SC-050出土遺物 Fig.35

弥生土器片9点のみである。

204は甕の口縁部片で、断面「逆L」字形に屈曲する。調整痕は磨滅して残らない。淡灰褐色を呈し、胎土は精良で、砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好。205は器台の底部片で、調整は不明。外面淡橙褐色、内面橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好。

SC-046 Fig.36, PL.7

調査区北西部で検出した。雨水管による帯状の未調査区と調査区西壁にかかり、一部を確認したに留まる。また、基盤土が南へ落ち込んでおり、南東側は削平されている。壁際の周溝と貼床のみが残っており、隅丸方形プランの住居の北コーナー部と考えられ、現況で2.1m以上×2.2m以上を測る。周溝は幅20cm前後、深さは10cm弱である。覆土は黒褐色粘質土、地山土は黄褐色パイラン土で、汚れた地山土で厚めの貼床を施す。床面には浅いピットがいくつかあるが、支柱穴や炉跡は不明。

SC-046出土遺物 Fig.37, PL.13

コンテナ2箱の遺物が出土したが、上層では遺構の切り合いを把握できずにSD-007と同時に掘り下げ、ここで3箱の遺物が出土した。主体は弥生土器が占める。

206～208は弥生土器である。206は甕で、ほぼ完存する。口縁は「く」字形に屈曲し、内面には稜がある。磨滅するが、胴部下端に縦位の刷毛目が残る。外面淡橙褐色、内面淡灰褐色を呈し、胎土に粗砂混じりの砂粒を多量に含み、焼成良好。口径30.8cm、器高37.2cm。207は短頸壺で、ほぼ完存する。口縁上面に2孔1組の4孔を穿つ。磨滅するが胴部内面下半に指押さえ痕がある。淡橙褐～淡褐色で、砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好。口径17.7cm、器高15.8cm。206・207は貼床から細かく割れた状態で出土しており、前代の土器を砕いて床面に敷き詰めた可能性もあるが、SC-046の床面に重複して弥生時代の遺構が存在したとも考えられる。208は鉢で、磨滅して調整痕は不明。橙褐～淡橙褐色で、胎土に多量の砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成良好。復原口径14.5cm。

209～213は古式土器である。209・210は布留系の甕で、口縁は内湾する。209は口縁端部が若干外へ出る。磨滅するが外面横位の刷毛目調整。淡黄褐色で、胎土に砂粒を含み、焼成不良。210は口縁端部が内側に少し突出する。磨滅するが口縁横ナデ。灰褐～黒色で、細砂と雲母粒を少量含み、焼成不良。壁溝から出土した。211は在来系の甕の底部であろう。痕跡的な底部があり、器壁が厚い。磨滅のため調整不明。淡灰褐～淡橙褐色で、砂粒を多量に含み、焼成不良で外面に黒斑がある。212は小型丸底甕である。口

縁高・口径とも胴部を大きく上回る。外面は縦位の刷毛目後、横位のヘラ磨きを底部まで密に施す。内面は口縁部に斜位の刷毛目後、横位のヘラ磨き、胴部上半ヘラ削りで下半ナデ調整。213は高坏の坏部残欠。口縁の屈曲は丸く、大きく外反する。器面が剥落して調整不明。淡橙褐～淡灰色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好。復原口径17.2cm。

古墳時代前期の住居で、SC-016に後出しよう。

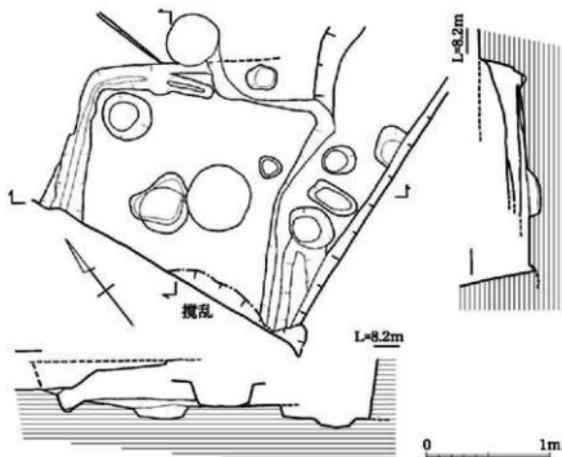


Fig.36 SC-046(1/40)

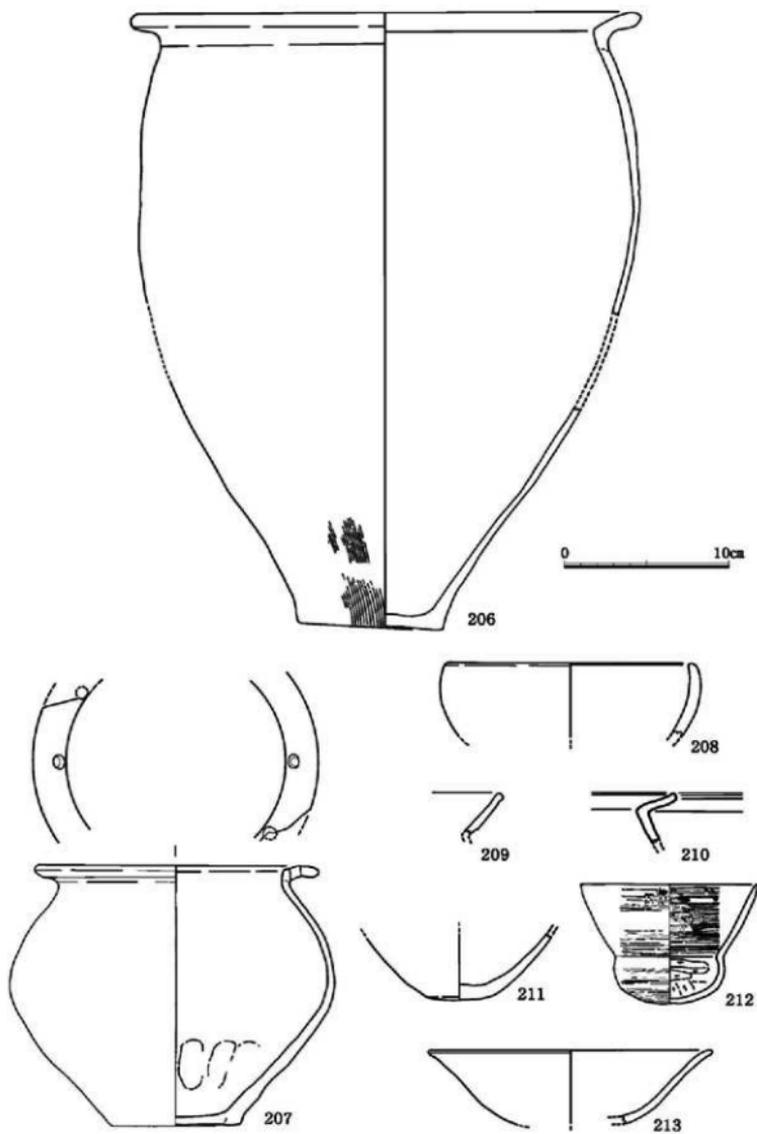


Fig.37 SC-046出土遺物(1/3)

SC-049 Fig.38, PL.7

調査区中央の西壁際に検出した遺構で、住居の可能性はある。ただ覆土は地山土に近似しており、他の住居跡覆土とは明らかに異なる。SC-012等、他の全ての遺構に切られており、これらの壁面や

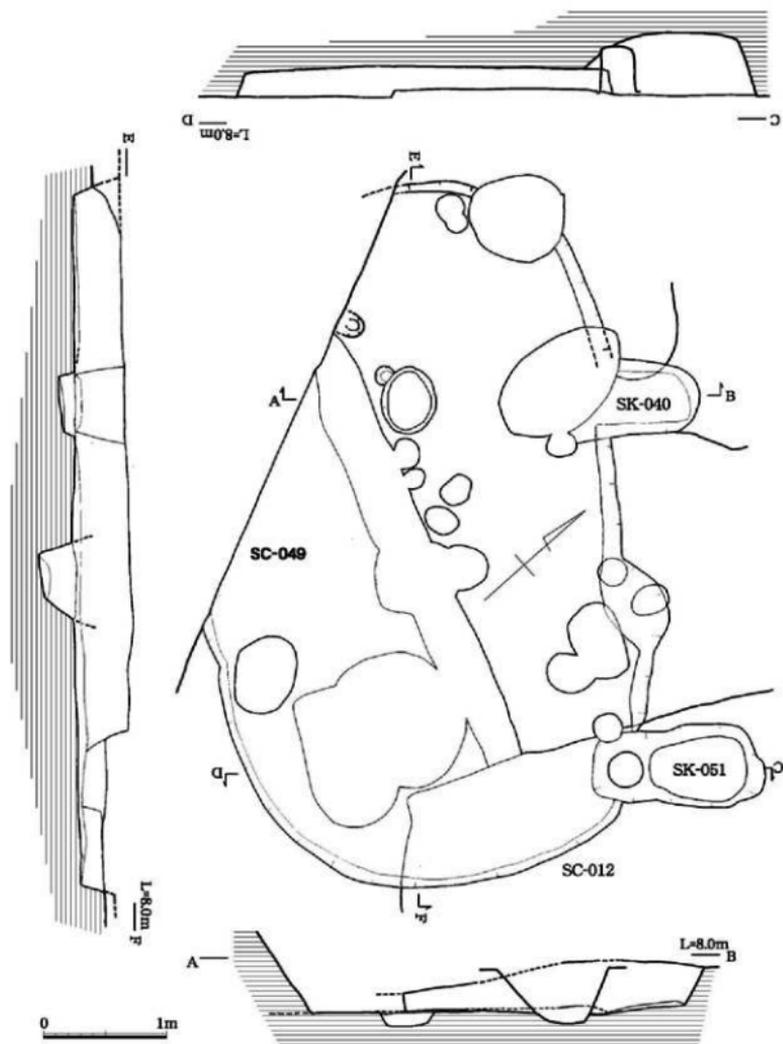


Fig.38 SC-049 (1/40)

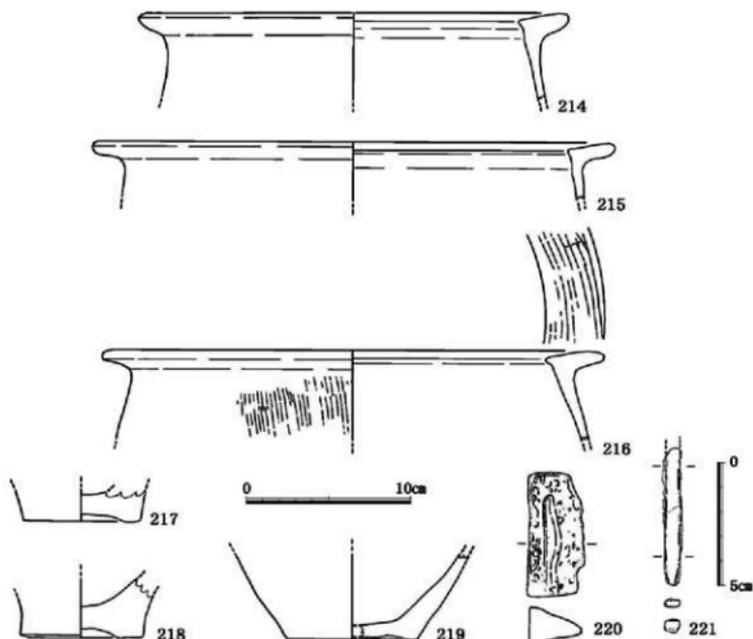


Fig.39 SC-049出土遺物 (221は1/2,他は1/3)

底面に現れた痕跡を手がかりに掘削を行った結果、楕円形プランの遺構であることが分かった。よって時期的に周辺の遺構に先行するものである。長径5.7m、短径3.5m、深さ40cmを測る。覆土は黒褐色粘質土粒を少量含む黄褐色粘質土で、底面には厚さ1cmの黒色粘質土が薄く堆積しており、掘削後しばらく時を置いて一気に埋め戻した印象を受ける。底面には浅いピットが三つほどあるが、住居柱穴とおぼしきものはない。しかし、北側の壁に取り付く土坑SK-040・051は覆土がSC-049に近似しており、これに伴う施設である可能性が強い。ともにSC-049の長軸に直交する方向に長い隅丸長方形プランである。SK-040は長さ0.9m、幅0.6m、深さはSC-049の底面にほぼ等しい。SK-051は長さ1.4m、幅0.65m、深さは50cmでSC-049底面よりやや下がる。

SC-049出土遺物 Fig.39

コンテナ1箱の遺物が出土した。甕、壺の弥生土器の他、図示した石・鉄製品がある。

214～216は弥生土器甕の口縁部片である。断面が「逆L」字形を呈し、口縁上面が内傾し、内側への突出は少ない。214は外面が磨滅し、内面ナズ、口縁横ナズ調整。淡橙褐色で、胎土に多量の砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成やや不良。復原口径は外径で26cm。215は磨滅して調整不明。淡橙褐色を呈し、多量の砂粒と僅かな雲母粒を含み、焼成良好。復原口径は外径で31.6cm。216は口縁上面に刷毛目、胴部外面に縦位の刷毛目、内面にナズ、口縁に横ナズ調整。外面橙色、内面暗橙褐～淡橙褐色で、砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成良好。復原口径は外径で30.4cm。217・218は甕の底部片で、外底が窪み、上げ底となる。217は磨滅して調整不明。外面褐色、内面橙色を呈し、粗砂混じり

の砂粒を少量含み、焼成不良。218は外底の窪みに指押さえ痕のみ残る。外面橙褐色、内面褐～黒色を呈し、細砂・雲母粒を多量に含み、焼成不良。219は壺の底部片で、外底が若干窪む。磨滅して調整痕は残らない。外面淡褐色、内面淡橙褐色で、細砂・雲母粒を多量に含み、焼成良好。外底に黒斑がある。

220は軽石製の浮子か。正面に浅い溝がある。

221は鉄製品の一部で、方柱状をなし、基部で厚く先端部がやや薄い。長さ5.5cm、幅0.6cm、厚さ0.3～0.4cmである。何らかの柄の一部であろうか。

出土土器は田崎博之氏編年の須玖Ⅰ式中段階に相当し、検出遺構のうちでは最古に位置付けられる。

SC-052 Fig.40

調査区のほぼ中央に位置する。竪穴住居跡のコーナー部と考えたが確証はない。平面形がL字形をなす土坑と、これより南へ伸びる立ち上がり、土坑と相対する位置にある壁溝状の浅い窪みとからなる。東西2m以上、南北3.1mほどの隅丸方形プランの住居跡であろうか。東側は削平により完全に消滅しており、南西辺の壁の立ち上がりは5cmに満たない。L字形土坑の規模は2.0×1.5m、深さ30cm弱。壁溝状の窪みは幅15cm、深さ15cmを測る。覆土は黒褐色粘質土、地山土は黄褐色粘質土である。範囲内にはピットが集まるところもあるが、住居との関係は明らかにし難い。

SC-052出土遺物 Fig.41

平面L字形をなす土坑から出土した遺物を示す。甕・器台等の弥生土器片が140点ある。

222～224は弥生土器の甕で、口縁部の小片のため、法量不明である。断面「逆L」字形で、224

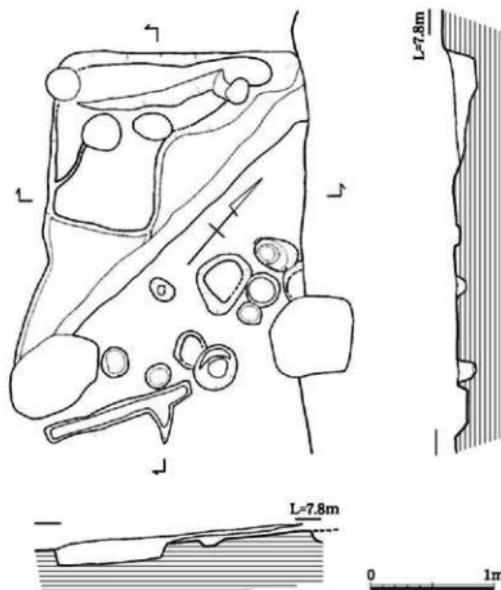


Fig.40 SC-052 (1/40)

は内側が突出する鋤先形をなす。いずれも磨滅が著しいが、口縁は横ナデ調整である。222は淡橙褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好。223は淡黄褐色で、砂粒・雲母粒を少量含み、焼成不良。224は黒褐～淡橙褐色で、砂粒多量・雲母粒を少量含み、焼成不良である。

弥生時代中期の遺構であろう。

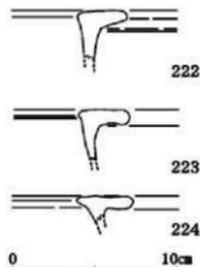


Fig.41 SC-052出土遺物 (1/3)

(2) 溝

SD-001 Fig.42, PL.8

調査区南端で検出した自然流路である。攪乱坑や試掘トレンチによって一部が破壊される。南東から北西に向かって蛇行して流れ、落ち際は調査区内を斜めに横切り西壁際では南端から16.5mまで伸びる。丘陵縁辺に形成された流路と考えられ、南側の席田大谷遺跡第6次調査でこの対岸と考えられる落ち込み（包含層）を確認しているが、ここでは落ち際は南に伸びており、1/500地形図上で合成すると東側では5m以内、西側では25m以上の幅を計測でき、両調査区の間で大きく開口する谷であると考えられる。調査区南西隅には僅かながら立ち上がりりが認められ、流路内は細かい支流に分かれるのであろう。覆土は自然埋没の状況を示していたが、弥生時代中期土器を中心とする大量の遺物がブロック状に固まって出土することから、一括廃棄ないし部分的な埋立てを行った可能性もある。

遺物は4層に分けて取り上げたが、各層とも遺物を多量に含み、コンテナ約150箱分が出土した。最上層は黒色粘質土で、上面に古式土師器を伴う土坑が掘られており古墳時代前期には完全に埋没していたものと考えられる。最上層は一部に須恵器を含むが弥生前期末～中期末の土器が多い。上層は黒褐色粘質土で、磨滅した中期土器が多く、後期初頭までを含む。下層は灰黒色粘質土でシルトブロックを含み、中期末～後期初頭の土器が多い。最下層は灰黒色シルトで弥生時代中期末までの土器を含み、一部は土器小片を多量に含む砂礫となる。後述するSD-030は最下層上面から掘り込まれている。地山土は黄白色シルト～黄褐色粘質土で、下部では還元された灰白色粘質土となる。初期には一定の水流があったとみられるが、下層以上は露んだ状態の中で埋没していったと考えられる。

SD-001出土遺物 Fig.43～51, PL.14～16

各層から日常土器や甕棺片、筒形器台や注口土器、丹塗り土器など祭祀性の強い土器が多く出土した。最も特筆すべきは最下層から出土した鐔形土製品であろう。紙面に限りがあるため、代表的な器種と特徴的な土器コンテナ約10箱分、石器23点を図示するに留めた。225～274は弥生土器、275～297は石器である。

225～229は甕である。225は口縁部が「逆L」字形をなし、口縁端部を面取して板小口による刻目を入れ、頸部に「M」字形突帯を貼付する。胴部内外ナデ後、口縁横ナデで、外面はかなり下位まで横ナデが及ぶ。頸部内面～外面に丹塗りを施し、口縁上面に放射状に暗文を入れ、胴部外面をヘラナデする。丹は赤褐色、その他は淡灰白色を呈し、胎土は精良で雲母粒を少量含み、焼成良好。口縁外径の復原口径28cm。226は口縁が「く」字形に屈曲し、内面の稜はシャープではない。口縁端部は面取りされ沈線状に窪む。胴部は大きく張り、頸部に「M」字形突帯を貼付する。口縁部上面～突帯を横ナデし、内面に指押さえ痕が残るが、磨滅が著しくその他の調整痕は不明。口縁上面から外面に丹塗りの痕跡が僅かに残る。丹は暗赤色、他は淡褐色～淡灰褐色を呈し、胎土は比較的精良で、砂粒少量、雲母粒多量、暗赤色鉱物多量を含み、焼成良好。復原口径23.6cm。227は口縁が「く」字形に屈曲するが、内面の稜は不明瞭である。器壁は薄手で、磨滅が著しく調整痕は不明である。淡灰白色で、胎土に極めて多量の砂粒と僅少の雲母粒を含み、焼成良好。口径33cm。228は口縁が「く」字形をなし、内面に明瞭な稜が入る。外面縦位の刷毛目、内面ナデ、口縁横ナデ。淡褐～灰白色で、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好。229は小形の甕で、口縁が「逆L」字形に屈曲し、内面に稜はない。肩部の「M」字形突帯は退化している。口縁上面～外面に丹塗りの痕跡を留めるが、磨滅のため調整不明。丹は暗赤色、他は淡褐～灰白色で、胎土に砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成良好。復原口径14.4cm。

230～232は大型甕である。230は細口で、口唇部は肥厚して平坦面をなし、内側に小さく突出する。頸部外面に断面三角形突帯1条を貼付する。磨滅が著しく調整痕は残らない。淡褐～淡灰白色を呈し

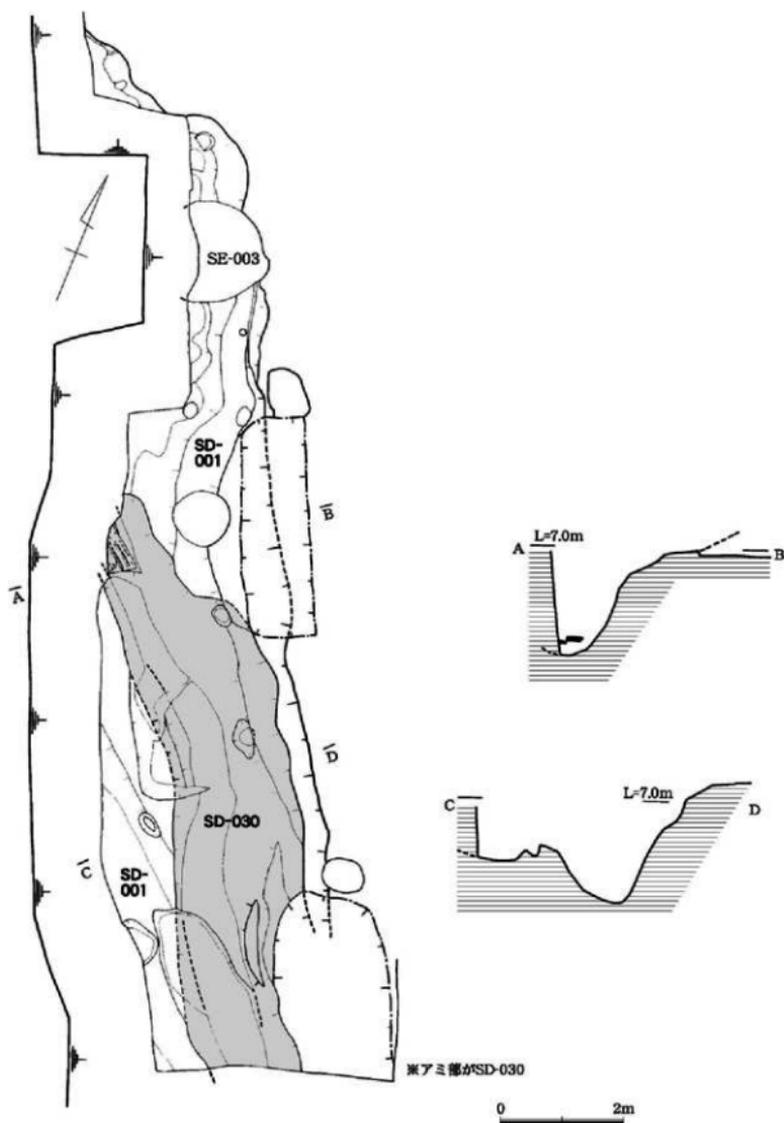


Fig.42 SD-001-030 (1/80)

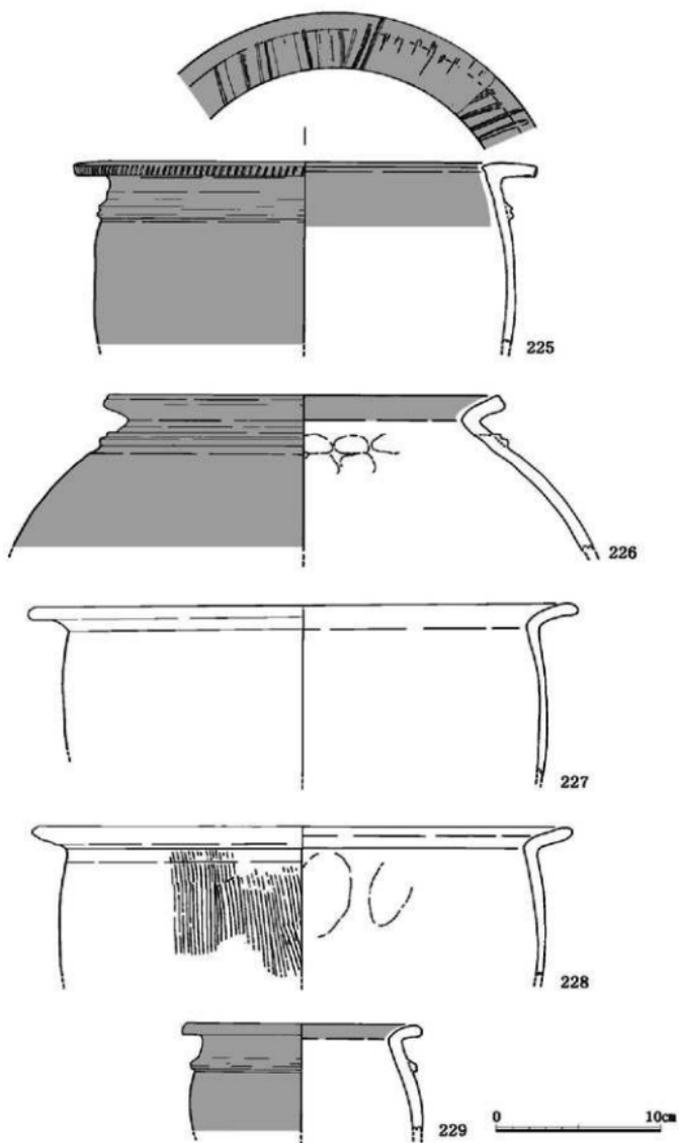


Fig.43 SD-001出土遺物・I (1/3)

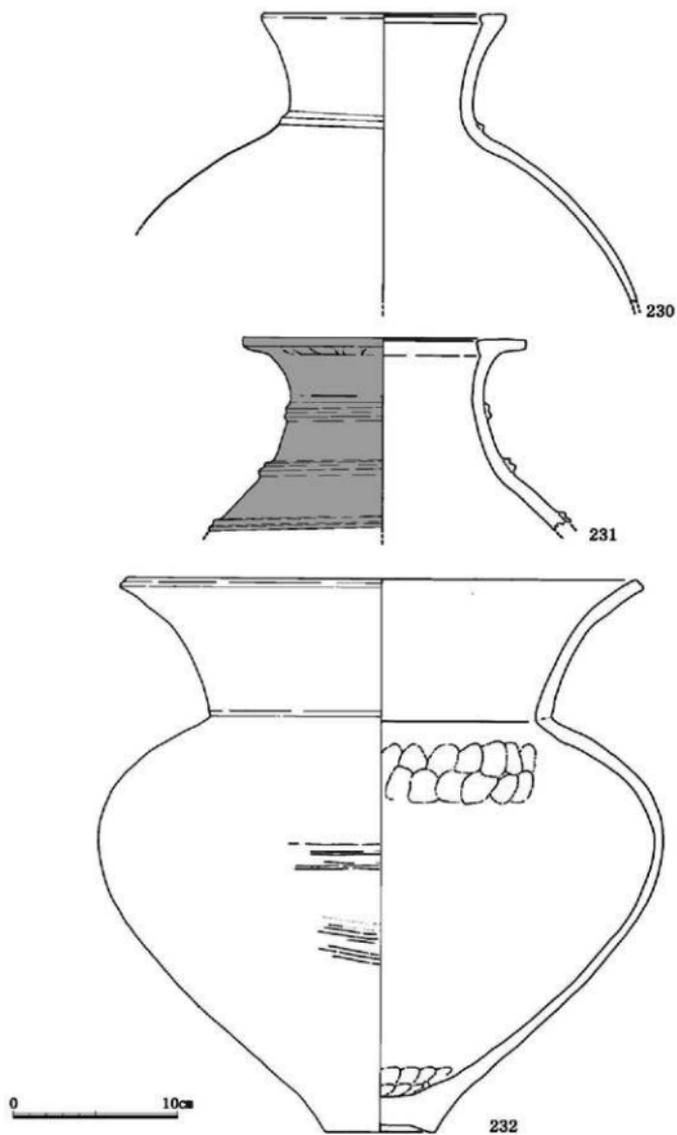


Fig.44 SD-001出土遺物・I (1/3)

胎土に粗砂等の砂粒を多量に含み、焼成良好。口径は外径で14.8cm。231は口縁が鋤先形をなし、頸部に「M」字形突帯を3条貼付し、外面を丹塗りする。調整痕は残らない。淡褐色～淡灰色を呈し、胎土は精良で砂粒・赤褐色粒を少量と雲母微粒を多量に含み、焼成不良。口径は外径で17.2cm。232は広口壺で1/2強が残る。口縁端部は面取りにより沈線状に窪み、外底は若干窪む。磨滅しているが、胴部外面に横位のへら磨き、内面に指頭痕、口縁端部に横ナデが残る。丹塗りの痕跡はない。淡褐色～淡灰白色で、胎土は精良で雲母粒を多く含み、焼成良好。復原口径30.8cm。器高33.5cm。

233～236は小型の壺である。233は広口で、口縁は短く外反する。胴部内面に指押さえ、口縁に横ナデ痕が残る以外は調整不明。淡褐色～淡橙褐色で、石英等の砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成良好。復原口径10.4cm。器高11.4cm。234は頸部が内湾して立ち、口縁は「逆L」字形に屈曲する。磨滅が著しいが、胴部内面に指押さえ痕、口縁上面～頸部外面に横位の刷毛目が残る。外面淡褐色～淡灰色、内面黒色を呈し、胎土は精良で雲母粒を少量含み、焼成不良。復原口径11.8cm。235は胴部片だが234に似た器形になろう。胴部内面の指押さえ痕以外は調整不明。淡橙褐色で、胎土に粗砂等の砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成良好で、胴部下半外面に黒斑がある。236はやや大振りの広口壺で、頸部は直に開き、口縁は鋤先形で上面は外傾する。頸部に断面三角形突帯を1条貼付し、横ナデする。胴部内面を指整形後ナデ、頸部内面をナデ、口縁内外を横ナデ調整するが、他は器面が剥落して調整不明。灰白～淡橙褐色を呈し、胎土は精良で砂粒・雲母粒を少量含み、焼成不良。ほぼ完存し、口径は内径12.0cm。器高18.5cm。237・238は袋状口縁壺で、同一個体であらう。口縁は丸く、直下にシャープな断面三角形突帯を貼付する。突帯を横ナデ調整し、外面に丹塗りとへら磨きを施す。内面は

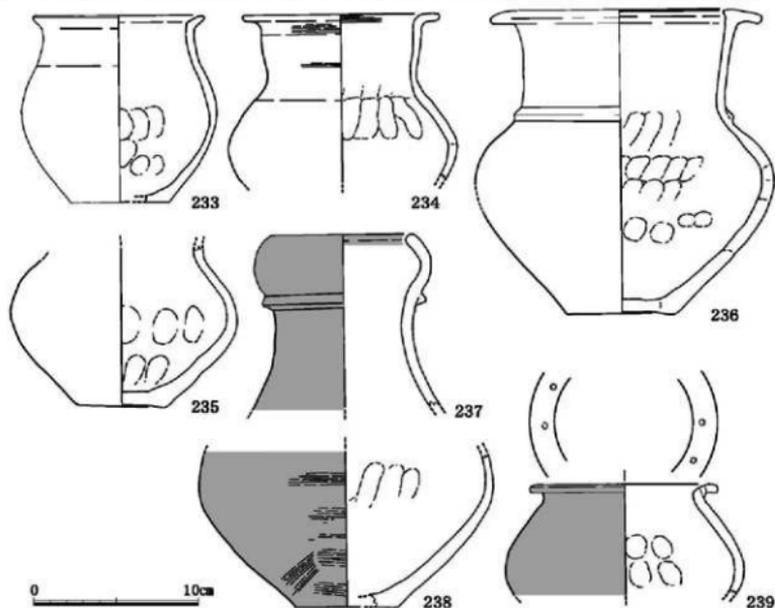


Fig.45 SD-001出土遺物・Ⅲ(1/3)

胴中に指押さえ痕が残り、下半は削り後ナデ調整である。丹は暗赤色、他は淡褐～黒色を呈し、胎土に粗砂等の砂粒を多量に含み、焼成良好。239は無頸壺である。口縁上面に2カ所の焼成前穿孔があるが、おそらく2孔一對の4孔であろう。胴部内面に指押さえ痕、外面に丹塗り痕が残るが、他は調整不明。淡橙褐色、胎土は精良で砂粒・雲母粒を僅かに含み、焼成良好。復原口径11.4cm。

240～246は鉢で、242までは大型品である。240は口縁が「逆L」字形に屈曲し、上面は外傾する。口縁直下に断面三角形突帯を1条貼り付け、口縁から突帯まで横ナデする。胴部内面下半を指押さえし、内面はナデ調整。外面は磨滅するがナデ調整か。淡橙～橙色を呈し、胎土に粗砂等の砂粒を多量、雲母微粒を少量含み、焼成良好で胴部外面下半に黒斑がある。ほぼ完存し、口径は外径で30.5cm、器高16.2cm。241は口縁が内湾し、端部は面取りされる。磨滅が著しいが、外面に丹塗りと横位の研磨痕が一部残り、内底に指押さえとへら痕がある。丹塗り部分は暗赤色、他は淡橙褐～淡灰色を呈し、胎土は精良で雲母粒を多量に含み、焼成不良。ほぼ完存しており、口径18.3cm、最大径23cm、器高13cm。242は小片だがやはり内湾口縁で、口唇部を面取りし、焼成前に外から1孔を穿つ。外面に暗赤色の丹塗り痕跡が残る。内面は淡橙褐色、胎土は精良で細砂と雲母粒を僅かに含み、焼成不良。243はやや小振りの鉢で、口縁は内湾し、端部は丸い。磨滅するが、外面へらナデ、口縁横ナデ調整で、内面

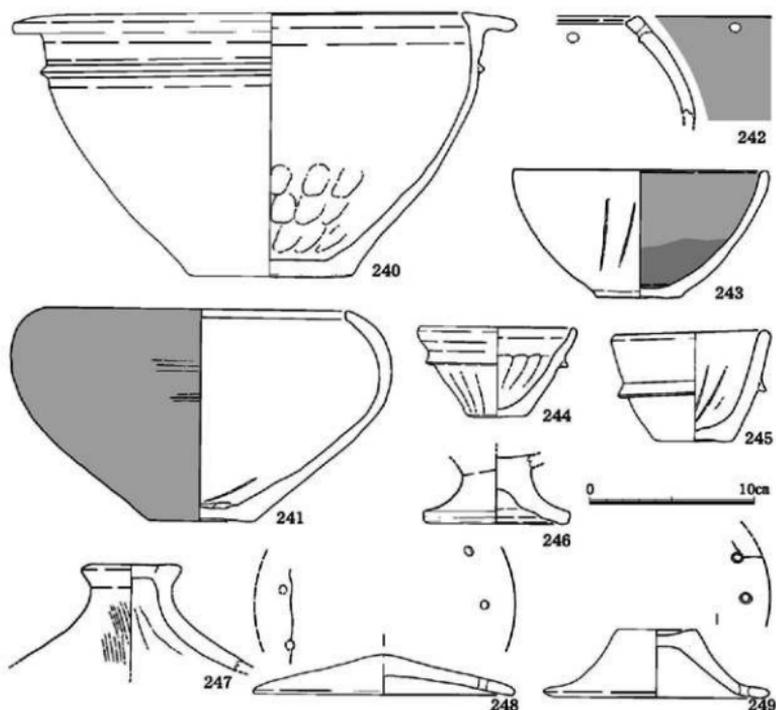


Fig.46 SD-001出土遺物・Ⅳ(1/3)

に丹塗りを施しており、下半は特に丹の残りが良い。丹は赤褐色、他は灰白～淡褐色を呈し、砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成良好で底部周辺に黒斑がある。ほぼ完存し、口径15.4cm、器高7.8cm。244・245は小型品で、口縁下に断面三角形突帯を1条貼り付ける。244は口縁が内湾し、端部を面取りする。磨滅するが、内外に指頭痕が残る。淡褐色～灰黒色をなし、胎土に粗砂等の砂粒と雲母粒を少量含み、焼成不良。完存し、口径9.8cm、器高5.5cm。245は内底にヘラと指の痕跡が残るが調整不明。橙～淡褐色で、砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成良好で、外面に黒斑がある。完存し、口径9.8cm、器高6.7cm。246は鉢の脚である。鉢底に差し込んで接合し、内外面へラ研磨調整。淡灰色を呈し、胎土に砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成良好で底部の1/2に黒斑がある。

247～249は蓋である。247は壺の蓋の小片で、外面刷毛目、内面は磨滅するがナデ調整か。淡褐～灰白色を呈し、砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成良好。248は無頸壺の蓋で、縁近くに2孔一対の計4孔を開ける。磨滅が著しいが、内面に指押さえ痕がある。灰白色を呈し、胎土は精良で雲母微粒を多量に含み、焼成良好。径15.8cm、器高2.4cm。249も蓋である。器高が高く、天井部が窪む。縁に2孔が残り、2孔一対の計4孔になると思われる。著しく磨滅して調整不明。淡褐～淡灰褐色を呈し、胎土に多量の砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成良好。復原径13.7cm、器高4.1cm。

250～257は高坏である。250は口縁が鋤先形をなし、上面はわずかに外傾する。脚上端に「M」字形突帯を巡らす。坏内面へラナデ、口縁上面横ナデ、脚内面に螺旋状のシボリ痕があるが、その他の調整は不明。淡灰～淡褐色を呈し、砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成良好。口径（外径）26cm。251も鋤先形口縁で、端部は面取りし、やや下方に垂れる。口縁下に断面三角形突帯を貼付し、脚を坏底に差し込んで接合する。磨滅するが、内面に灰白色粘土による化粧土を塗布し、この上を漆状の黒色膜が覆う。淡橙～灰白色を呈し、胎土に少量の砂粒と多量の雲母粒を含み、焼成良好。口径（外径）35.5cm。252は口縁に裝飾を施さず面取りするもので、外面に断面台形突帯1条を貼付する。磨滅するが内外面に丹塗りが残る。丹は赤褐色、他は淡橙～淡灰色をなし、胎土は精良で砂粒・雲母粒を少量含み、焼成はやや不良。復原口径24.2cm。253は口縁端と底部端を面取りし、凹縁を巡らせる。口縁は若干外反しており、脚との接合部に粘土を充填する。磨滅が著しく調整不明。橙褐色で、砂粒多量・雲母粒少量を含み、焼成良好。口縁と底部の一部を欠く。口径19.4cm、器高20.4cm。254は楕形の坏部のみ残る。口縁は丸くおさめる。内面が灰白色を呈しており、化粧土を施したか。淡褐色を呈し、胎土に砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成良好。復原口径19.0cm。255は口縁部を欠くが、254の如き楕形の坏部が付くのであろう。坏底に突起を作り、脚に差し込んで絞る。外面はへラ研磨、脚内面はシボリ後ナデ、底端部はナデ調整で、他は磨滅して調整不明。外面淡灰黒～淡橙褐色、内面淡灰褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成良好。256は脚部のみ破片で、250と同一器種と思われる。内面に螺旋状のシボリ痕があるが、磨滅が著しい。淡橙～淡灰褐色、胎土は精良で雲母粒を多量に含み、焼成良好。257も脚のみの残欠で、やや小振り。内面のシボリ痕以外は調整不明。外面灰白～黒色、内面淡橙褐色を呈し、多量の砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成不良。

258～260は筒形器台である。258は上端の破片で、鈎が付き、端部は面取りにより窪む。内面横ナデ調整で、他は磨滅して調整不明。259は鈎が下方に垂れ、端部は面取りにより凹縁が入る。鈎の端部に横ナデ痕が残り、他の調整は磨滅して不明だが、外面に丹塗りの痕跡が残る。260は下半部の残欠で、底部端は面取りにより凹縁状に窪み、ここに横ナデ痕跡が残るが、他は調整不明。3点とも淡橙～淡灰色を呈し、胎土に石英等砂粒・赤色鉱物を少量、雲母微粒を多量に含み、焼成良好である。器面が磨滅するが、いずれも丹塗りを施した可能性がある。

261・262は器台である。261は器壁が厚めで、上端は切断して平坦面とする。磨滅するが、外面

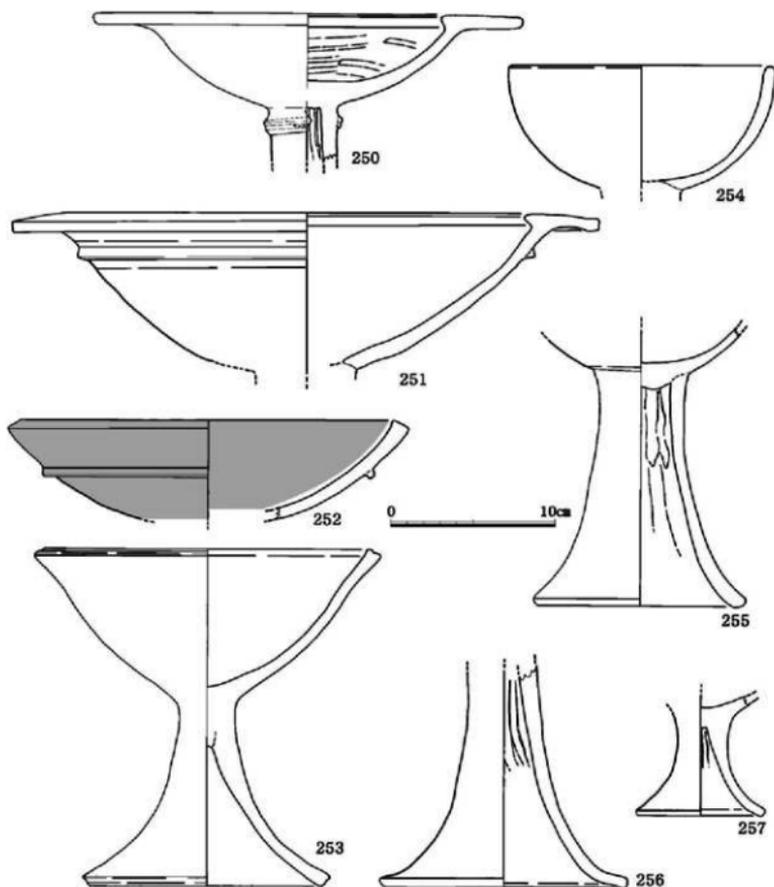


Fig.47 SD-001出土遺物・V (1/3)

にヘラ又は指による整形痕が残る。淡褐～灰白色をなし、粗砂等の砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成不良。下半にヒビ割れがあり、二次加熱を受けたものか。口径8.6cm、器高14.6cm。262は口縁と底部がラップ状に開く。器壁が分厚い。外面は縦位の刷毛目後、端部横ナデ、内面は口縁が横位の刷毛目、胴中位がシボリ後ナデ、下半が雑な刷毛目調整である。暗橙～淡橙色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良。復原口径12cm、器高17.2cm。

263は凸レンズ状の底部を持つ小型の変か。器面がほとんど剝落し、外面に縦位の刷毛目が認められるのみである。橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良。上層より出土した土器で、時期的に下ろうか。264は注口で、先端は折れ、他方は本体との接合面から剝離した痕跡が残る。外面

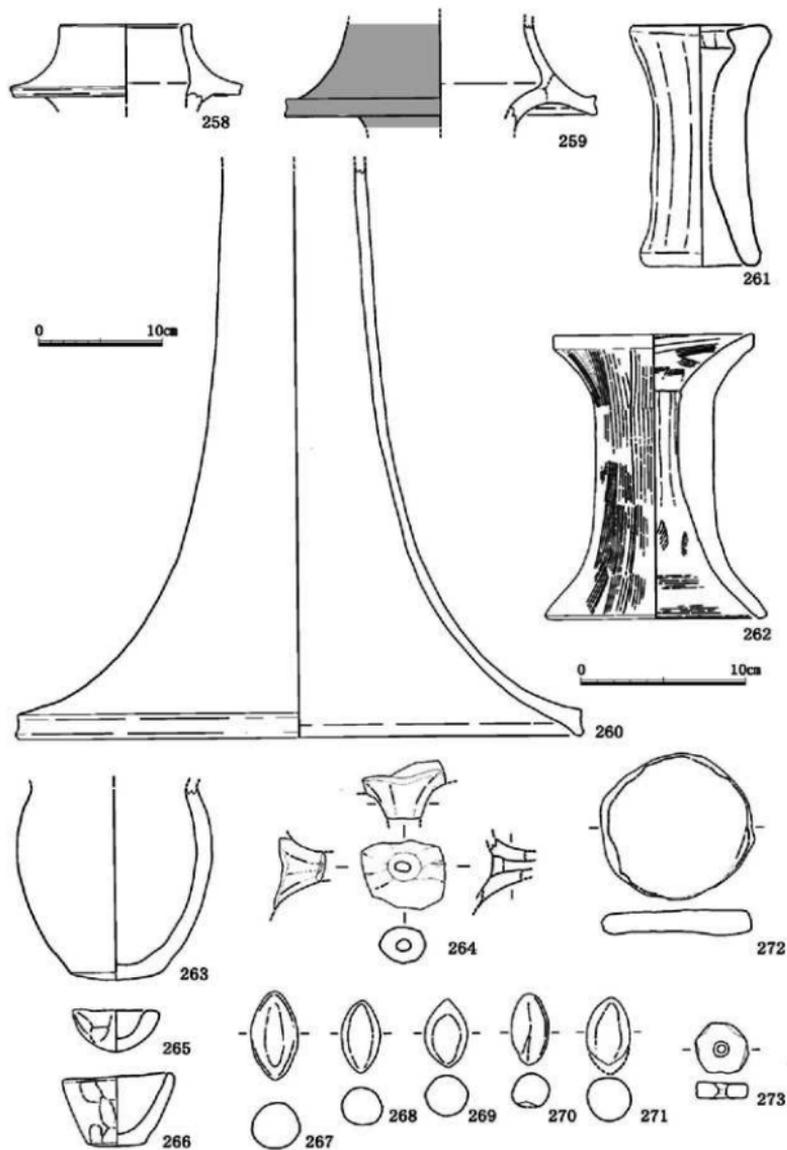


Fig.48 SD-001出土遺物・Ⅵ (258~260は1/4、他は1/3)

はヘラで整形し、小さな突帯を付ける。橙褐～黒色で、胎土に石英等砂粒を多量、雲母粒少量を含み、焼成良好。下層出土。265・266は手捏土器である。265は丸底、266は平底である。指頭痕が残るが磨滅が著しく、淡褐～灰白色を呈し、砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成良好。267～271は土製の投擲である。いずれも磨滅し、胎土は精良である。272は壺の底部を円盤形に加工した二次利用品、同じく273は土器片を小さな円盤状に加工し、中央に1孔を貫通させたものである。

274は罎形土製品で、完存する。下層から他の土器に混じって出土しており、特に埋納された状態ではなかった。無紐式載頭円錐型に分類されるが、舞が方形であるため身の上端部のみは方錐形を呈する。外側から焼成前に2孔を穿つ。磨滅しているが、上半部の内外面には浅い窪みがあり、指押さへの痕跡をナデ消したものであろう。外面のナデは丁寧で、内面は横ナデ調整する。橙～灰白色を呈し、胎土には石英等の砂粒と雲母粒を多量に含んでおり、精良とは言えない。焼成良好。器高6.7cm、底径8.2cm。

275～297は石器である。特殊な石器と石包丁は全て図化し、その他は一部を示した。

275は磨製石戈で、刃部、茎を欠損する。鑷は入らず、横断面形は凸レンズ状をなす。穿孔は表裏両面より2段階に分けて行い、まず両面に浅い窪みを彫り、後に貫通させる手法をとる。蛇紋岩製とみられるが、表面の風化が著しく確証はない。276は磨製石鏃で、鑷が入る。再利用されており、縁辺部に小刻離が施され、先端は表裏よりノミ状に研ぎ出される。277は磨製石剣もしくは石鏃の一部が剥離したものであろう。粘板岩製。278は石製紡錘車で、1/2が残る。結晶片岩製。279は黒曜石製の打製石鏃で、先端部と片脚を欠く。形態からみて弥生時代のものであろう。

280～290は石庖丁で、全て欠損している。280は片刃、他は両面より刃部を研ぎ出すが、表裏で刃部角度が異なる。全て穿孔は表裏両面より行い、いずれか片側面に偏る。284・286は2段階に分けて穿孔を行っており、275の石戈と同様の製作手法を示す。283は蛇紋岩製、288は今山産の玄武岩質安山岩製とみられ、他は輝緑凝灰岩などの薄く剥離する石材を用いる。

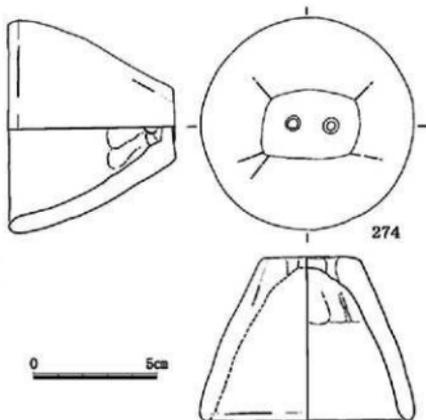


Fig.49 SD-001出土遺物・Ⅴ(1/2)

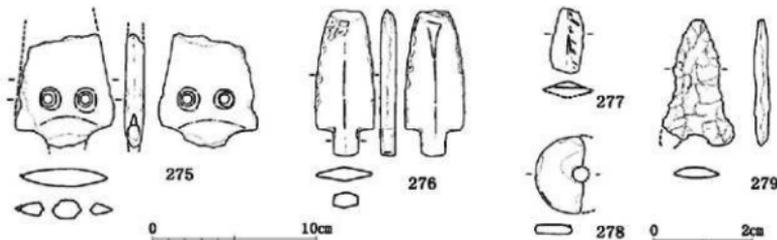


Fig.50 SD-001出土遺物・Ⅴ(279は1/1、他は1/3)

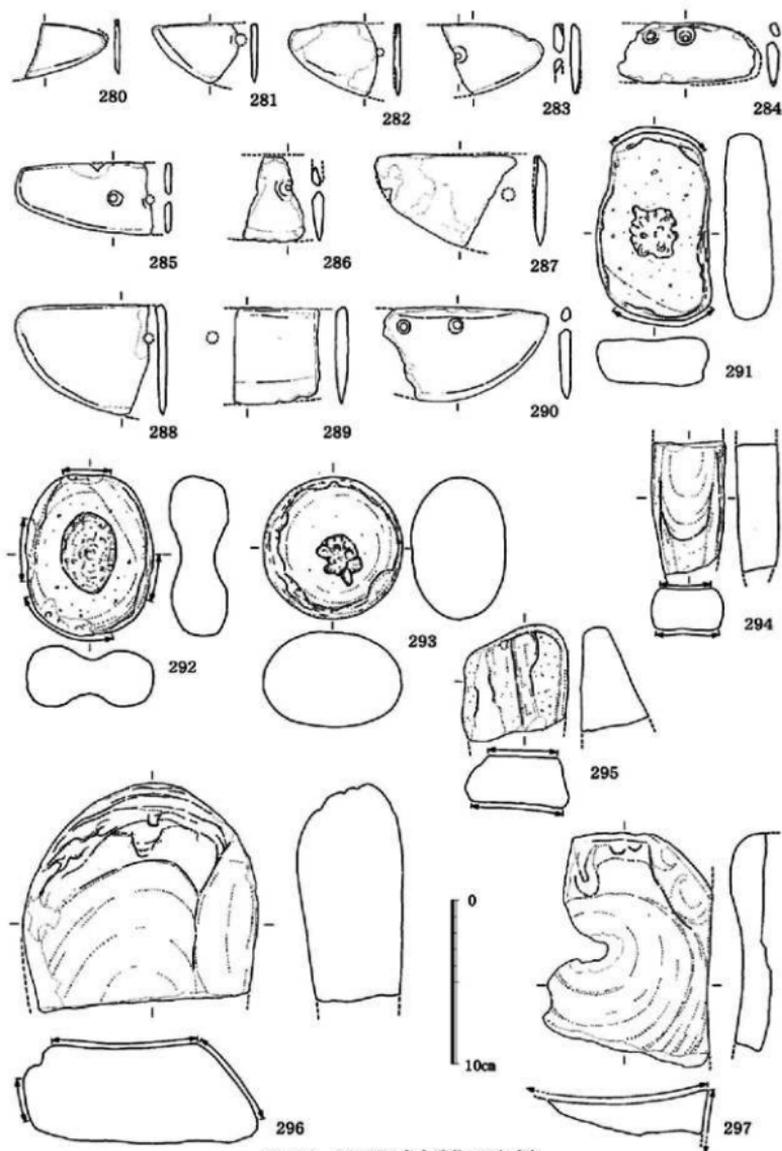


Fig.51 SD-001出土遺物・Ⅸ(1/3)

291～293は磨石・凹石・叩石である。未図化分が他に15点ある。291は表裏平坦面の凹みは軽微で、上下小口面を磨る。花崗岩製。292は凹みが極めて深く、4側面に敲打痕がある。花崗岩製。293は軽微な凹みが片面にあり、全側面を磨石として使用する。硬質砂岩製か。

294～297は砥石で、全て硬質砂岩製である。他に未図化分が31点ある。294は上下を欠くが、下端が細くなっており、穿孔具を兼ねるものか。表裏平坦面が使用により浅く窪む。295は主に正面を利用し、中央に極く浅い溝が入る。裏面の使用は軽微である。296は大型の砥石ないし台石で、正面と左右側面のみ研磨度があり、裏面は使用していない。297も大型の砥石の一部で、正面と右側面に著しい研磨痕がある。

その他、柱状片刃石斧を含む石斧片3点、黒曜石チップ28点、軽石（うち1点は浮子）2点、安山岩石核（石器素材）・石片・器種不明の石製品が数点出土している。

SD-030 Fig.42, PL.8

自然流路SD-001の最下層上面で検出した溝である。SD-001掘削途中で溝の存在に気づいたため、遺物の一部はSD-001に含まれる。また、図中に点線で示した部分は掘り過ぎた。SD-001は丘陵裾部を巡る自然流路と考えられるが、SD-030は形状からみて人為的に掘削された溝と考えられる。南東端はSD-001の落ち際に沿っているが、北西側はやや西に逃れる。調査区内で長さ10mを確認し、幅1.2～2.1m、深さは検出面から2.0m、SD-001底面から0.9mを測る。横断面形はU字形を呈し、底面は北西に緩く落ちている。調査区西壁際からカシの板材3枚が置かれた状態で出土した。溝の底面から若干浮いており、うち2枚は密着して重ねてあった。原材を一時的に水浸けして保管したものであろう。

SD-030出土遺物 Fig.52～55, PL.16

コンテナ7箱の遺物がある。大半が弥生土器で、甕、壺、鉢、器台がある。

298～312は甕である。298は口縁が如意形に強く外反し、口唇下端にヘラで刻目を入れる。外面は屈曲部を指押さえ後、縦位の刷毛目調整、内面は屈曲部に斜位の刷毛目を施し、最後に口縁内外に横位の刷毛目を施す。黒褐～淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良。復原口径28cm。299は口縁が「逆L」字形に屈曲するが、口縁の突出が小さく、口唇部と胴部三角形突帯にヘラによる刻目を入れる。外面縦位の刷毛目後、口縁から突帯を横ナデ、内面は板状工具によるナデ調整である。黒～淡灰褐色を呈し、胎土に粗砂等の砂粒を多量に含み、焼成不良。復原口径25cm。300～304は口縁が「逆L」字形に屈曲する甕の一群で、303のみ口縁下に断面三角形突帯を巡らせる。304は胴部を欠くが、同一個体である。いずれも調整は外面が縦位の刷毛目、内面がナデ調整で、口縁を横ナデ調整して仕上げる。色調、胎土、焼成、復原口径はそれぞれ、300が淡黒褐～淡褐色、砂粒多量・雲母粒少量含、良好、26.2cm。301が淡橙色、砂粒少量・雲母粒少量含、一部不良、26.2cm。302が淡黄褐～黒色、砂粒多量含、良好で口縁部に黒斑があり、30.6cm。303が淡橙～淡灰褐色、砂粒少量・雲母粒多量含、焼成不良、38.4cm。304が淡褐～黒色、砂粒多量・雲母粒少量含、不良、32cmである。305は口縁が「く」字形に屈曲し、内面に明瞭な稜がある。外面縦位の刷毛目後、口縁を横ナデ調整する。内面は磨滅して調整痕が残らない。淡灰褐～淡褐色を呈し、胎土に細砂と雲母粒を多量に含み、焼成良好。復原口径32.4cm。306～312は甕の底部片で、306～309は外底中央に窪みがあり、310は外底全体が凹面をなし、311・312は窪みが浅い。外面の調整は全て縦位の刷毛目である。内面はナデ調整で仕上げるが、306は棒状の工具痕、308・312は指頭痕、307は板状工具によるナデ痕が認められる。309のみ内面に刷毛目後、指による整形を加えている。外底はナデ調整で、310のみ底部周縁に横ナデ調整を加えており、蓋の可能性がある。色調は灰褐～褐色を呈する。胎土に砂粒を含

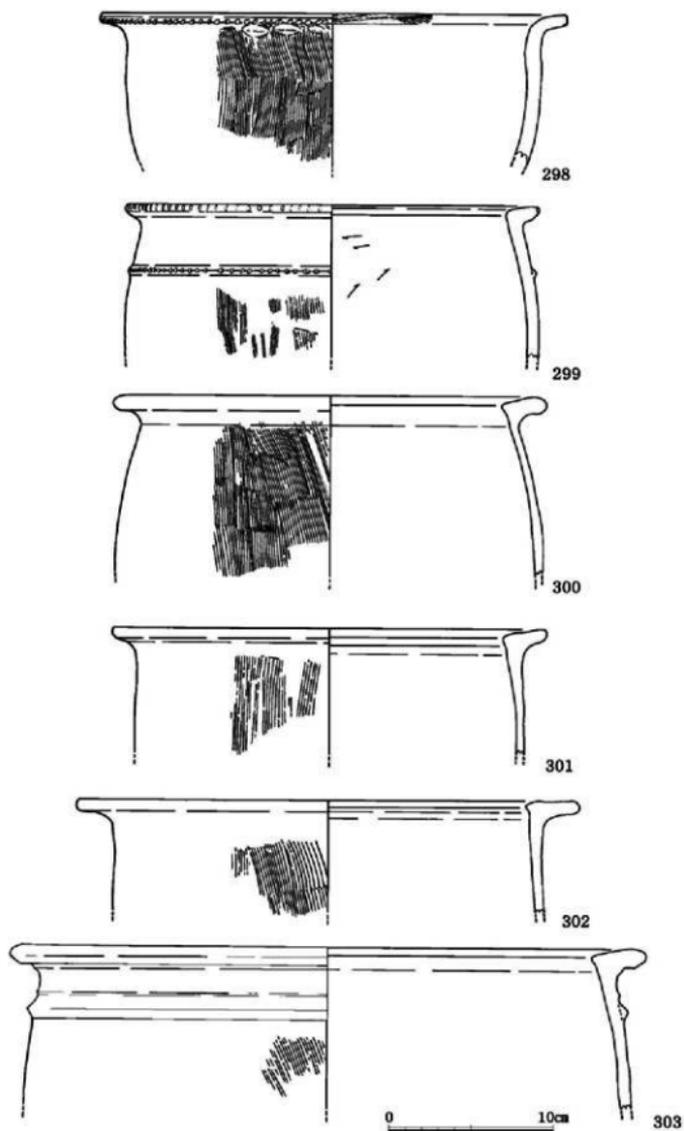


Fig.52 SD-030出土遺物・I (1/3)

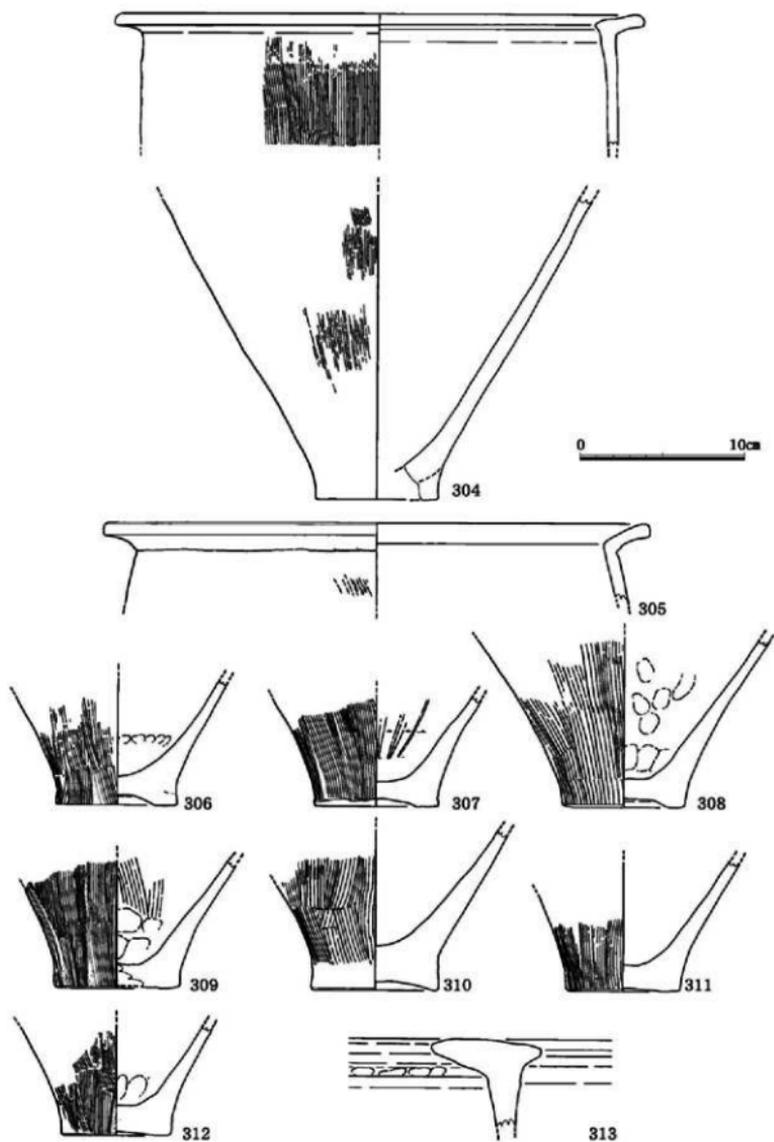


Fig.53 SD-030出土遺物・I (1/3)

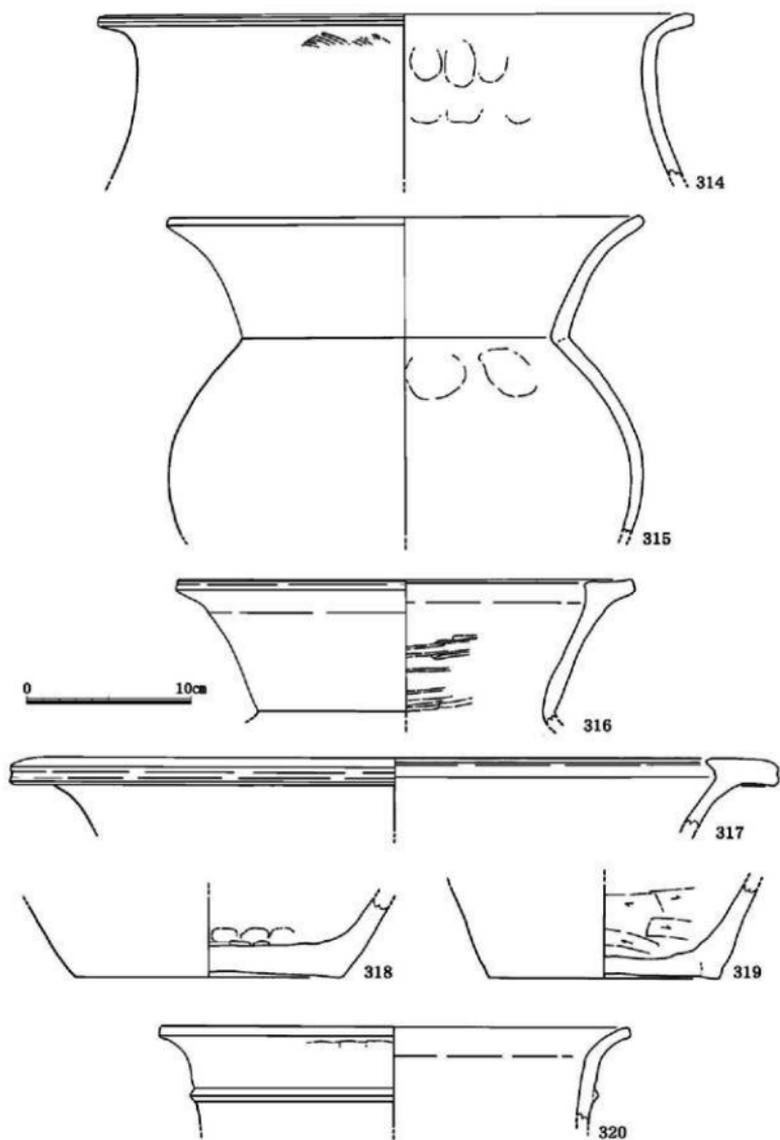


Fig.54 SD-030出土遺物・Ⅲ(1/3)

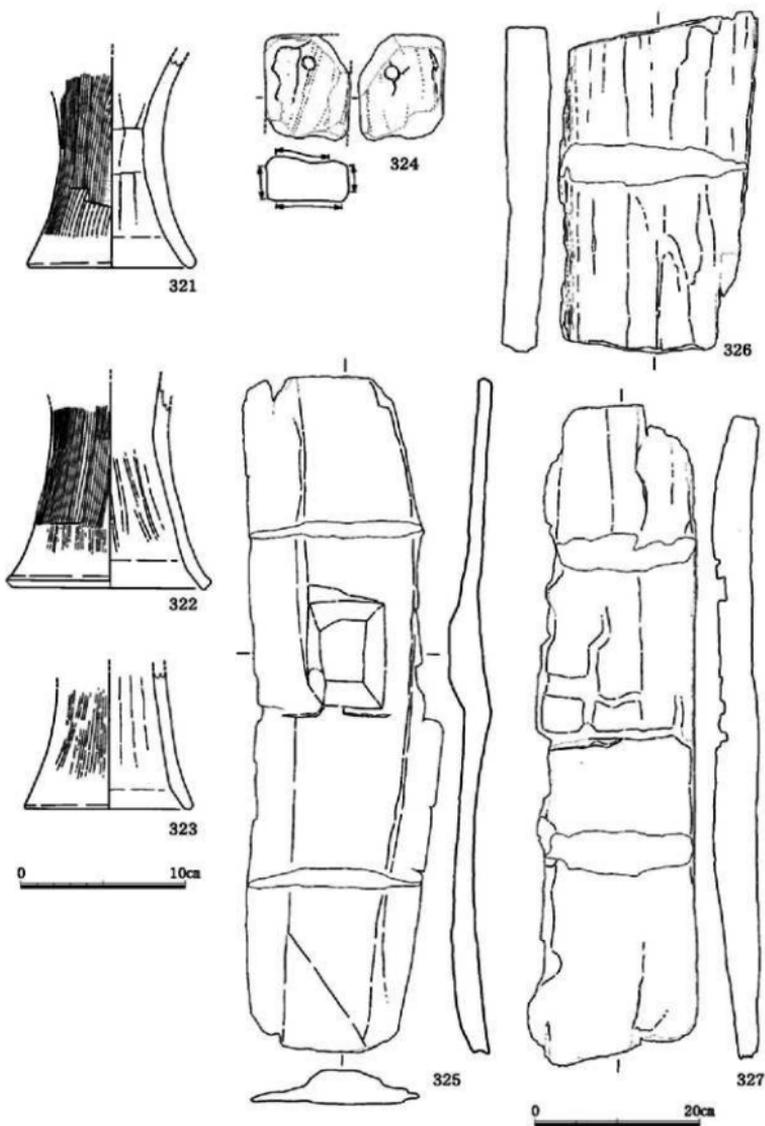


Fig.55 SD-030出土遺物・Ⅳ(325~327は1/6、他は1/3)

む他、308を除き雲母粒を含む。焼成は307が良好で、他は不良である。307は外底に黒斑があり、312は内面に焦げ状の炭化物が付着する。

313は成人用甕棺の口縁部片で、内側に大きく張り出す「T」字形口縁をなす。横ナデ調整で、淡褐色を呈し、砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成良好。固化していないが、小さな断面三角形突帯が付く甕棺の胴部片があり、接合しないが同一個体であろう。

314~319は大型の壺である。314は弥生時代前期の系譜を引く壺で、端部は面取りされ沈線1条が入る。磨滅するが外面に刷毛目、内面に指押さえ痕が一部残る。淡灰褐色を呈し、細砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成不良。復原口径35cm。315は広口壺で、肩部内面に成形時に生じた窪みが残る。磨滅が著しいが、口縁内面から外面全体をヘラ研磨したと思われ、丹塗りは施さない。淡橙~淡褐色で、胎土に多量の砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成不良。復原口径28.8cm。316は鋤先形の口縁をなすが、内外への突出は小さい。口縁上面が浅い凹面をなし、端部は面取りする。内外面ナデ調整後、内面に横位のヘラ磨きを加え、最後に口縁を横ナデ調整する。淡褐~淡灰褐色を呈し、砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成良好。復原口径は外径で27.8cm。317は鋤先形口縁で、外端部がやや垂れ、面取りして凹線を回す。横ナデ調整で、淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好、口縁に黒斑がある。復原径は外口径で46.6cm。318・319は壺の底部で、外底が若干窪む。318は外面と外底をヘラナデ、内面を指整形する。淡灰褐色で、粗砂等の砂粒と雲母粒を少量含み、焼成良好で外底に黒斑がある。319は内面に板状工具による横位のナデ痕が残る以外は調整不明。灰白~淡橙褐色を呈し、粗砂等の砂粒を多量・雲母粒を少量含み、焼成良好。

320は鉢であろう。口縁は如意形に外反し、直下に断面三角形突帯1条を貼付する。磨滅して調整痕は残らない。淡灰褐色で、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好。小片のため不確実ながら復原口径28.2cm。

321~323は器台である。いずれも上端部を欠くが、外面が縦位の刷毛目、内面がヘラ・指等によるナデ、下端部が横ナデ調整である。灰褐色、橙褐色、黒褐色の色調で、胎土に砂粒を多量に含む他、322には雲母粒が含まれ、焼成は321が良好で他は不良である。

324は砥石片である。四側面に使用痕がある。表裏平坦面に円形の小さな沈線があり、孔を開けようとした目印であろうか。硬質砂岩製。

325~327は木製品で、いずれもカシの板材である。325は諸手鉋の未製品で、片面に台形状の突起を作り出す。平面・断面ともに反りがある。長さ82cm、幅22.8cm。326は左側面に原木の樹皮を残す。長さ41cm、幅23cm。327は厚みのある板材で、片面に虫食いによる溝状の凹みがある。中央部を横断する虫食い溝の周辺に加工痕があり、ここで二つに分けようとしたものであろうか。長さ80cm、幅20.6cm。

未報告の遺物を含めても、弥生後期に下る土器は305の1点のみである。これをSD-001よりの混入品と考えれば、SD-030は中期末に位置付けられよう。

SD-007 Fig.56, PL.9

調査区北端で検出した。竪穴住居跡SC-006に切られる。北側は調査区外へ伸び、南側は攪乱や切り合う住居跡群により破壊されている。溝の主

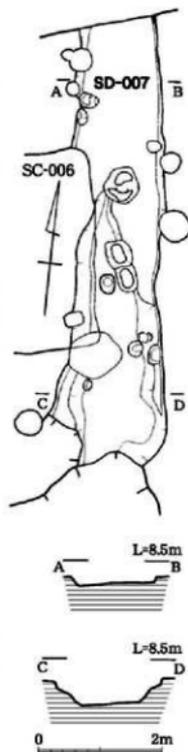


Fig.56 SD-007 (1/80)

軸は磁北に等しく、直線的に伸びる。覆土は黒褐色粘質土、地山は花崗岩バイラン士である。幅1.2～1.5m、横断面は逆台形状を呈し、深さ10～40cm。底面は平坦で、南へ緩く落ちている。溝の底面にはピットがいくつかみられるが、これらは溝に先行する遺構であろう。

SD-007出土遺物 Fig.57, PL.16

コンテナ2箱分がある他、南側上層では遺構の切り合いを把握できずにSC-046と同時に掘り下げ、

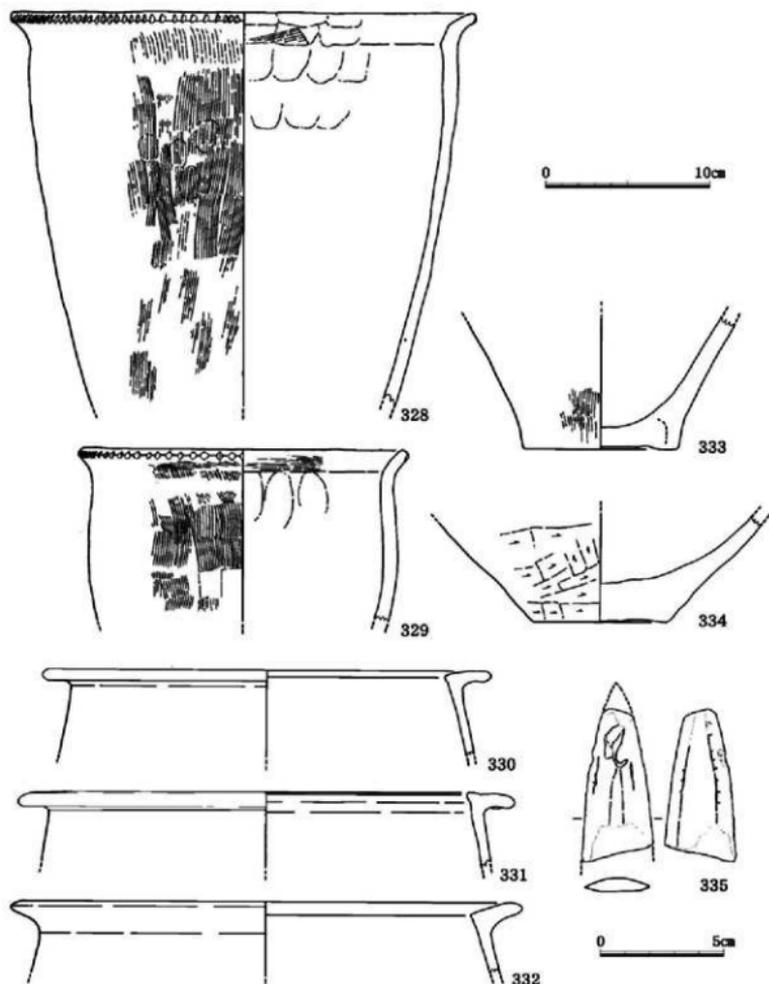


Fig.57 SD-007出土遺物(335は1/2、他は1/3)

ここで3箱の遺物が出土した。主体は弥生土器が占める。

328・329は口縁が如意形に外反する甕である。口唇部を面取りし、下端に板小口による刻目を施す。328は内外面に指頭痕が残り、外面は縦位の刷毛目、内面は口縁を横刷毛目後、全体をナデ、最後に口縁を横ナデ調整する。外面黒褐～淡褐色、内面淡褐色を呈し、砂粒を多量、暗赤色鉱物を僅かに含み、焼成良好。復原口径28.4cm。329は外面縦刷毛目、内面指整形後ナデ、最後に口縁に横刷毛目を加える。外面黒～淡褐色、内面淡橙灰色を呈し、多量の砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成不良。復原口径20cm。

330～332は口縁が「逆L」字形に屈曲する甕で、332は口縁上面がかなり内傾する。いずれも磨滅しており、口縁に横ナデ痕が残るのみ。色調は淡褐～淡橙褐色、胎土は330が砂粒を多量に含み、331はこれに少量の雲母粒が加わり、332は精良で多量の雲母粒を含む。焼成は331が不良、他は良好。図上復原した外口径は順に、27cm、30cm、31cmを測る。

333は甕の底部片である。平底で、中央が少し窪む。外面縦位の刷毛目、内面ナデ調整。淡橙褐～淡橙褐色を呈し、砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成不良で外面下端に黒斑がある。

334は甕の底部片で、平底である。外面は板ないしヘラによるナデ、外底はナデ調整、内面は器面が剥落する。暗橙～灰白色を呈し、粗砂を多量に含み、焼成良好。

335は磨製石刻で、上下は折れる。鏨は明瞭でない。表面の風化が著しいが、石材は安山岩であろう。

弥生時代前期の土器を比較的多く含むが、遺構は中期中頃に位置付けられよう。

SD-009 Fig.58, PL.8

調査区のほぼ中央で検出した溝である。一部の土坑に切られるが、他は全ての遺構を切っている。北西端は竪穴住居跡SC-012にかかるあたりで浅くなって削平消滅しており、SC-012との切り合い関係は明確でない。南東端は調査区東壁へと入っていくが、この少し手前で北東からくる別の溝と合流している。溝の流れは地山の傾斜に沿うものではなく、丘陵を斜めに掘り進んでおり、主軸方位は磁北から43°西偏する。幅は0.7～0.9m、深さ10～20cmほどで、南北端で底面のレベル差は40cmである。覆土は粘質土で水の流れたような痕跡はないが、排水溝を持つ竪穴住居跡SC-010・012の間を縫うように掘られており、豪雨時の排水もしくは防水を意図した溝の可能性もあろう。

SD-009出土遺物 Fig.59, PL.16

コンテナ3箱の遺物が出土した。弥生土器が大半を占めるが、他に古式土師器や古代の須恵器の小片が少量含まれる。

336～338は弥生土器甕の口縁部小片である。336は口縁が「く」字形に屈曲し、内面に縦がはいる。端部は面取りにより窪み、頸部には断面三角形突帯が1条走る。外面は全体に縦位の刷毛目を施し、突帯以上を横ナデする。内面は斜位の刷毛目が残るが磨滅する。灰白～黒褐色を

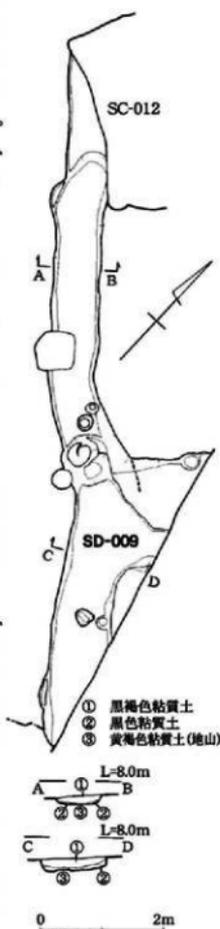


Fig.58 SD-009(1/80)

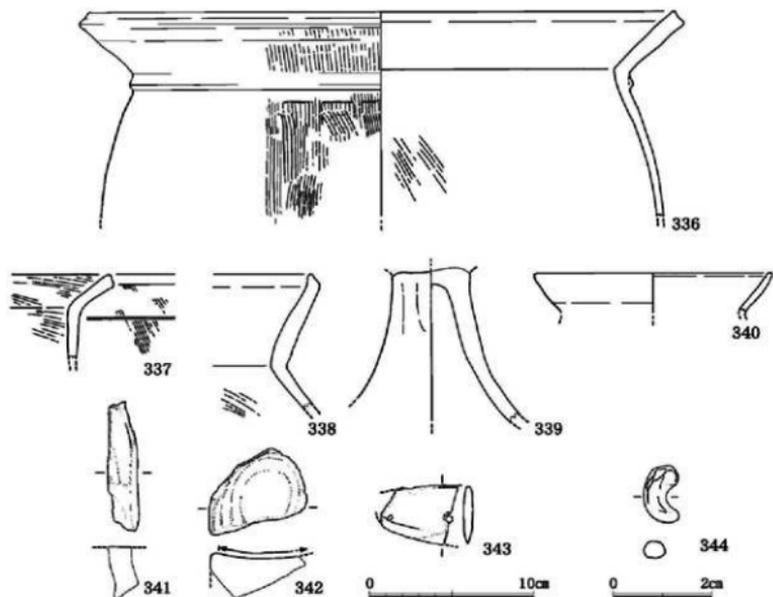


Fig.59 SD-009出土遺物(344は1/1、他は1/3)

呈し、粗砂混じりの砂粒を多量に含み、焼成不良。復原口径35.4cm。337は鉢となる可能性もある。口縁は「く」字形に開き、端部は面取りする。外面を縦位の刷毛目後、口縁横ナデ、内面は横位の刷毛目が残る。褐～黒褐色を呈し、胎土に多量の砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成不良。338も「く」字形に口縁が開き、口唇部を面取りして上方へ引き上げる。器面が剥落するが、胴部内面はヘラ削り後、斜位の刷毛目調整か。淡灰色で、粗砂を含む砂粒が多く、焼成不良で破面が黒色をなす。

339は高坏の脚部片である。ラップ状に大きく開く。外面へラナデ調整で、内面は磨滅して調整痕が残らない。灰白～黒褐色を呈し、胎土に砂粒が多く、焼成不良で破面が黒色である。

340は古式土師器甕の口縁部小片である。口縁は内湾して開き、端部が水平面をなす。著しく磨滅する。黒～灰黒色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良。不正確ながら、復原口径14.4cm。

341は砥石片である。一側面に使用による磨滅がある。粘板岩製。342も砥石の一部である。使用により浅く窪む。硬質砂岩製。他に硬質砂岩製の砥石1点が出土している。343は石磨丁片である。裏面から穿孔し、刃部の研ぎ出しは両面から行っている。輝緑凝灰岩製。344は石製の小型勾玉である。穿孔がなく、未製品か。深緑色で白斑が混じる石材を用いる。長さ1.15cm。

溝を切る遺構の検出漏れがあったとみられ磨滅した古式土師器1点が入混入しているが、弥生時代後期末頃の遺構と考えられる。

(3) 土坑

土坑は11基を報告する。残りの悪いもの、柱穴の可能性のある土坑は省略した。弥生時代8、古墳時代前期3である。土坑の覆土は全て黒褐色粘黄土で、時期による土質の差異は認められない。

SK-004 Fig.60, PL.9

調査区南端付近で検出した。自然流路SD-001の上面から掘り込まれており、SD-001の完全埋没時期を示す。径0.9mの円形プランを呈し、断面は逆台形状で深さ36cm。北半はやや掘りすぎており、底面は平坦である。覆土は上層が粘黄土、下層がシルトで、地山は黄褐～灰褐色シルトである。

SK-004出土遺物 Fig.62, PL.16

コンテナ1箱分がある。弥生土器と古墳時代前期の古式土師器が相半ばするが、前者の報告は省く。

345～347は布留系の甕である。345は口縁が若干内湾気味に開き、端部は面取りされやや外傾する。胴部外面を縦位の刷毛目調整、内面はヘラ削り後、頸部をナデ調整し、最後に口縁を横ナデ調整する。外面淡灰～淡黒褐色、内面淡黒褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良。口径16.3cm。346も若干内湾して口縁が開き、端部は丸い。磨滅して調整痕は残らない。淡褐～淡橙褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成不良。復原口径14.8cm。347は口縁が外反し、端部は面取りされる。外面は磨滅して調整不明。内面は胴部ヘラ削り後ナデ、頸部はヘラ・指等によるナデ調整だが磨滅して不明瞭。暗灰色を呈し、砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成不良。小片のため法量不明。

348・349は畿内系土器の底部片である。348は不安定な底部が残る。器面が剥落するが、外面はタタキ後ナデ、内面は雑な刷毛目調整である。外面暗褐色、内面黒色で、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良。349は丸底で、底部の痕跡が残る。外面は底部を除きタタキを施し、底部は無調整。内面はヘラ削り後、ナデ調整を加える。黒色を呈し、砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成不良。

古墳時代前期の土坑である。

SK-022 Fig.60

調査区中央の西壁際に位置する。主要部分が調査区外にあり、詳細は不明である。現状で深さ30cm。

SK-022出土遺物 Fig.62

弥生土器片が25点出土した。

350は弥生土器の甕の底部小片である。平底で、磨滅して調整痕は残らない。橙褐～淡褐色を呈し、砂粒を多量・雲母粒を少量含み、焼成不良。

SK-023 Fig.60

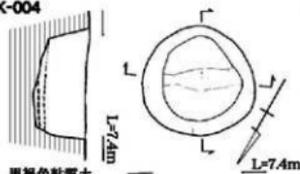
SK-022の4m北西側にあり、西壁際に位置し調査区外に伸びる。過半が区外にあるが、現状で隅丸方形プランをなし、長径1.2m以上、短径0.8m以上、深さ23cmである。北西壁は段をなして落ちる。

SK-023出土遺物 Fig.62

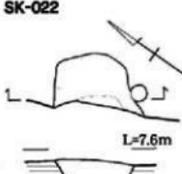
コンテナ1/2箱、土器片85点がある。全て弥生土器である。

351・352は甕で、接合しないが同一個体である。口縁が「逆L」字形に屈曲するが、内面は丸く縁がない。底部は薄手の平底で、粘土円盤の外縁に粘土紐を積み上げた痕跡が残る。外面は縦位の刷毛目後、口縁を横ナデ調整。内面は磨滅しており、底部に指押さえ痕が残るのみ。淡橙～橙褐色を呈し、胎土に多量の砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成不良で口縁外面に黒斑がある。復原口径26.6cm。353は鉢で、口縁は内湾して開き、端部は丸い。平底。磨滅するが外面縦位の刷毛目、内面ナデ調整であ

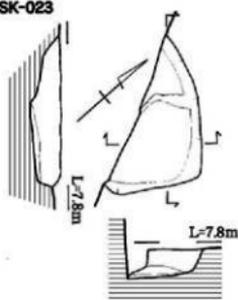
SK-004



SK-022

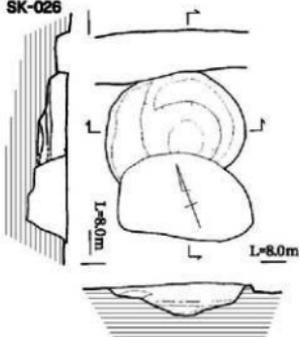


SK-023

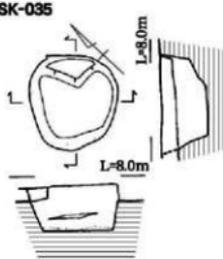


- ① 黒褐色粘質土
- ② 黒褐色粘質土+
- ③ 黄褐色シルト
- ④ 黄褐色シルト
- ⑤ ①に近似
- ⑥ 黄褐色シルト+
- ⑦ 黒褐色粘質土ブロック
- ⑧ 黄褐～灰褐色シルト(地山)

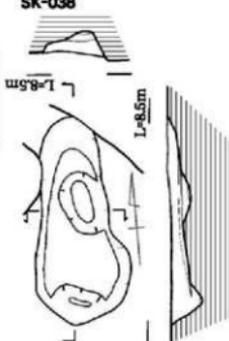
SK-026



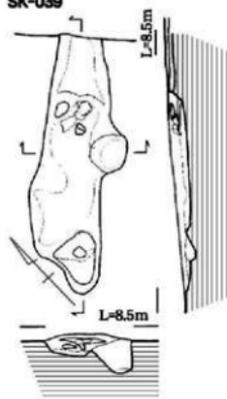
SK-035



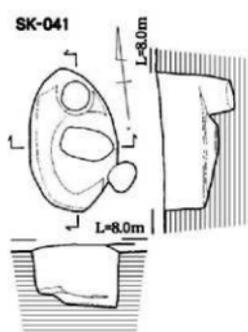
SK-038



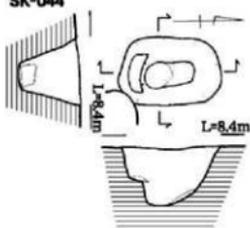
SK-039



SK-041



SK-044



0 1m

Fig.60 土坑・I (1/40)

ろう。淡褐～暗褐色を呈し、粗砂等の砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成不良。

弥生時代中期末の遺構である。

SK-026 Fig.60

SK-023の2m北側に位置する。溝とピットに切られる。やや東西に長い円形プランの浅い土坑である。長径1.15m、短径は1m程度か。浅い皿状を呈し、検出面から底面までの深さ25cm。

SK-026出土遺物 Fig.62

40点の弥生土器片がある。

354は甕の口縁部小片で、「逆L」字形に屈曲する。口縁内側が若干突出し、上面がやや内傾する。磨滅するが、上面に丹塗り痕跡が残り、外面も丹塗りでであろう。淡褐色を呈し、胎土は精良で雲母粒を多量に含み、焼成良好。法量不明。355は器台の底部片で、磨滅が著しい。淡褐色で、多量の砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成良好。356は無頸壺の蓋である。2孔が残る。磨滅して調整不明。淡褐～淡褐色を呈し、砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成良好。復原口径18cm。

弥生時代中期の遺構であろう。

SK-035 Fig.60

調査区北半のやや西より、SK-026の4m北西に位置する。楕円形プランで、長径0.8m、短径0.6m。断面形は逆台形状をなし、北東壁に段が付く。深さ35cm。

SK-035出土遺物 Fig.62

弥生土器の小片25点が出土した。

357は甕の口縁部小片で、「逆L」字形に屈曲し、内側に若干突き出る。磨滅して調整不明。橙褐～淡褐色を呈し、砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成良好。小片のため法量不明、傾き不正確。

SK-038 Fig.60

調査区北半に位置し、竪穴住居跡SC-016等に切られる。南北に長い楕円形プランで、長径1.7m、短径0.5～0.75m。底面の中央と南端に浅い窪みがあり、検出面からの深さはそれぞれ18cm、25cm。

SK-038出土遺物 Fig.62

弥生土器の小片30点、黒曜石チップ1点がある。

358は甕の口縁部小片で、「逆L」字形に屈曲する。調整痕は磨滅。橙色で、砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成良好。小片のため法量不明、傾き不正確。

SK-039 Fig.60

SK-038の南東に1mの間を置いて検出し、SC-016に切られる。溝状に長い不整な楕円形プランで、長径2.1m以上、短径0.55m、深さ24cm。底面から少し浮いた位置で土器がまとまって出土した。

SK-039出土遺物 Fig.62

コンテナ約1/3箱、395点の土器片がある。全て弥生土器である。

359は甕で、口縁は「く」字形に屈曲し、内面の縁は不明瞭である。口唇部は面取りされ、やや窪む。外面は口縁端から下に向かって解位の刷毛目を施しており、口縁に小口圧痕が連続する。内面は頸部に指押さえ痕が残る、横位の刷毛目を加える。最後に口縁を軽く横ナデし、外面では砂粒が流れて沈線1条を刻む。橙色で、砂粒を多く含み、焼成良好。復原口径23cm。360は高坏であろう。下端は

脚との接合面から剥落している。外面は縦～斜位の刷毛目後、口縁を軽く横ナデ、内面は横～斜位の刷毛目後、内底に放射状の雑なヘラ磨きを加える。外面淡褐色、内面暗橙褐色を呈し、胎土に多量の砂粒と少量のカクセン石粒を含み、焼成不良。復原口径24cm。361は支脚で、頂部の突起は剥げ落ちている。上面はやや凹面をなし、ナデ調整。外面は縦位の刷毛目後、上端を指押さえ、下端を横ナデする。内面は器面が剥落するが、横位の刷毛目がかすかに残る。橙色で、砂粒を多量、雲母粒とカクセン石粒を僅かに含み、焼成良好。上面に黒斑がある。突起までの器高は12cm強となろう。

弥生時代後期末頃の遺構であろう。

SK-041 Fig.60

調査区北半のやや西よりに位置し、SC-049を切る。南北に長い楕円形プランで、長径1.2m、短径0.7m。断面形は逆台形状で、底面は皿状に窪む。土坑の北端に径0.3m、深さ60cmのピットが切り込む。

SK-041出土遺物 Fig.63

弥生土器の小片のみが80点出土した。

362は甕の口縁部小片で、「逆L」字形をなす。磨減が著しく、淡褐色で、砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成良好。図の傾きは不正確で、法量も不明。

SK-044 Fig.60

調査区北東隅に位置する。南北に長い楕円形プランで、長径0.8m、短径0.55m。南壁に段があり、北側は底面がすり鉢状に傾斜する。土坑底面は柱穴のように円形で、検出面からの深さ50cmである。弥生土器の小片が17点出土したが、図示できるものはない。

SK-047 Fig.61

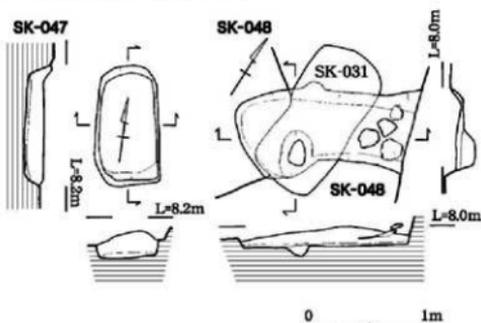
調査区北西隅に位置し、竪穴住居跡SC-045を切る。地山が西へ落ちており、上面はこれの埋没土に覆われる。南北に長い隅丸長方形プランで、長径1.0m、短径0.5m。断面逆台形を呈し、底面は平坦で、深さは22cmを測る。

SK-047出土遺物 Fig.63

古式土師器を中心に120点の土器片と、黒曜石チップ1点が出土した。

363は古式土師器の小型丸底甕である。口縁部の小片で、内湾して開き、端部で外反して尖る。調整痕は残らない。灰白色を呈し、胎土は精良で雲母粒を少量含み、焼成不良。復原口径9.8cm。

古墳時代前期の遺構である。



SK-048 Fig.61

調査区中央の東壁跡に位置し、東側は調査区外に伸びる。中世の土壙墓SK-031に切られる。ややいびつな隅丸長方形プランとみられ、長径

Fig.61 土坑・Ⅱ (1/40)

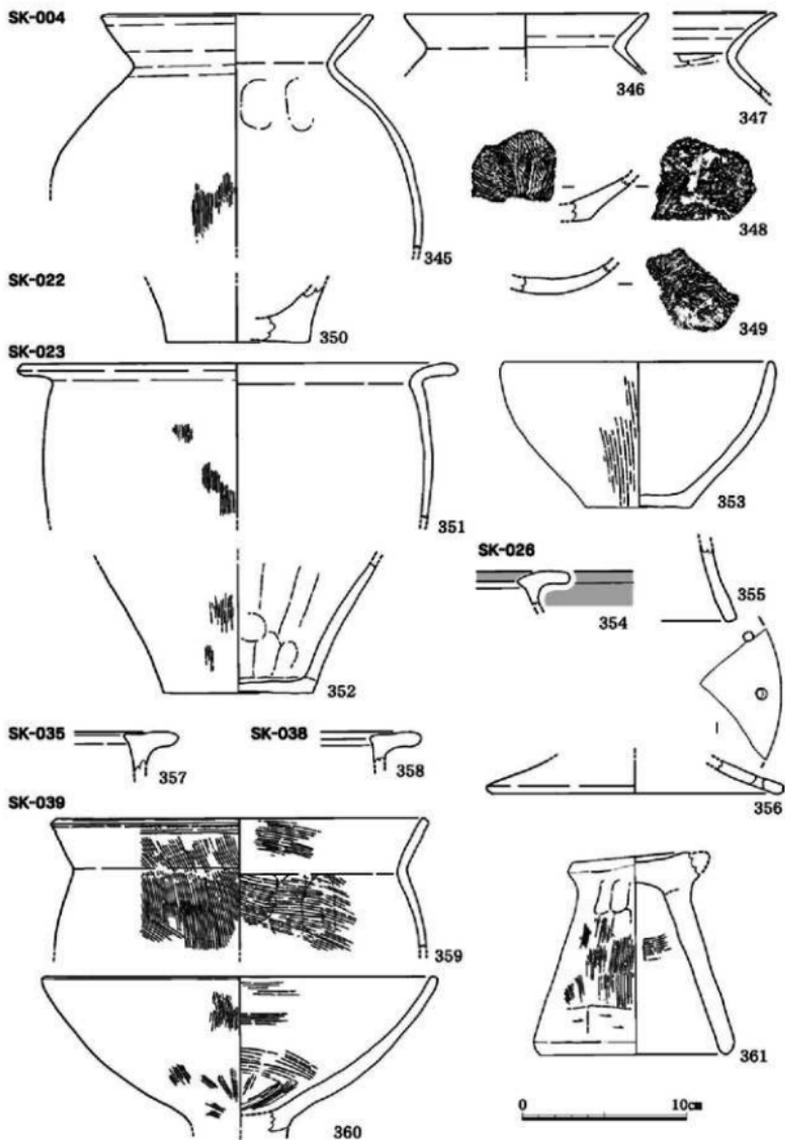


Fig.62 土坑出土遺物・I (1/3)

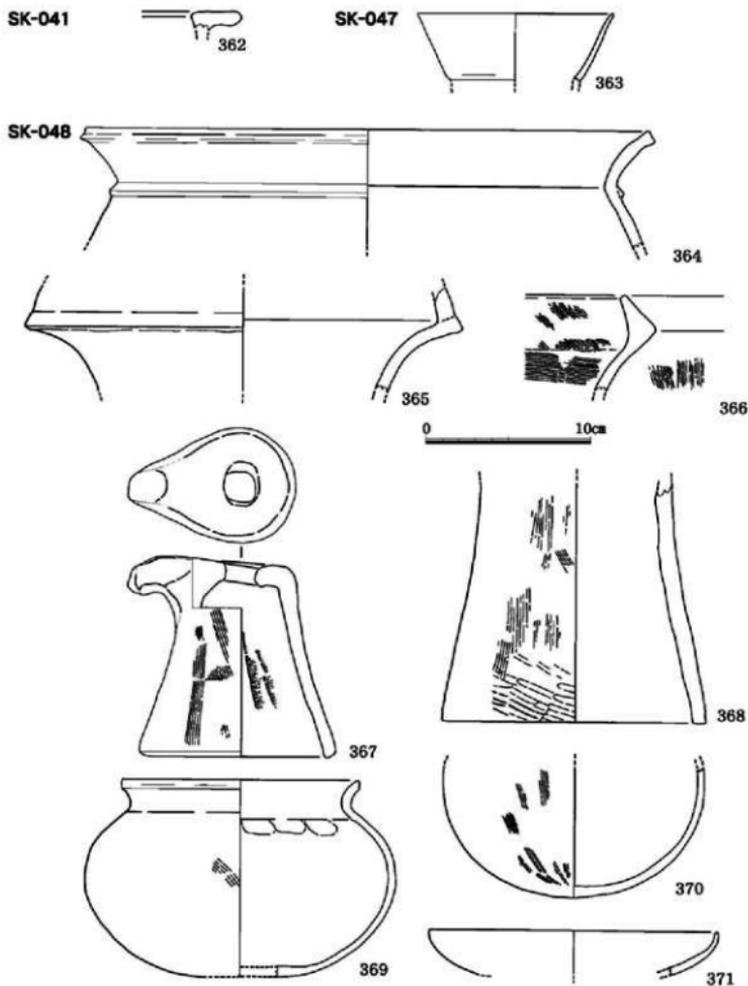


Fig.63 土坑出土遺物・Ⅱ (1/3)

1.4m以上、短径0.7mを測る。残りが悪く深さ15cmであるが、東壁際から土器がまとめて出土した。

SK-048出土遺物 Fig.63, PL.16

コンテナ約1箱の土器片がある。

364は甕である。口縁は「く」字形に外反して開き、端部は面取りされて外方へ肥厚する。頸部外面に断面三角形突帯を貼付し、内面には襷がある。口縁内面に横位の刷毛目が痕跡的に残り、胴部内

面はナデ調整か。他は磨滅して調整不明。淡橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良。

365は複合口縁壺である。調整痕は磨滅して不明。乳白色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良。366も複合口縁壺である。頸部外面縦位の刷毛目、内面は屈曲部以上が斜位の、以下が横位の刷毛目で、口縁内外横ナデ調整で仕上げる。外面黒褐色、内面淡褐色で、砂粒は少なく、焼成不良。

367は支脚である。上面に一孔を穿つ。器面の残りが悪いが、外面縦、内面横位の刷毛目調整痕が残る。暗橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良。ほぼ完形し、器高、底径はともに11.8cmと等しい。368は器台である。底端部は面取りする。磨滅するが、外面は右下がりのタタキ後、縦位の刷毛目調整か。内面ナデ調整。淡灰色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好。

369は広口壺で、口縁は短く外反し、端部は面取りされて極く浅い沈線1条が巡る。胴部は扁球形で、丸底である。磨滅が著しいが、胴部外面に斜位の刷毛目、頸部内面に指押さえ痕が残る。淡褐色を呈し、胎土に多量の砂粒と僅少の雲母粒を含み、焼成不良で破面が黒色を呈する。1/3周ほどが残り、復原口径14.2cm、器高12cm。370も丸底の壺で、369に似た器形となろう。他にも1点同様の底部片がある。著しく磨滅し、外面に刷毛目が一部残るのみである。橙～灰白色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良。

371は鉢の小片である。口縁は内湾する。著しく磨滅しており調整不明。灰白色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好。

弥生時代後期末頃の遺構であろう。

(4) 井戸

SE-003 Fig.64, PL.10

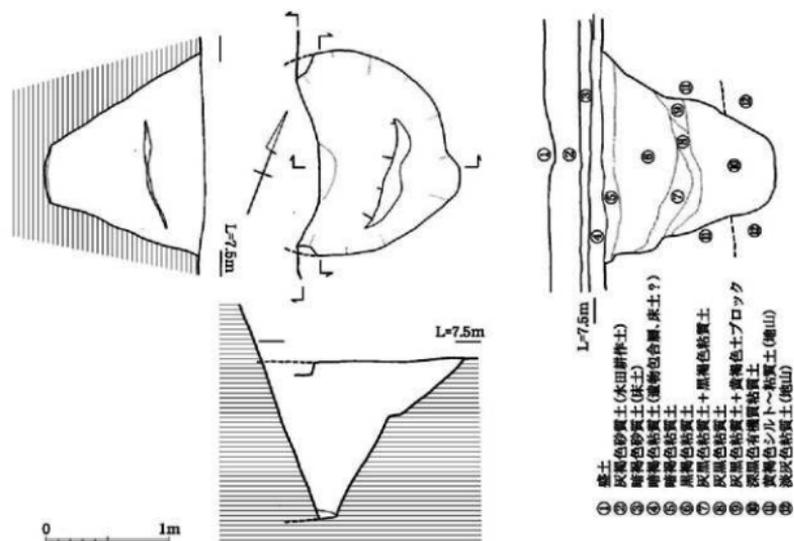


Fig.64 SE-003(1/40)

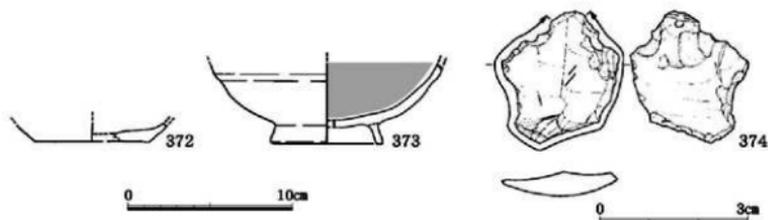


Fig.65 SE-003出土遺物 (374は1/1、他は1/3)

調査区南半の西壁際に位置し、西側は区外へ伸びる。SD-001の埋没面に掘り込まれている。調査区内では円形プランを呈し、径1.65mを測る。断面形は逆円錐形を呈し、底面は皿状に窪む。検出面から最深部まで1.3mが残る。東側の一部が張り出し、この直下にステップ状の平坦面がある。長さ90cm、幅15cmで、井戸掘削時の足場であろう。覆土は粘質土で、上層は明るい黒色、下層は暗い黒色を呈する。地山は上部ではシルト、下部では粘質土となる。

SE-003出土遺物 Fig.65

遺物の大半は弥生土器片で、これに混じって古代の土器が少量出土した。コンテナ1/3箱程度。

372は土師器で、小片のため坏か小皿か不明。磨滅が著しいが、底部へラ切り離し。淡灰褐色を呈し、胎土は精良で雲母粒を多量に含み、焼成不良。373は黒色土器A類の碗で、高台が高めで体部は丸みを持つ。磨滅して調整痕は残らない。内面黒色、外面淡黄褐色を呈し、胎土は精良で砂粒を少量含み、焼成良好。374は黒曜石の剝片で、縁辺のほぼ全周に使用痕がある。不透明な漆黒色黒曜石である。周辺の弥生時代遺構から流入した遺物であろう。

11世紀初頭前後の井戸と考えられる。

(5) 土墳墓

SK-031 Fig.66, PL.10~11

調査区中央の東壁際に検出した中世の土墳墓である。周辺の全ての遺構を切る。平面プランは南北に長い隅丸長方形で、主軸は磁北に合致する。長径1.22m、短径0.6m、深さ12cmを測る。断面形は逆台形状をなし、底面は平坦であるが、南半部は弥生～古墳時代の竪穴住居・土坑の覆土に切り込むため底面をやや下げ過ぎた。北東寄りの位置から7点の副葬遺物が底面からやや浮いた状態で出土した。鉄刀1点(381)、重ねた土師器皿3点(376~378)、青磁碗2点の順に置き、最後に土師器皿1点(375)を青磁碗(379)の中に入れている。鉄刀は腐食と土圧により残りが極めて悪い。青磁碗1点(380)は表土剥ぎの際に破損した。副葬遺物の配置から、頭位は磁北と考えられる。覆土は暗褐色粘質土で黄褐色粘質土ブロックを含む。

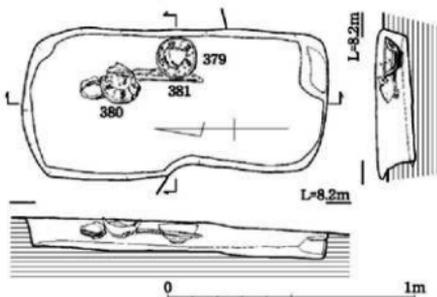


Fig.66 SK-031 (1/20)

SK-031出土遺物 Fig.67, PL.16

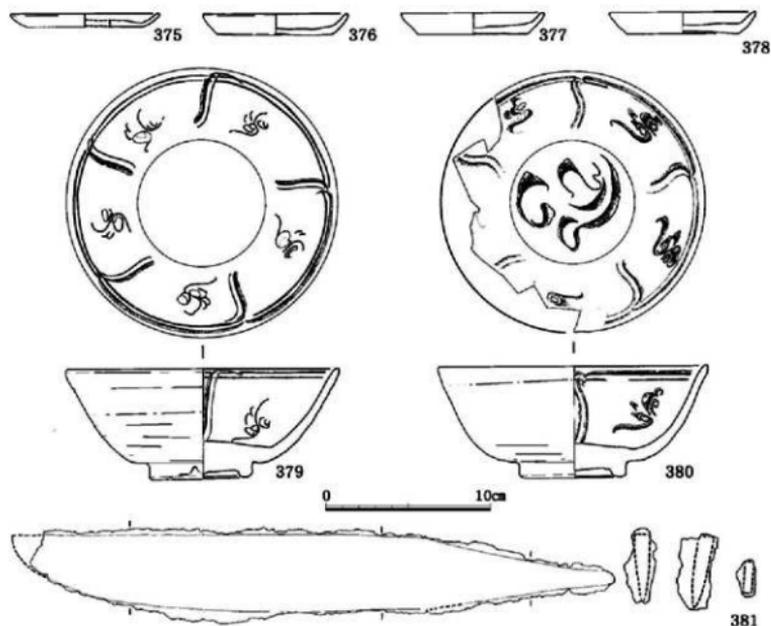


Fig.67 SK-031出土遺物(1/3)

コンテナ1箱の遺物が出土した。図示した遺物はいずれも副葬品で、他に弥生土器、土師器、須恵器、瓦などの小片がある。

375～378は土師器皿で、いずれも著しく風化している。底部は糸切り離しで、色調は暗橙～橙色を呈し、胎土は精良で暗赤褐色鉱物を少量含む。焼成は375・377が良好、他は不良である。375は口径が不明瞭、376は口径8.6～8.8cm、377は復原口径8.6cm、378は同じく8.8cmである。

379・380は龍泉窯系青磁碗である。外面は回転ヘラ削り、内面は片切彫で5分割して飛雲文を入れ、380は更に見込みに片切り彫の文様を入れる。胎土は精良できめ細かく磁質、379は淡灰白色、380は灰白色で褐色味がある。釉調は379が淡灰青色半透明でやや白濁気味、380が淡いオリーブ色の透明釉で、いずれも高台内以外に施釉し、畳付にかかった釉は雑に削り取る。高台内には暗紅黒色の付着物があるが、ハマ痕ではない。ともに焼成良好で、内面には使用によると思われる傷や擦過痕がある。口径・器高は379が16.6cm・6.7cm、380が16.2cm・6.8cmを測る。

381は鉄製短刀である。錆による膨張と木質の付着のため、X線撮影でも形状や断面形が不明確である。土圧により変形し、中央部で振れている。先端の一部を欠くが、復原長36.3cmほどになる。刃の形状は不明だが、刃部長25.0cm、茎部長11.3cm、身幅4.6cm、背幅0.9cm前後と計測される。

12世紀中頃～後半に位置付けられよう。

(6) その他の出土遺物 Fig.68

報告から漏れた遺構や包含層から出土した遺物のうち、特に重要と考えられる遺物を図化した。

382は手掘土器である。口縁は内湾し、端部は波打つ。不安定な底部がある。磨滅して調整不明。外面淡橙～黒色、内面黒色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良。383は把手とみられる。横断面は円形で、上下端は折れている。磨滅して調整不明。淡褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成良好。2点とも調査区中央部の竪穴住居跡SC-012～015と溝SD-009が切り合う部分から出土し、時期は定かでない。

384は石製品である。石庖丁として図化した。他の石庖丁と比較して刃部の研ぎ出しが明瞭ではなく、石刻の可能性が高い。石材は硬質砂岩か。包含層出土。385は黒曜石製の剃片である。左右側縁に使用による刃こぼれがあり、背面には自然面が残る。節理の入る不透明な漆黒色黒曜石を素材とする。ピット出土。

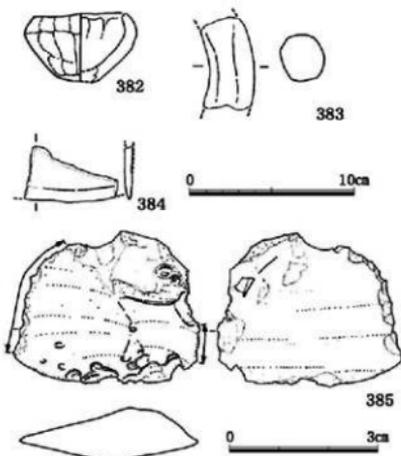


Fig.68 その他の出土遺物(385は1/1、他は1/3)

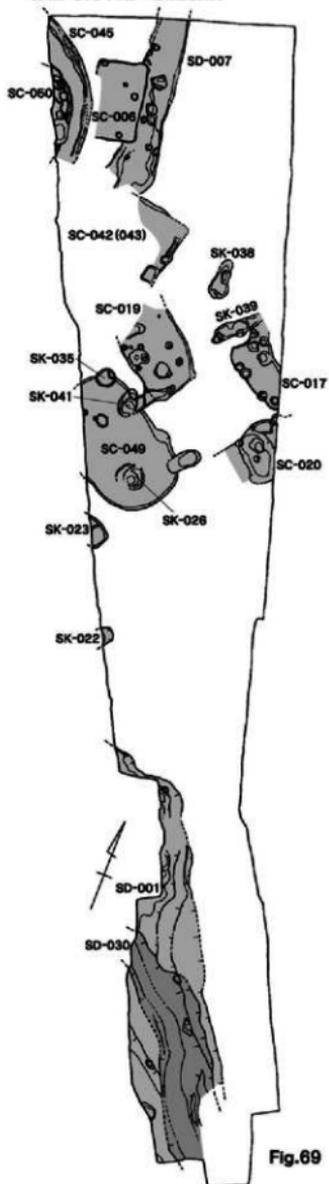
第三章 おわりに

今回の調査は狭い面積ではあったが、弥生時代中期～古墳時代前期の竪穴住居跡を中心に遺構が幾重にも切り合う状態で検出でき、河川SD-001などから土器を中心とする遺物がコンテナ213箱出土した。しかし、削平のため遺構の残りは良いとは言えず、竪穴住居として報告した遺構には住居とするには疑問視されるものも含んでいる。

まず、時期別の遺構分布について見てみると、弥生時代前期に遡る土器も散見されるが、遺構として最も古いものは弥生時代中期、田崎博之氏編年の須玖Ⅰ式中段階のSC-049である。この遺構は他の住居とは覆土が明らかに異なり、地山土で埋め戻された状況を示す。小判形平面プランだが主柱穴や炉跡は定かでない、住居とするには疑問が残る。他の住居はこれにやや遅れ、やはり小判形プランをなすと思われる竪穴住居SC-050、これを切る円形住居SC-045、方形プラン住居042(043)の他、住居とするには確証はないが、方形プランのSC-006・017・019・020が須玖Ⅰ式新段階～Ⅱ式以降に営まれる。後期初頭まで調査区の南端には自然流路(谷)SD-001が流れており、中期末にはその落ち際に溝SD-030が掘られており、木製農具原材の一時貯蔵も行われた。土坑はFig.69に7基を示したが、他の時期不詳の土坑やピットなどにも中期の遺構が多数含まれていよう。以上の遺構は調査区の北半に集中する傾向にあり、今回の検出遺構ではこの時期のものが最も多く、遺物量も他時期を圧倒する。

後期の遺構としては、方形竪穴住居SC-010・012・013、住居の可能性のあるSC-014・015、溝SD-009、土坑SK-048がある。SC-010は出土土器の大半が弥生時代中期の所産だが、2本柱で短辺

弥生時代中期～後期初頭



弥生時代後期(主に後半～末)

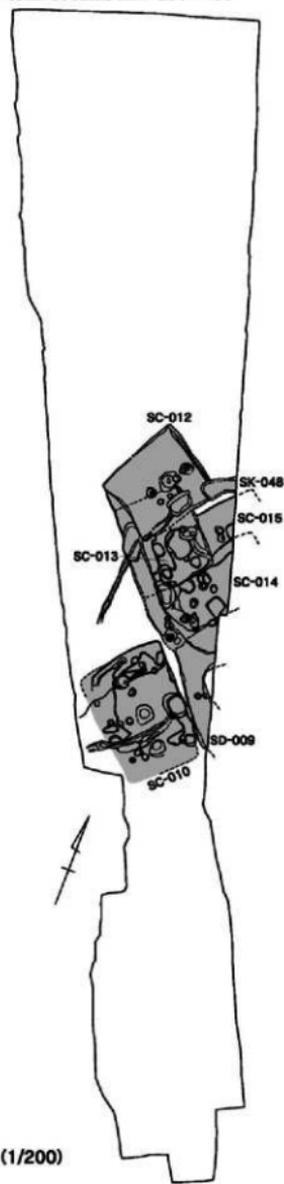
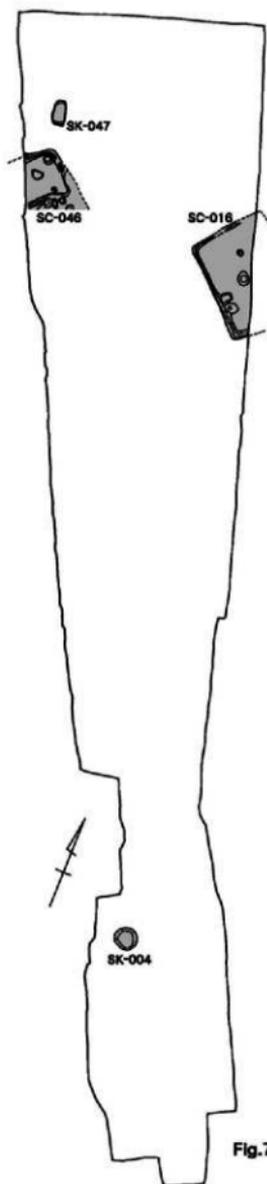


Fig.69 時期別の遺構分布・I (1/200)

古墳時代前期



古代・中世

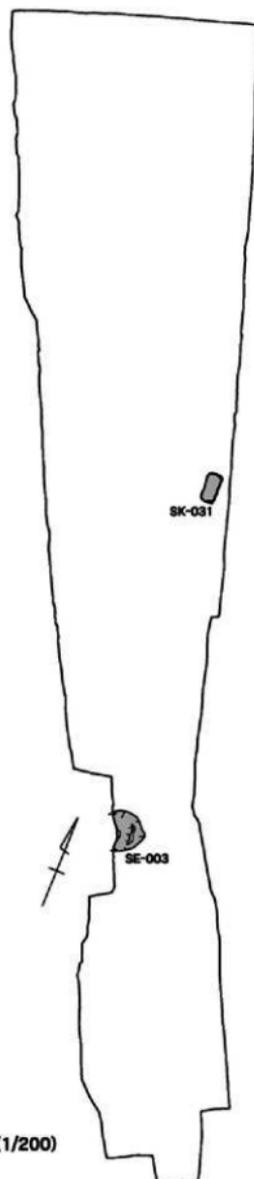


Fig.70 時期別の遺構分布・Ⅱ (1/200)

にベッド状遺構を設ける特徴から後期後半以降に属すると考えられる。以上の遺構は後期でも後半～終末の時期を主体とするが、調査区の中央で密に重複しており、同時期に存在した住居は2軒以下とみられる。前時期に比べると遺構数はさほどでもないが、遺物量が激減している。

古墳時代前期の遺構には、方形竪穴住居SC-016・046、土坑SK-004・047がある。主に調査区の北側に集まるが、SK-004のみ離れて埋没谷の上面に位置する。住居出土の古式土師器は久住猛雄氏編年のⅡb期とⅢa期に属することから、2軒の住居が並存した可能性は少ない。前時期より遺構数は衰退するが、SC-016から古式土師器がまとまって出土しており、遺物量はむしろ増大している。

古代の遺構は11世紀初頭前後と考えられる井戸SE-003、中世の遺構は12世紀中頃～後半の土壇墓SK-031を検出したのみである。

以上より、弥生時代中期中頃前後に起こった集落は、後期初頭に自然流路SD-001が埋没する頃に一旦断絶し、後期後半頃に再び住居が営まれて古墳時代前期に再び集落が廃絶する。古代には井戸を有する集落が置かれたが11世紀初頭前後にはこれも廃され、その後12世紀代には墓地として利用を受けた、という変遷がたどれよう。また、今回の調査では成人甕棺片がピットに投げ込まれた状態で出土したが、本調査区の北東に隣接する丘陵はかつて林崎遺跡と呼ばれ、造成時に甕棺が出土したと伝えており、上記弥生時代中期集落に対応する墓地であった可能性が高い。

次に、特徴的な遺構について気づいた点をいくつか列挙する。SD-001は丘陵の裾を流れる自然流路で、最下層から弥生時代中期末の土器が出土し、弥生時代後期初頭にはほぼ埋没していたものと考えられる。南側の席田大谷遺跡群第6次調査では、この流路の対岸と考えられる落ち込み（包含層）を確認しているが、ここでは落ち際は南に伸びており、1/500地形図上で合成すると東側では5m以内、西側では25m以上の幅が計測され、両調査区の間で西に大きく開口する谷部であることが分かる（Fig. 4参照）。SD-030はこの谷部の落ち際に人為的に掘削された溝で、弥生時代中期末には埋没しているが、湧水を谷水田等に導くための灌漑水路の可能性もある。このSD-001・030は、丘陵を北に超えた裾部に位置する久保園遺跡第2次調査で検出した河川SD-23（弥生時代後期初頭埋没）と時期的に符合しており、丘陵裾を巡って連続する河川ないし水路である可能性も考えられる。

弥生時代後期の竪穴住居には、屋外へ伸びる小溝を設けたものが見られたが、住居が谷際に位置することから排水を意図した小溝と考えられる。近隣の席田遺跡群中尾遺跡や久保園遺跡第1次調査では、丘陵斜面を段状に造成して竪穴住居を営むものがあり、段の直下には排水溝を巡らせているが、本調査例はこれとは若干性質が異なるようである。

中世の土壇墓（SK-031）は1基のみ単独で検出したが、第1次調査でも同時期の青磁や白磁を副葬した中世墓2基が確認されており、一帯に広く中世墓が広がる可能性がある。第1次調査では11～12世紀の輸入陶磁器を初めとする遺物も出土しており、これらは第1次調査で報告されたように青柳種信が『筑前国続風土記拾遺』に書き残した「道乗寺跡」との関連や、あるいは「久保園」の名称から荘園に関連したものである可能性も考えられよう。

出土遺物のうち、特筆すべきは鐔形土製品である。席田大谷遺跡群第4次、井尻B遺跡群第11次、笠拔遺跡第1次、比恵遺跡群第7次（常松幹雄氏ご教示）に次いで福岡市内では5例目となる。形態は前3者が載頭方錐形、後1者と本出土例が載頭円錐形をなすものの方錐を強く意識した造りとなっている。席田遺跡群では赤穂ノ浦銅鐔型を含めると銅鐔関連の遺物が3例を数え、また大谷遺跡群第4次調査では石製銅鐔型模造品が出土する等、青銅器鋳造と深く関連した有力集団が存在したことを強く伺わせている。

また、今回の調査により、西側の福岡空港用地内にも遺跡が広がることは確実に考えられよう。

附. 久保園遺跡から出土した木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

久保園遺跡第3次調査では、弥生時代中期末の溝SD-030が検出されている。溝底からは、板材や諸手鍛未製品3点がまとめて出土しており、貯木遺構の可能性も考えられる。今回の分析調査では、このSD-030から出土した木製品の樹種同定を行い、木材利用に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、溝（SD-030）から出土した板材2点と諸手鍛未製品1点の合計3点である。

2. 分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・径目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3. 結果

樹種同定結果を表1に示す。各種類の解剖学的特徴等を記す。

- ・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) プナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高のものと同複合放射組織とがある。

4. 考察

溝内から出土した木製品は、全て広葉樹のアカガシ亜属であった。このうち、鍛については、これまで市内および周辺地域で行われた樹種同定結果でもアカガシ亜属の占める割合が高く、今回の結果とも一致する（嶋倉,1976a,1976b,1977,1981;松本・林,1979a,1979b;林・松本,1980）。同様の傾向は、西日本を中心に多くの遺跡で確認されており、アカガシ亜属が選択的に利用されていたことが指摘されている（島地・伊東,1988）。重硬で強度が高い材質を有すること等が、アカガシ亜属が選択された背景として考えられる。

なお、今回の木製品が出土した溝では、木材がまとめて出土していることから貯木遺構の可能性が指摘されているが、そうであれば鍛は未製品の状態で板と共に貯木されていたことになる。伐採後の木材を乾燥させずに加工すると、内部応力（乾燥応力）により反りや歪みを生じることになる（鷲見, 1982）。しかし、経験的には、木材は完全に乾燥させるよりも含有水分が多い方が加工は容易である。内部応力を緩和すると共に、完全に乾燥させないために水に浸けていた可能性がある。

表1. 樹種同定結果

遺構	試料名	器種	樹種
SD-030	R-1	板	コナラ科アカガシ亜属
	R-2	板	コナラ科アカガシ亜属
	R-3B	諸手鍛未製品	コナラ科アカガシ亜属

引用文献

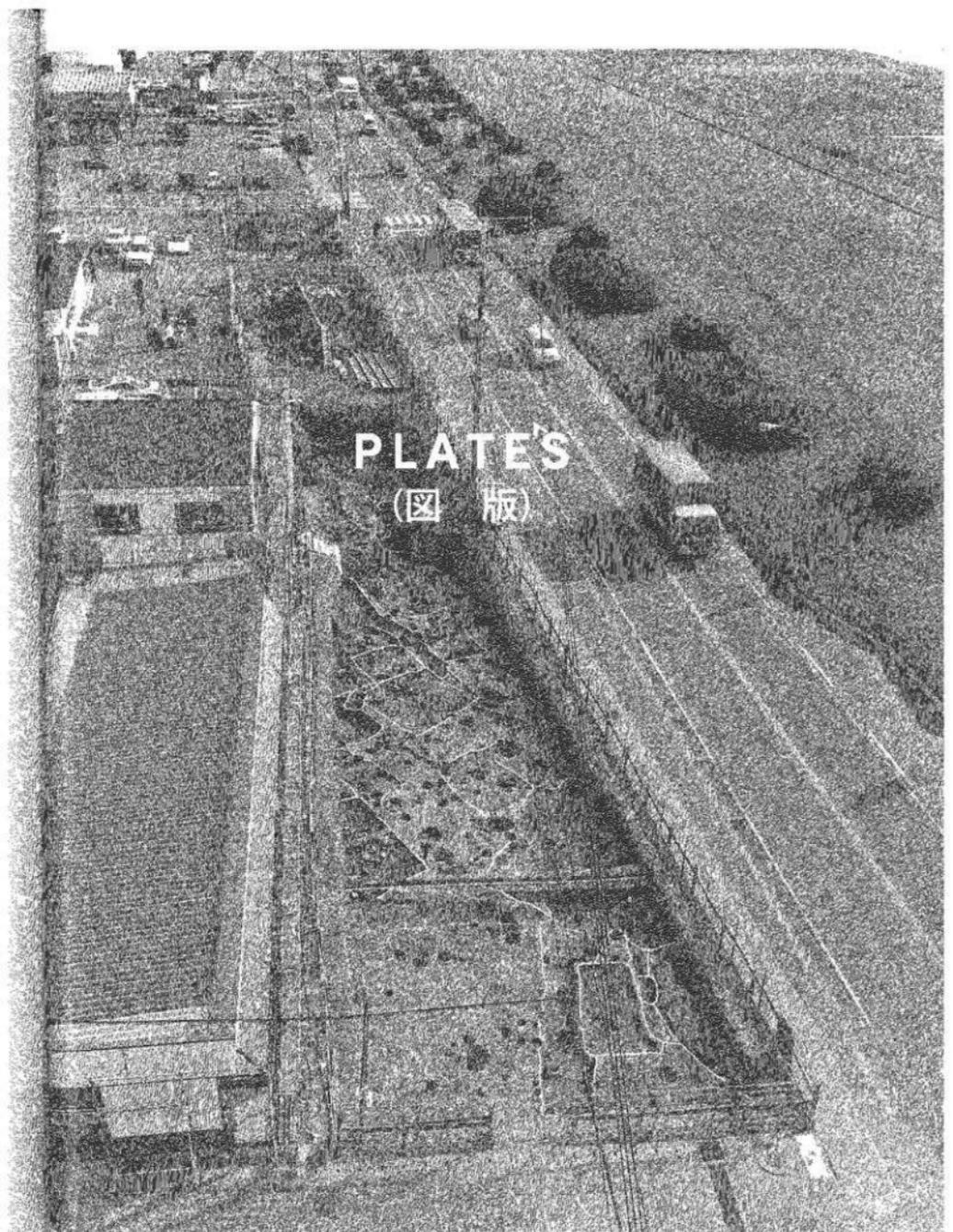
- 林 弘也・松本 昂, 1980, 瑞穂遺跡から出土した木製遺物の樹種同定, 「瑞穂 福岡市比恵台地遺跡」, 日本住宅公園, 209-216.
- 松本 昂・林 弘也, 1979a, 門田遺跡谷地区出土の木材片の樹種名について, 「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第11集 春日市大字上白水字門田・辻田所在門田遺跡谷地区の調査」, 福岡県教育委員会, 159-161.
- 松本 昂・林 弘也, 1979b, 辻田遺跡から出土した木材試料の樹種同定について, 「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第12集 春日市大字上白水所在辻田遺跡の調査」, 福岡県教育委員会, 144-155.
- 嶋倉 巳三郎, 1976a, 木材の材質, 「福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集 板付一市営住宅建設にともなう発掘調査報告書1971-1974」, 福岡市教育委員会, 67-75.
- 嶋倉 巳三郎, 1976b, 福岡市鶴町遺跡出土木質遺物の材質調査報告, 「福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集 福岡市西区大字免 鶴町遺跡」, 福岡市教育委員会, 63-68.
- 嶋倉 巳三郎, 1977, 福岡市板付遺跡H-5地点から出土した木製品の樹種について, 「福岡市埋蔵文化財調査報告書第38集 板付周辺遺跡調査報告書(4)」, 福岡市教育委員会, 111-114.
- 嶋倉 巳三郎, 1981, 樹種の鑑定, 「福岡市埋蔵文化財調査報告書第72集 福岡市博多区 那珂深ヲサ遺跡I」, 福岡市教育委員会, 67-70.
- 島地 謙・伊東 隆夫(編), 1988, 日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, 296p.
- 鷺見 博史, 1982, 木材の乾燥, 浅野 猪久夫(編)「木材の事典」, 朝倉書店, 209-226.

図版 1 木材



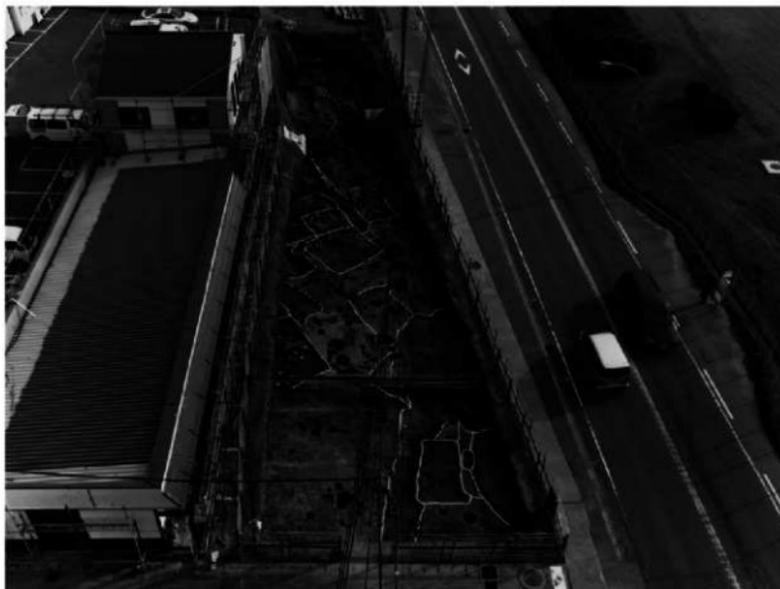
1.コナラ属アカガシ亜属(SD-030 R-1)
a:木口, b:径目, c:板目

200 μ m a
200 μ m b,c

An aerial photograph of an archaeological site, showing a grid of structures and paths. The image is in black and white with a grainy texture. The text 'PLATES' and '(図 版)' is overlaid in the center. The site appears to be a large, rectangular enclosure with internal divisions. The surrounding area is a mix of open fields and some buildings.

PLATES
(図 版)

久保園遺跡第3次調査区とその周辺(北から)



1. 調査区全景(北から)



2. 調査区全景(南から)



1. 調査区中央部(北から)



2. SC-006(西から)



1. SC-010(南西から)



2. SC-012-013(南西から)



1. SC-016遺物出土状況(北から)



2. SC-016遺物出土状況(南西から)



3. SC-016遺物出土状況(東から)



4. SC-016遺物出土状況(東から)



5. SC-016遺物出土状況(東から)



1. SC-016発掘状況(北西から)



2. SC-019(南西から)



1. SC-042・043(西から)



2. SC-045(北から)



1. SC-046(西から)



2. SC-049(北西から)



1. SD-001-030 (南から)



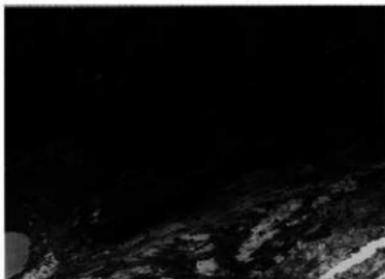
2. SD-001-009-030(北から)



3. SD-001発掘作業風景(北から)



4. SD-001遺物出土状況(南東から)



5. SD-030木製品出土状況(北東から)



1. SD-007(北から)



2. SK-004土層断面(北から)



1. SE-003 (東から)



2. SK-031 (西から)



1. SK-031副葬遺物出土状況(南から)



2. SK-031副葬遺物出土状況(南東から)

PL.12
SC-010



36

SC-012

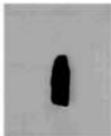


54

SC-014



83



90

SC-016



94



98



100



106



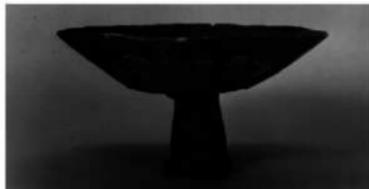
108



109



110



114



112



116



117



115



118



119



121



122



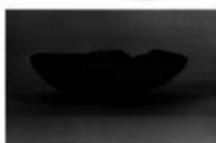
127



129



131



135



134



138



139



146



142



143

SC-046



207



206



225



226



227



230



232



231



236



237



240



241



243



244



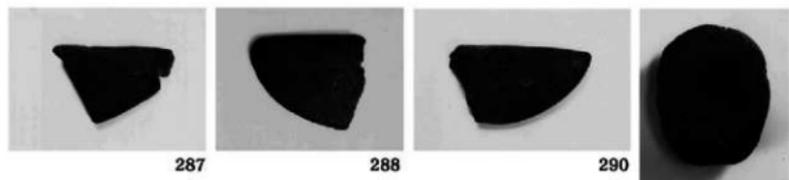
245



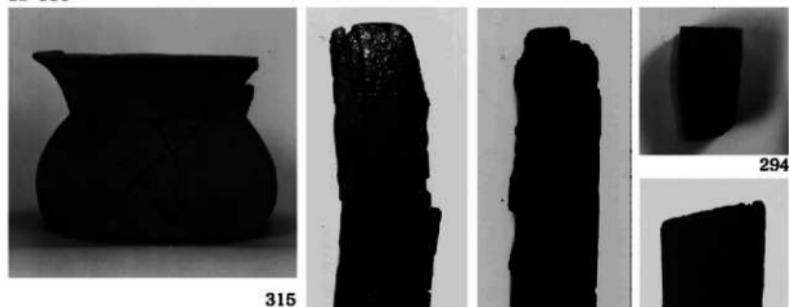
246



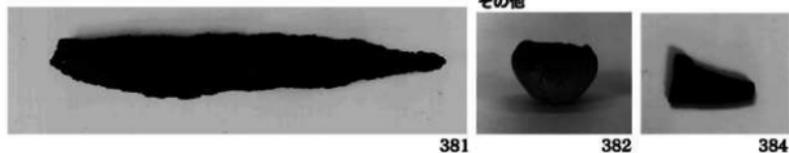
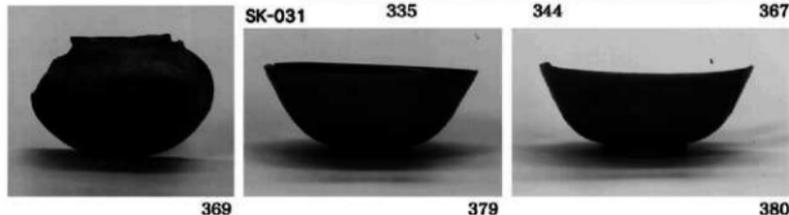
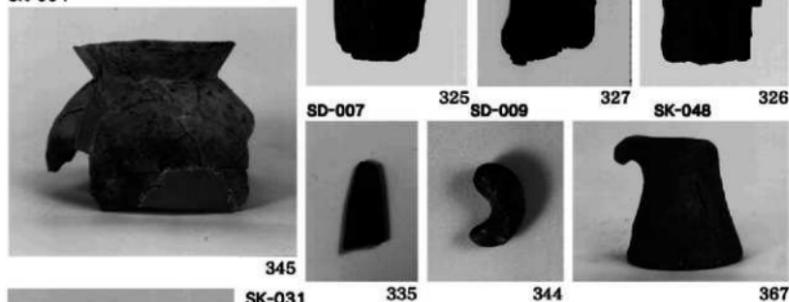
出土遺物・IV (縮尺不同)



SD-030



SK-004



その他

報告書抄録

ふりがな	くぼぞのいせき さん							
書名	久保園遺跡 3							
副書名	空港線関係埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	4							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第837集							
編著者名	吉武 学							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4667							
発行年月日	2005年03月31日							
ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
くぼぞのいせき 久保園遺跡第3次	福岡市 博多区東平地 2丁目4番地内	40132	0083	世界測地系 33° 35' 01"	世界測地系 130° 27' 24"	20030925 20031121	373	都市計画道路 福岡空港線 道路改良
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
久保園遺跡第3次	集落・ 墓地	①弥生時代 中～後期 ②古墳時代 前期 ③平安時代 ④鎌倉時代	①竪穴住居・溝・河川・ 土坑 ②竪穴住居・土坑 ③井戸 ④土壇墓	①弥生土器・石器・木製品・ 鉄製品 ②土師器・石器 ③土師器 ④土師器・輸入陶磁器・ 鉄製品		弥生時代を中心とする集落、 埴形土製品、 木製組手板木製品		

くぼぞの 久保園遺跡 3

—空港線関係埋蔵文化財発掘調査報告書4—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第837集

2005年(平成17年)3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 今井印刷株式会社
福岡市中央区赤坂1丁目2-18